

302
129

角落戰の研究

全

6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



角落戦の研究

全

302

129

名人關根金次郎監修



甬落戰の研究



東京金星堂版

目次

角落戦の研究……………

六段飯塚堪一郎

角落本組定跡……………

六段石井秀吉

角落の研究 (上手二五歩突)

講師 六段 飯塚勘一郎

元來二枚落以下の必勝たるは勿論、大駒落は悉く必勝でなければならぬ。けれどもそれは理論であつて、實際にはなか／＼理窟通りは行はれ難いものである。それは世の中の總ての物事がさうであるが、殊に将棋は戦であるから、餘程研究をして置かなければ必ず勝つといふ譯には到底いかない。

角落はその段差四段以上の開きがあるとは言へ、餘り無理な攻め方をして敵玉の廣を廣くして了つて入玉模様にもなられては甚だ勝味が乏しくなり、その結果終に指切つて了ふ様な事は屢々見受ける事である。とは言へ餘り自重に過ぎて反對に敵から猛襲される機會を與へたり等しては却つて實力の相違が果を及ぼして工合が悪いものである。即ち緩急共に宜しきを得なければならぬといふ譯なので

角落の研究 (飯塚勘一郎)

あつて、私の技に説く定跡は、是迄實戦に於て私の體験した處に依つて記述したものであつて、いさゝかなりとも、諸賢の實益に價する處があれば欣快此の上もない次第である。

尙角落は以上述べた如く手合の上に、下手方相當利益の多いものであるから、平手の氣分になつて指して居つても決して悪いものではないのである。要は、例を挙げれば、攻め過ぎる場合と、守り過ぎる場合と二つあつたとする、——勿論兩方とも悪いのであるが——さうした場合大駒落の事であるから、私は攻める方の勇氣を讀者におすゝめしたいといふ意味なのである。即ち怯らずに勇ましく戦つて貰ひ度いといふ老婆心である。それから角落本定跡(三間飛車)は他の棋士から説かれ

るやうであるから、茲では構圍ひ(上手二五歩突)を述べ
る事にした。

第一圖面迄の指手。

- ▲二六歩 ▲三四歩 ▲二五歩 ▲三三角
- ▲四八銀 ▲三二銀 ▲五六歩 ▲五四歩
- ▲四六歩 ▲四四歩 ▲三八金 ▲五二金

【講義】 上手二六歩は飛車の活用に資する意味である。
下手三四歩は角路を開けたのであつて、將棋道の定法とも
いふべき緊要の手である。上手二五歩は二六歩の繼續であ
る。下手三三角は敵飛車先の歩を交換させては、敵の飛車
先が通り且つ一歩持たれるから、その損失の大なる點は説
く迄もあるまい。上手四八銀は下手が如何なる駒組に來て
も、攻防共に應ぜらるゝ良手段である。下手三二銀は上手
四八銀に含む使命と同じ意味である。上手五六歩は五筋の
位を保つと同時に銀の活用を計る爲め。下手五四歩は五筋
の位を負けない爲であつて、將來角の活躍を計る上にも極
めて大切な要處である。上手四六歩は金銀の活動力を助

四、五兩筋の位置確保の意味である。

註 此の處下手四三銀と上れば即ち本定跡三筋飛車の駒
組である。

是にて第一圖面となる。

- ▲五七銀 ▲四三金 ▲四七金 ▲六二銀
- ▲三六金 ▲六四歩 ▲四五歩 ▲同歩
- ▲同金 ▲四四歩 ▲四六金 ▲六二銀

【講義】 上手七銀は五筋の守りだが模様に応じて戦線
に出動する事も出来る。下手四三金は豫定の準備である。
上手四七金は五七銀に伴ふ手である。下手六二銀は一番大
切な手であると同時に、誰もが一番間違ひ易い手順である
から、少し詳しく述べる。此の所八四歩ならば、上手六八
玉、下手八五歩、上手七八玉(但し此處で六二銀と上れば
同じ事ではあるが)下手四二角、上手三六金、下手三三銀
上手四五歩、下手同歩、上手同金、下手四四歩、上手四六
金の時即ち下手六二銀と上る順になると上手から五五歩と
突かれ、下手同歩、上手同金、下手五四歩、上手五六金の

けつゝ四筋の位を張る爲である。下手四四歩はその筋を突
き負けては敵の金銀がのんびり働けるに對し、自分の駒は
低く構へねばならない様な結果となる故、是亦五筋に劣ら
ぬ要點である。上手三八金は、形勢觀望の手段であるが、
敵の出様によつては、直ちに繰出して戦闘に立つ、激しい
意味も兼ねてゐる。下手五二金は構圍ひの準備であるが

(面局の迄右金二五は圖一第)

王 将 飛 車 香

九	香	桂		金	玉	銀	桂	香
八								
七	飛	車		飛	車	飛	車	飛
六				飛	車			
五								
四			歩	歩	歩			
三	歩	歩	角		歩	歩	歩	歩
二			銀		金		飛	
一	香	桂		金	玉	銀	桂	香

シナ 駒持手下

結果となり、五筋の歩を交換された上、徐ろに六筋の歩を
突き出され、以下金銀をその筋に集中され、非常に攻撃の
上に支障を及ぼす事になる。又上記の手順中、上手五同
金の處で上手に五四歩と打たれると、下手同金の外なく、
その時上手六六銀、下手六四角、上手五八飛と廻られ、下
手方は自玉の整理のつかない中、早くも戦が始まり、如何
程善戦しても若干の不利は免れない。

註 又上手が五四歩と打つた時、同金と取らずに下手六
四歩と突けば、上手五五金、下手六三銀、上手六六銀
下手五四金、上手五八飛と振られ、中央から攻め立て
られては矢張下手居玉の爲、損失を蒙る結果となる。
故に本譜の六二銀は特に私が注意を加へて説明をした次
第であつて、最も味つて戴き度い大切な處なのである。斯
く指して置けば、前記の如く上手から急に乘ぜられる惧れ
は更に無いのである。上手三六金は四筋の歩を交換して以
下三、四、五(三筋)の備へに用ひん爲である。下手六四歩
は以下六三へ繰上つて五筋の安全を計る爲である。上手四

四歩の時變化を求めると意味に上手七五歩なれば、下手六五歩と取り込まれて、是亦上手の不利である。故に譜の如く上手四五歩と着手したのは寧ろ機宜に適してゐる。下手七五歩は攻撃の持續であつて一番早い手である。四筋を氣にして構つてゐては緩い。上手四四歩は敵が構はずに攻めて来たから我々一旦取り込んで様子を窺つたのである。下手同金は好い手なのである。若し下手同銀では二筋から桂歩の手段で攻められるやうな事になり面倒である。上手四五桂の處、上手七五歩と取り、同銀の時上手七六歩なれば、下手六六歩、上手七五歩、下手六七歩、上手同銀、下手七五角、上手六六銀打、下手八六歩、上手同歩、下手六六角、上手同銀右、下手八六飛、上手八七歩、下手六六飛、上手同銀、下手七六金と強く指されると、上手の手中飛車角二枚で受ける手がない。又上手七六歩と打たず上手七四歩なれば、下手六六歩、上手七三歩、下手六七歩、上手同銀、下手六六歩と強く指され是亦上手大いに悪いのである。故に譜の如く自營を顧みず、上手四五桂と跳ねたのは

(面局の迄歩七六は圖六第)

可歩桂 駒持手下

九	星	龍					星
八							
七				龍	王	龍	香
六	香			香	香		
五							
四			歩	金	歩	角	歩
三	歩	歩	金			桂	
二		玉					飛
一	香	桂					香
	二	三	四	五	六	七	八

歩歩桂 駒持手下

置くのである。然し下手の手中に桂を収められるから、別段徳をしたとも言へないのである。下手三三同金の所を同桂と取つても構はないが、譜の方がシツカリしてゐるか

ら安全である。上手七六金はスナナリと桂得をされては耐らないから危険は承知で斯く指す外はない。下手六七歩と打つて第六局面となるが、此の手は前々からの攻撃の繼承

(面局の迄ルナ飛七八は圖七第)

可歩桂 駒持手下

九	星	龍					星
八							
七							
六	香			香	香		
五							
四			歩	金	歩	銀	桂
三	歩	歩	金				
二		玉					
一	香	桂					
	二	三	四	五	六	七	八

歩歩桂 駒持手下

であると言へ、斯ういふ場合に應用して貰ひ度い所謂手筋といふものである。

飛六七玉 五七角 飛同 銀 八七飛

仕方がない。下手七六歩の所で一旦四五金と切つて、上手同金の時に攻めても差支はない。要は何れでもいゝのである。上手三三桂は手駒を持つ爲と敵陣を幾分でも壊して



【講義】 上手六七玉は説明する迄もなく、當然の手である。茲で下手五七角は前譜下手六七歩の輕妙な手段によつて敵玉を釣り上げてあるから、飛車を敵地に侵入させるべく決行したのである。即ち第七局面となり、下手方完全に大勢を制した局面となり、以下上手に攻防共に術策の施し様はない。尙これから先は是迄指して来た氣分で寄せたなら、さのみ手数も要せず勝つ事を得るであらう。

然し乍ら尙ほ念の爲め以下の指手について、更に二三説明を施す事にする。局面の場合上手七八銀と凌げば、下手は直ちに五八銀打と強く迫るべく、その時上手同玉なれば七八龍と指して以下六八銀なれば、下手六七歩迄である。若し又五八銀打の折、六八玉なれば六七歩打と指し、上手同銀、下手同銀ナル、上手同玉、下手七八銀、上手五八玉の折下手は七六龍と敵金を捕つて置けば、次に六七銀ナルの攻手があるから、矢張上手の敗局である。

以上述べた如く、上手としては、自陣が亂れてゐるので防ぐ事となつては益々不利益故、自陣は捨て置いて攻勢に

出た場合の上手の應手を説いて、此の定跡の研究を終りとす。

- ▲二四歩 ▲同歩 ▲二二二歩 ▲三二二玉
- ▲四四五歩 ▲四三三金引にて下手必勝。

【講義】 上手二四歩と突いて攻撃に出るのは、下手が受け損ずれば忽ちそれに乗じて奇勝を博しようとする恐ろしい手段である。下手同歩と取つたのは穩かである。上手二歩の所は、本来なら二五歩と繼歩をして攻めたいのだが、此の場合には自營が餘りに危険であり、さういふ緩い手を指してゐては、到底間に合はないから直接譜の如く打つて下手の應手を見たのである。下手三二玉と避けたのは當然ではあるが非常に良い手である。

此の時若し同玉と取つても、同金と取つても、上手から四一角と打たれる結果となり、七四に居る銀をとられる手及び三二銀と打つて必死をかけられるやうな危険に陥つて勢ひ敵玉に極力攻めかゝらなければならなくなり、棋勢が大層急になつて来る。上手四五歩は決戦の策。下手四三金

櫓組の巻

前號に角落櫓組を説いたが、單にあの一局のみの研究では到底充分といふことは言へない。故に更に私の最近の研究を加へて、逐號詳しく説いてゆきたいと思ふ。それによつて諸兄が鋭意研究されたなら、必ずや角落に對する必勝者になれる事と信じて疑はない。

故に私もその決心の下に微力大いに務める心算で居ります故、諸兄亦御熱心に私の述べた處を玩味して、會得せられむことをお願ひいたす次第であります。

第九圖面に至るまでの指手。

- ▲二六歩 ▲三四歩 ▲二五歩 ▲三三角
- ▲四八銀 ▲三二銀 ▲五六歩 ▲五四歩
- ▲四六歩 ▲四四歩 ▲三八金 ▲五二金
- ▲四七金 ▲四三三金 ▲五七銀 ▲六二銀
- ▲三六金 ▲六四歩

【講義】 第九圖面迄に至る指手についての説明は、既に

角落の研究 (坂本第一版)

引と指して、自陣を更に堅實にしたのである。最早上手から攻めて来る手は盡きたのであるが、若し此處で更に四四銀と攻めて来ても、下手七八銀、上手五八玉、下手七六龍にて差支へなく、又五二角なれば、同じく前の攻め手順にて優勢である。上手五二角の所、五二銀なれば、一旦四二金引と指して上手方絶對指切りである。

總じて角落に限らず、將棋を指してゐる場合、敵がどう受けるかしらと思つてゐる所で、受けないで攻めてくる事がある。それはこちらに攻め手があるからではなく、自分の方にいゝ受手がないから、といふ場合が多いのである。であるから一旦自分の方を受ける丈受けて置けば、敵は又元の自分の苦境に立ち戻るのである。此の邊の呼喚は勿論實力の高低にまつ外はないけれども、さういふものであるといふ事を、略ぼ承知してゐられたなら、對局の上に相當益する所多からうと思ふ。

前號に於いて詳しく述べておいた。本誌は會員組織の事故、そんな事はあるまいと思ふが、萬一前號を見ないで本號から御覽になる方もありはせぬかといふ、私の老婆心から更に一々説明をしようと思ふ。既に前號御覽の諸兄に、重複の嫌ひもあるが、悪しからず思召しの上更に今一度御研究下さらば幸甚である。

上手二六歩以下二五歩と突いたのは、下手が櫓に組む場合二五柱と跳ねて所謂櫓崩しの戦法を採るといふ手を無視して損のやうだが、茲で直ちに突かないと下手から三二銀以下三三銀と指され一手の利益を得られる事と、今一つは四筋と協力して此の筋から將來敵の玉頭に強襲する場合にはどうせ突かないではならない歩であるから、今こゝで突くのが却つて徳が多いのである。

下手方最初角路を開けて、次に三三角と受けたは二筋の歩を交換されない爲であつて棋道の定法ともいふべき肝要の手である。敵に飛車先の歩を切られる事は、多くの場合いけないのだが、角落に於ては特に禁物である。

上手四八銀、下手三二銀は共に、どんな變化にでも應じられる正しい指方である。上手五六歩以下下手四四歩迄は互に其の筋の位を保ち、金銀の活動範圍を廣くした手であ

(面局の迄歩四六は圖九第)



つて、どちらが位負となつても指し悪い局面になる。上手三八金は以下二七又は四七から繰上つて歩の交換をして中原に活躍せんとする準備である。下手五二金は右は櫛に組む仕度。上手四七金及下手四三金は共に豫定の手段。

へられては指し悪くなる故それを避けたのであつて、茲に至つて、上手方五七銀の時下手六二銀の大切な事を説いた理由がお判りになる事と思ふ。上手三六歩は徐ろに攻撃の準備であつて、茲で若し五五歩と指しては同歩、同金、五

(面局の迄銀三三は圖十第)



二飛、五六金、五五歩、四六金、五四銀と指されて、次に四五歩と壓迫を加へられる順序となり大層悪い。下手四二角引は、三五歩と突かれてからでは間に合はなくなるから

角落の研究 (一、飯塚勘一郎)

上手五七銀は五筋の備へであると同時に、敵の模様によつては戦線に立つて活躍する意味も含んでゐる。下手六二銀は櫛圍ひ中一番肝要な點であつて、此の手を指さずには他の手を指してゐては敵金に早く活動されて、五筋の歩を交換され末に至り敵を攻撃の場合大いに支障を及ぼす事になる。上手三六金は豫定の進行。下手六四歩は前述の意味の繼承であつて、五筋の歩を敵に換はせない準備である。第九圖面以下の指手。

- 四四歩 同歩 同金 同四四歩
- 四六金 同六二銀 同三六歩 同四二角
- 二五歩 同同歩 同同金 同三二銀

【講義】 上手四五歩は一步手中に收めると同時に、敵の模様により五筋の歩を交換して金を五六に据へて、將來六七兩筋より敵が攻撃に出た場合、守りに用ひんとする深算である。下手同歩以下上手四六金は當然の應酬である。次に下手六三銀は前にしばし述べた如く、五筋の歩を換

危険を避けたのである。上手三五歩、下手同歩、上手同金、下手三三銀は至當の順序である。但下手三三銀の所三四歩と打つては二四歩と突かれよくない事は一見してお判りになる事と思ふ。

上手第十圖面の場合二四歩と激しく攻めても効果はないのだが、下手としてはその應酬法を知らない、上手の爲奇勝を博されるやうな事もある故、参考までに變化圖挿入して手順を説いて置かう。

- 二四歩 同銀 同二二歩 同三二金
- 二二歩 同三五銀 同一一歩 同六五歩

【講義】 即ち上手二四歩と突く。下手同銀の處同歩と取つてはいけない。若し同歩と指せば二二歩と打たれ、下手三四歩、上手二二歩ナル、下手三五歩、上手一一との結果となり、次に金を働かれるやうになつては、下手の力として混戦となつて損である。故に同銀と取る。上手二二歩と打つのは豫定の策である。此處で同金では同角と先手に出られて下手の飛車路が通り、指す手に困る。その時銀

を保護する爲五八金と上つても三二飛と廻られて三七歩の時五五歩と突かれる手及び三三桂と活躍される手があつて上手方大層不利である。下手三二金は穩健な好手である。直ちに三五銀と指しては敵飛車に成り込まれて損である。

(面局の迄歩五六は圖化變)



上手二一歩ナルは當然。下手三五銀と敵金を捕つて駒徳をする。上手一と香車を捕つた時下手六五歩と突いた變化圖迄にて下手大いに優勢である。變化圖の場合上手五八

(面局の迄飛二八は圖一十第)



下手八五歩、上手七八玉は双方至當の應酬である。下手七四歩は七筋に位を張る意味。上手七六歩は位負けせぬ意味。總て棋戦は位負けをしては駒の運用を狭めるので指し悪いものである。下手八六歩と飛車先の歩を切つたのは飛車の

活用を容易ならしめる手段。上手同歩、下手同飛、上手六七金は共に豫定の手順なのである。そこで下手八二飛と引いたのは、八四飛と引いて置く方が徳だと思はれる方があ

金と上る。下手六四角と覗いて三七歩と受けた時三六歩と打つて必勝である。

本文に戻り第二圖面以下の指手。

- 三六金 ○三四歩 ○六六歩 ○三二金
- 五八金 ○八四歩 ○六九玉 ○八五歩
- 七八玉 ○七四歩 ○七六歩 ○八六歩
- 同歩 ○同飛 ○六七金 ○八二飛

【講義】 上手三六金は(變化圖挿入)前に述べた如く二四歩の急戦は無謀であるから、一旦斯く指して自重するのが至當である。下手三四歩は三筋の受けであつて放任して置いて上手に三五歩と打たれたれば位を損じて指悪いのである。上手六六歩は六筋の位を維持した大切な手であつて、下手に六五歩と位取りをされると、自分の駒の活動力が縮少されるに反し、敵駒の活躍を容易ならしめて悪い。下手三二金は櫛組の完成手段。上手五八金は自陣の防衛を計ると同時に、金の活動範圍を廣くする手段。下手八四歩は自營は堅固になつた故飛車の活動を計る手である。上手六九玉、

るかも知れんが、將來六七兩筋から、敵陣を攻める場合、飛角を自由に捌く事が出来ないで却つて悪いのである。第十一圖面以下の指手。

- 八七歩 ○四一玉 ○一六歩 ○三一玉
- 四六金 ○二二玉 ○三七桂 ○九四歩
- 二九飛 ○七三桂

【講義】 上手八七歩は防備。下手四一玉と安全な場所へ移すのである。上手一六歩は後に其筋よりの攻撃の準備であると同時に敵角に飛び出されるのを未然に防いだ攻防兩様を兼ねた緊要な手。下手三一玉は順序。上手四六金寄りには、敵は早晚七三桂と跳ねて六七兩筋より攻勢を計つて来る。その時桂を交換して三六へ打つて逆襲する素地を作つて置くのである。尙今一つには三六金の儘三七桂と跳ねると、模様によつては強く三五歩と金銀の交換を挑まれ、桂頭を脅かされる手もあるので、三筋の位を損じるゆえ一旦譜の如く避けて置くのは含みある指手。下手二二玉は愈々安全な所へ圍つたのである。上手三七桂は金桂の力を合せ

飛車を援助して、敵の堅陣を破らんとする準備。下手九四歩は前線には此のまま七三桂と跳ねて、攻撃手段を採つたのを説いたのであるが、それでも差支へはないのであるけれども、激戦中角を追はれた時、そこへ避ける手と九筋の

(面局の迄桂三七は圖二十第)



攻撃との兩用の意味を兼ねてゐる體かな手である。上手二九飛は飛車を廣く攻防に用ひんとする意味。下手七三桂は飛角銀の協力によつて六七及九筋より敵を攻撃する手段。

- 七七桂 ○七五歩 ○同歩 ○六五歩
○同桂 ○同桂 ○同歩 ○七五角

【講義】 上手七七桂は防備。下手七五歩は自陣の駒組が完備したので、いよく攻撃に移つたのである。角の活用を計。上に大切な手であるが、六筋の歩を突く前に此の筋を先に突く方が早いといふ事を間違ひてはならぬ。桂を交換された後に突いては上手は捕らないで他の手を指して来る。上手同歩、下手六五歩は當然の手順。上手同桂の所同歩と取ると七五角と出られ上手七六歩、下手九三角の次に七四銀の攻めがあるから、桂を交換して三六に利用して逆襲を企てる爲譜の如く同桂と指したのである。尙下手六五歩の挑戦に對し七六金と廣く變化を求め手もあるが、下手から直ちに七四歩と合されて同歩、同銀、七五歩と指しても、強く同角と切られると、自玉の頭に疵が出来て大いに悪い。初心の方はよく大駒を惜しむが、敵の玉に迫る場合などは前に利く駒を残して置かなくては攻めにくいから

(面局の迄角五七は圖三十第)



- 四五歩 ○七七歩 ○同玉 ○八六歩
○八八銀 ○五三桂 ○六六銀 ○七四銀

注意をして載きたい。特に角落の如き大駒落の場合などは攻める時には、飽くまで強く飛車でも角でも捨て、敵玉に迫る手段に出れば勝てるものである。これは参考までに一寸附記した次第である。以下、下手七五角迄は豫定策。

【講義】 上手四五歩はこゝで七六歩と打つても、九三角と引かれて以下比較的平凡な定跡となつて同じ事である故紛れ多い局面に導き、下手の應手如何によつては三七にゐる桂と手駒の桂とを利用して、一気に敵を破壊しやうとする手段。下手それには構はず七七歩と打つのは最上の策。上手同玉は餘儀ない手である。こゝで八八玉なれば下手九五桂と打つて上方潰滅に陥る。下手七七玉を釣り上げて置いて八六歩と打つたは、きびしい手段である。上手八八銀と極力防ぐ。下手五三桂は四筋の防ぎを兼ねて、六五へ跳躍せんとする手であつて、かゝる局面に於ける手筋である。上手六六銀は已むを得ない。下手七四銀は進撃の持續であつて、當然の攻手である。此の場合角を九三へ逃げたり六六角と切つたりしては、混戦になる恐れがあつて危険である。譜の如く七四銀と指せば、勢ひ六三にゐる遊銀が活動する結果となるのだから指し切りとなる懸念はないのである。

以下八七歩と成つて次に六五桂其他の攻撃手段があつて

下手方の玉側は尙堅固なれば、上手方最早如何に努力しても到底勝算はないのである。第十三圖以下第十四圖に至る迄の下手強襲法は充分繰返して研究をして戴き度い。一手たりとも攻めに懸つた場合緩い手を指す事は許されないの

(面局の迄銀四七は圖四十第)

八	香							香
七						王	飛	
六			飛		王	角	歩	
五				歩	歩	銀		
四				歩	金			
三				歩	金			
二				玉			飛	
一	香	桂						香
	一	二	三	四	五	六	七	八

シナ 駒持手下

であつて、悉く強い攻めと、烈しい含みとを持つてゐなければいけないのである。

念の爲第十四圖面以下、下手の攻撃に付いて二三詳述し

下手 櫓組 (上手二五桂早跳)

初號以來下手櫓組の指方を説いて来たが、本號も亦その同じ櫓組で異つたものを説くことにした。

前號迄は、上手が二五歩と突く指方を説いたが、本號に説く指方は上手二五歩と突かないで置いて、機を見て下手の端の方、即ち玉の小鬘を破壊せんとする策戦の將棋であつて、それに對する下手方の受け方も亦、一通りや二通りではないのであるから、参考の爲今回は特に面白いと思ふものを詳述した。本來此の二五桂跳は、上手としては下手の駒組の餘り整はない中に破つて了はうとするのであつて、なるべく早く跳ねる程、紛れも多く上手の探るべき策としては至當なのである。とは言へさう無暗に桂馬を跳ねたとて御承知の通り俗に「桂馬の高上り歩の餌食」といふ格言もある位だから、容易に成功する筈はない。故に何時でも桂を跳ねられるやうにして置いて、上手としては今が丁度いゝ時期だと思はれる機會を狙つて奇襲に出る譯である。

て置かう。
上手七六歩なれば、下手八七歩ナル、上手同銀、下手六角、上手同金、下手六五桂、上手同金、下手同銀にて必勝である。

又上手七五銀なれば、下手同銀、上手七六歩、下手八七歩ナル、上手同銀、下手六五桂、上手七八玉、下手六六歩迄にて是亦必勝である。

尙又上手自營に構はず四四歩なれば、下手四二金引にて上手からは次に策の施しやうなく絶對の勝である。

X	X	X	X
X	X	X	X

故に下手としては可なり油斷の出来ない將棋であつて、絶えず注意を怠る事が出来ない。それなのに此の將棋は漫然と指し進んで、上手にその好機會を與へたかの如く見えて、實は反對に上手が下手の衝中に陥つたといふやうな形のものであつて、角落の實戦中屢々現れる將棋である。

第十五圖面に至る迄の指手。

- ①二六歩 ②三四歩 ③四八銀 ④三二銀
- ⑤五六歩 ⑥五四歩 ⑦三八金 ⑧五一金
- ⑨三六歩 ⑩四四歩 ⑪三七金 ⑫四三金
- ⑬四六金 ⑭八四歩 ⑮六八玉 ⑯八五歩
- ⑰七八玉 ⑱三二銀

【講義】上手二六歩と突き、下手三四歩と突いて角路を開けるのは、既に諸君が御承知の通りの意味である。次に上手四八銀と上るのは、今迄通り二五歩と突けば、下手櫓組に對しては一手の利益があるのだが、今回は後に至つて桂を活躍させやうといふ心算であるから、特にそのまゝにして置いて譜の如く指すのも、亦一つの戦法なのである

下手三二銀は敵は此の前と變つた出様であるが、兎に角構に組む考へとすれば一旦角を上らないで、直ちに銀を三三へ上る事を得るから即ち一手の利益があるのだから、定法

(面局の迄銀三三は圖五十第)

九	皇	桂			王	桂	皇		
八		飛		飛					
七	香			香	香	香	香		
六		香	香	香					
五							步		
四			步	步	步				
三	步	步	銀	金		步	步		
二		角					飛	香	
一	香	桂		金	玉	銀	桂	香	
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

シナ 駒持手下

として必ず用ひなくてはならない大切な手である。上手五六歩と突き下手五四歩と受けたのも、双方此の場合當然の應酬。次に上手三八金は下手がまだどういふ策戦であるか未定であるから、斯く備へるのが最も正しい事になつてゐ

ある。

第十五圖面以下の指手。

- 三五歩 ○同歩 ○同金 ○三四歩
- 三六金 ○三一角

(面局の迄角一三は圖六十第)

九	皇	桂			王	桂	皇		
八		飛		飛					
七	香			香	香	香	香		
六		香	香	香					
五							步		
四			步	步	步				
三	步	步	銀	金		步	步		
二		角					飛	香	
一	香	桂		金	玉	銀	桂	香	
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

シナ 駒持手下

【講義】上手三五歩と交換を挑んだのは、早く一步持つて置き、以下桂を跳ねて活動する場合に利用せんとする手段である。若し茲で五筋の歩を替へた方が面白いと思つて

る。下手五二金は愈々「自分は構圍ひである」といふ事を明らかに示した態度。上手三六歩は以下譜の如く金を戦線へ繰り上げる準備であるが、下手が敵飛車の當りを利用して、五五歩とでも突いて来れば、同歩、同角、三七金と應じて、なるべく混戦模様に向かうといふ意味も含んでゐる。下手四四歩は構に組む場合當然突かなくてはならない手である。上手三七金は此の處四六歩と受けたのでは、餘り平易な形となつて、紛れを生じにくいので斯くの如く指すのは、少しでも變つた模様を引き入れやうといふ手段なのである。下手四三金は手順。上手四六金は三筋乃至五筋から攻勢をとる豫備行動。下手八四歩と飛車先の歩を突いたのは、自分も攻勢の仕度に取り掛つたのである。上手六八玉は兎に角安全地へ移すのである。下手八五歩は豫定ではあるが、早く飛車先の歩を換つて飛車道を通し、且つ一步手中に收めて、總ての方面に利せんとする手段。上手七八玉は手順。下手三三銀と上つたのは、敵玉が安全な方面へ移動したから、我又堅陣を作つて玉の安全を期する手段で

五五歩と突けば、下手は同歩と應じ上手同金の時五二飛と廻轉して指せば、自然その方面の位を張る事を得るのである。故に上手は五筋の歩を換はらんとするのは拙策である。下手同歩上手同金下手三四歩上手三六金は双方共當然の指手である。次に下手三一角と引いたのは、飛車先の歩を飛車で換えないで角で交換をすれば、一手も費さずにその角を四二の好位置へ据える事が出来る計算となる故此の場合手筋である。尙又模様によつては、六四へ進出して敵飛車を脅かす手段もある。譬へ一手でも徳があると思つたならそれを利用して置けば、直ぐに何の影響もないやうでも、何處か末に至つてその相違は生じるものである。然し餘りそんな事のみ拘泥して形に構はず指すのも宜しくはない。

- 一六歩 ○四二玉 ○六八金 ○二二玉
- 五七銀 ○六一銀 ○一五歩 ○二二玉

【講義】上手一六歩、早晚桂を活用の際、此の歩が突き進めてなくては攻勢不能であるから突くのである。下手四

二玉は兎に角居玉は危険であるから、安全な場所へ移さんとする手段。上手六八金は玉側の堅め、下手三二玉も前意味に同じ、上手五、七、銀は四五六三筋の守備を兼ねて攻

(面局の迄玉二二は圖七十第)

九	皇	飛					飛	王	皇
八		銀					王	飛	
七					飛	王	飛	王	
六					飛	王	飛	王	
五	飛								歩
四					歩	歩	歩		
三					歩	銀		歩	
二	歩	歩	銀	金			歩	歩	飛
一	香	桂	角	金				桂	香
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

シナ 駒持手下

撃にも利用せんとする計畫である。下手六二銀は形を整へるのである。上手一五歩は一六歩と突いた時の氣分の繼續手段である。下手二二玉と寄つたのは、愈々完全な構圍ひに組み終らんとする手段。

成する。上手四六歩は都合によつては桂馬を利用して、その筋の方からも攻撃をとらんとする準備。下手八六歩と突いたのは、最初の目的通り角を以てその歩の交換し、手順に四二に角を引き据えんとする手段。上手同歩は餘儀ない。下手同角は前述の如く豫定の行動であるから、當然ではあるが、此の處飛車で取つては非常に紛れ多い局面となり、形勢を損じる事になる。それによつて敗局になるといふ程の事もないが、角で取れば何事も無い所を、飛車とどつて渾沌とした局面にしては誠につまらない。上手一四歩と突いたのは、此の講の初めに書いて置いた如く、目下敵角が飛車と一つ筋にゐるから、即ち機會好しとして挑戦したものである。下手此處へ疵を生じては堪らないから、同歩と應じるのは當然。その時上手一三歩と打つのは、端から攻勢をとる場合の手筋である。下手同香の處でその外玉及び桂馬でとる二通りの手があるが、玉で取つたのでは二五桂と跳ねられて、兎に角銀を一枚取られる事になる。さう指したとしても敵は多大の犠牲を拂つての上、銀桂の交換なの

- 三三七桂 ○三二一金 ○四六歩 ○八六歩
- 同歩 ○同角 ○一四歩 ○同歩
- 一三歩 ○同香

(面局の迄香同三一は圖八十第)

九	皇						飛	王	皇
八		飛					王	飛	
七							王	飛	
六							王	飛	
五	飛								歩
四					歩	歩	歩		
三					歩	銀		歩	
二	歩	歩	銀	金			歩	歩	飛
一	香	桂						桂	香
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩歩歩 駒持手下

【講義】上手三七桂は豫定の手段ではあるが、各方面の應接が一段落を告げたので、愈々その最初の目的の行動に取り掛つたのである。下手三二金と締めて全く構圍ひを完

であるから、格別の事もないのであるが、下手としては多少上手から働かれた形となる。そこで今一つの同桂の手段はどうかといふと、直ちに一四香と走られる手と、此の儘にされて置く手と二通りの手段を上手に與へて面白くない一四香と走られたのでは兎も角、一二歩と受ける外なく、何時でも桂香の交換の權利を上手に持たれる事になる。又其の儘捨て、置かれるのは、將來上手に歩を多く持たれた場合、只取られるやうな味ひを残される。故に同香と走つたのである。けれども以下の譜によつてお調べになれば、判る通り香車を渡すと、目前下手は角の顔に槍玉を頂戴する手があるから、それ以下の指手について心得がなければ下手潰滅の状態である。此の定跡はこれから先の味ひを會得して敵が眼目であるから、そのお心算で御研究を願ひたい。

第十八圖面以下の指手。

- 二五桂 ○二四銀 ○一三桂 ○同銀
- 八八香 ○八五歩

【講義】 上手二五桂と銀桂兩取りに跳ねたのは、當然の成行である。上手は大體香車を捕つて下手を酷い目に遇せてやらうと思つてゐるのであるから、下手二四銀と出るの

(面局の迄歩五八は圖九十第)



は香車を取られても差支ないとすれば、堅實な手段である。上手一三桂ナル及下手同銀は共に至當の應酬、次に上手八八香打は此の場合至當である。といふより寧ろ仕方のない手なのである。斯ふいふ處まで指し進んで角を捕る手の善

(面局の迄桂五七は圖十二第)



全であり、且敵玉のすぐそばでの戦ひなら、少々重い感じの手であつても、却つて斯ういふ様な手が立派な好手筋なのである。上手としては混戦になつてゐるやうな局面なら軽く玉の早逃げでもして凌ぐといふ方法もないではないが、

角落の研究 (飯塚勲一郎)

悪に氣が付いたとしても、既に端の戦に於て幾多の損失を犠牲にして取り掛つたのであるから仕方がない。下手角を逃けたのでは飛車を取られて了ふのであるから、八五歩と支柱をあてがつたのは好手である。此の場合どうせ角は取られるものと思つて捨て置けば、下手に八六香ととられ同飛の時八七歩と打たれて大いに悪い。上手八六同歩の所下手が飛車で取つてはいけなさと述べたが、今該の局面に依つて、それは判然した事と思ふ。

第十九圖面以下の指手。

- 八六香 同歩 ○八八歩 ○八三香 ○七六角 ○七五桂

【講義】 上手八六香は當然である。此處で取らずにゐては、今度は角に逃げられて了ふ。下手同歩と取るのも亦至當である。上手八八歩と受けるのは已むを得ない、此の所八八銀と應じて同局同じ事になる。下手八三香と打つて飽くまで攻撃の手をゆるめなれないのは非常に宜しい。斯ういふやうな手は多くの場合重い手であるけれども、自玉が安

そこで下手が尙も烈しく七五桂と迫つた第二十圖面にて、如何とも上手方に術策の施しやうがない。

以下一枚餘計利いてゐるのであるから、下手方は八七歩と化つて、同歩、同香の次に玉が逃げたなら、八八歩と手堅く攻めて必勝である。何に致せかなり丁寧な事をして、攻められてゐて充分間に合ふのであるから、是にて勝敗の數は確實に定つてゐる次第である。

本局は以上述べた如く、上手方が悪い手を指した爲めに案外たやすく下手の勝ちになつたのだが、上手が端から無理な攻勢を取らず穩かに八七歩と打つて、角を追つた場合の事に就いて参考圖を挿入して少しく述べて置かう。

本文第十七圖面以下の指手の中上手一四歩の處で

- 八七歩 ○四二角 ○四五歩 ○同歩 ○同金 ○四四歩 ○四六金 ○七四歩 ○七六歩 ○六四歩 ○六六歩 ○六三銀

【講義】 上手穩かに八七歩と打てば、即ち下手は四二角と引く、上手四五歩と交換を挑んで、下手同歩上手同金、

下手に四四歩と打たせ、四六金と引いたのは順當の指手で
あるが、此の所で桂を二五へ跳ね、下手の銀が逃げたら四筋
から攻勢を取らんとする意味で、四八飛と直接廻つて来た

(面局の迄銀三六は圖考參)

九	皇					爵	王	皇
八		飛				王		
七			桂		爵		王	皇
六			王		王	王	王	皇
五	皇							
四			歩	歩	歩	歩		
三	歩		銀	金	銀			歩
二		歩	玉	金	角			
一	香	桂					飛	香
	一	二	三	四	五	六	七	八
		歩	駒	持	手	下		

ならば、下手は直ちに三五歩と敵金の頭を突くのが大層宜
しい。即ち上手同金下手三四銀と交換を挑むと上手同金の
一手であつて下手同金と上る。そして次に上手は桂頭に疵
があつて大いに不利な局面となる。故に四五歩と一旦交換

櫓組の巻

前號には上手が二五歩と突かないで置いて、桂馬の活用
を他日の含みに残してあるものを説明した。その時下手が
上手の術中に陥つたが如く見えて、端にて桂香の交換とな
つた時、八六へ進出した角を捕獲され一見下手不利の如く
で、却つて上手大いに悪いものであつたが、その時上手が
端から仕掛す、穩かに八七歩と受けた場合の下手方の攻撃
法を本號には述べる事にする。

角落以上の將棋は角落に限らず、飛落であつても同じ事
であるが、平手戦や香落戦と異つて、無理をしては勿論よ
くないけれども、或る場合には一氣に攻め立て、優勢の局
面に導く事を得るものである。つまり上手が大體優勢に見
える將棋でも、大駒など捨てられて玉邊に迫られると、ど
うにも仕様のない局面になつて了ふことが多い。大駒落と
いふ強味が即ち終局まで強く響いてゐるからである。

をしてさういふ危険を避けたのは至當である。尚以下参考
圖迄の手順は格別の六ヶ敷い點もないが、大體に於て前々
號及前號に説いたものと、相似た局面になつて来たのであ
る。たゞ上手の二筋の歩が一手少く突いてあるといふ點の
相違のみである。

尙此の参考圖以下の指手順については説くべきであるが
本號は紙數の都合に依り到底多岐に涉つて説き盡せないか
ら、次號に於て詳しく述べる事に致します。それに本號は
上手が端から無理な攻め方をして来た時の、下手の攻防法
を説く心算であつたので、その方に多く紙數を費してしま
つたから、次號以下説く處と相まつて、以て、上二五桂
跳ねの手段に對する下手方の應酬法の會得を完せられん
事を今よりお願いいたして置く次第であります。

秃筆以て汗顔の至りではありますが、何卒最終まで御愛讀
下さる様特に御願ひ申し上げます。

るから、定跡や指手順を述べる場合にも、些かその點を考
慮に入れてある。故に上手と對局の場合、本講義通り上手
が指さす、他の方法で指しこんで来たなら、以上述べたや
うな氣持で對局されることを進言する次第である。

私の考へでは専門家でない人の將棋の、強い人に向ふと
案外もろいのは、實力以外に「叶はない」とか「もう駄目」
だとかいふ氣持が多分にあり過ぎて、それが爲め勝てる將
棋であつても敗けて了ふのだと思ふ。

定跡等の講義以外に、さういふ氣分の點についても充分
お考へになるべきだと思ふ。

以下講義に移るに當り、お判り易いやうに前號の分れの
ところの圖面を更に挿入して御参考にする。

左に掲げる圖面の場合、上手直ちに一四歩と突き、持駒
の歩を利用して下手の香を釣り上げ、たくみに桂香の交換
をなし八八へ打つて、角を捕虜にする手段が、下手差支へ
ないといふ事を、前號によつて御承知になつた讀者は、上
手がさう指さすに八七歩と受けた時の手順を知らなくて

はならない。
本講座初號以來角落構組の巻を私が擔當してゐます故、
何卒それらものと對照して御研究を乞ふ。

(面局の迄角六八は圖考參)

下手持駒 香香

九	星					將	將	星		
八		飛				王				
七			將		將	香		香		
六		香	香	香			角			
五	香									
四			歩	歩	歩			歩		
三		歩	銀	金		歩	歩			
二		歩	玉	金		銀		飛		
一	香	桂					桂	香		
		一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩 駒持手下

右圖面以下第二十一圖面に至る迄の指手。

- 八七歩 ○四二角 ○四五歩 ○同歩
- 同金 ○四四歩 ○四六金 ○七四歩
- 七六歩 ○六四歩 ○六六歩 ○六三銀

る。下手同歩、上手同金、下手四四歩、上手四六金、双方
共至當の運び。下手七四歩は七筋に位を張つて、漸次六二
にゐる銀を繰出して攻める含み。上手七六歩は下手から七
五歩と突き越されると、敵銀の活動力を非常に擴大され
るから受けたのである。下手六四歩及び上手六六歩は共に
七筋の歩の應接と同意味。下手六三銀は健實に駒組を整へ
た手段。

第二十一圖面以下の指手。

- 六七金 ○七三桂 ○七七桂 ○七五歩
- 同歩 ○六五歩 ○同歩 ○七五角
- 六八銀上 ○七四銀

【講義】上手六七金は六七兩筋の備へである。下手七三
桂と跳ねたのは攻勢を探る準備であるが、此の所九四歩と
突いては手遅れになる。上手の七七桂は下手の桂に對抗す
る手段。下手七五歩と挑戦したのは、自陣が整備したから
好時機である。今一手何處かに費して、上手の七九にゐる
銀が八八へ上つてから攻めては、敵の三七にゐる桂が二五

【講義】上手八七歩と打つのは、直ちに此の機會を利用
して一筋から攻勢を探つても無理であるので、以下駒組を
整へ徐ろに對戦する心算で斯く指す。下手四二角は當然で

(面局の迄銀三六は圖一十二第)

下手持駒 香香

九	星					將	將	星		
八		飛				王				
七			將		將	香		香		
六		香	香	香			角			
五	香									
四			歩	歩	歩	歩		歩		
三		歩	銀	金		銀				
二		歩	玉	金		角		飛		
一	香	桂					桂	香		
		一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩 駒持手下

あるが、これは最初から一手の利益を計り乍ら、此の好位
置に据えんとした豫定であつた。上手四五歩は捨て置くと
三五歩と突かれ、次に金銀の交換を挑まれると、自桂の頭
に疵が出来て悪いので、金の運用を自由ならしめるので

に跳ねて、自己の陣を亂される虞れと相俟つて、攻勢上大
いに支障を來す。上手七五歩は已むを得ぬ。若しこゝで手
拔をしては、七六歩と取り込まれて金の姿が悪くなるので

(面局の迄銀四七は圖二十二第)

下手持駒 香香香香

九	星					將	王	將	星	
八		飛				香	香			
七			將		將	香			香	
六		香	香	香			角			
五	香						銀			
四			歩	歩	歩		桂		歩	
三		歩	銀	金				飛		
二		歩	玉	金						
一	香	桂							香	
		一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩 駒持手下

指し悪い。その順序は、七六同金の時下手は二歩を手中に
収めるので七五歩と打ち、上手同金の時、下手六五歩と角
の見通しを先手に計つて、上手が餘儀なく七六金と退却し
た時、更に下手七五歩と打つて、上手八六金、下手六六歩、

上手同銀、下手七四銀と出て、次に八六にゐる金を八五歩と打つて攻めることになる。尙又右の手順中下手六五歩の時、上手決戦の意味に、金を逃げないで七四歩打なれば、下手七五角、上手七三歩ナル、下手六六歩、上手六八歩、下手七六歩、上手八二と、下手七七歩ナル、上手同玉、下手六五桂、上手七六玉、下手七四銀、上手六六銀、下手同角、上手同玉、下手五七銀、上手六七玉、下手六六金、上手七八玉、下手七七歩の次に、四六にゐる金をとつて置けば、敵に飛角を渡しても優勢である。尙右の手順中下手七歩ナルの時、上手同玉と取らずに同銀と取れば、矢張り下手六五桂、上手六六銀右、下手七六歩と烈しく攻勢を持續して、是又下手の勝利である。

本文の講義に戻り、上手七五同歩と應じた手は餘儀ないといふ事になる。右に述べたやうな手順は實戦に際し、しばしば上手が用ひる手段であるから、よく玩味して戴きたい。下手六五歩は攻撃の繼續。上手同歩と應じるのも當然に捨て置くのは、下手六六歩、上手同銀の時、下手に六五

第二十二圖面以下の指手。

- 図七六歩 図八四角 図二五桂 図七五歩
図三三桂 同桂 図六四銀 図七六歩

(面局の迄歩六七は圖三十二第)

Table of a Go board position with pieces like King, Silver, Gold, Knight, and Pawn placed on the board. Includes labels like '星', '香', '王', '銀', '金', '桂', '歩' and coordinates '一' through '九'.

【講義】 上手七六歩と打たのは、下手からそこへ打たれると悪いからである。その手順は同金なら、六七歩と軽く打たれて、七五金と角を取る一手である。その時下手六八歩ナル、上手同銀、下手七五銀にて二枚換へとなる。故に前

歩と叩かれて、矢張り上手形を損じて宜しくない。然し下ら上手として下手に對し痛烈なる攻勢手段のあるやうな場合は別問題である。要は自分の蒙る損害以上敵に損害を與へ得る時は違ふといふ意味である。下手七五角は豫定の進出。上手六八銀上ルは下手の角が利いて来たから、危険である故健實に守る手段。こゝで直ちに七六歩と打つては、下手に五七角ナルと切られ、上手同金の時下手七五歩にて上手苦戦である。下手が七五歩と桂頭を攻めて来た時、そこを守る爲六七金と寄れば、下手六六歩にて五七銀の手段があるから、上手は亦大いに悪い。又六七金寄ると指さす四九角と凌げば、下手七六歩、上手同角、下手七五銀の次矢張り七六歩打ちの手段があり、上手は持角を打つて了つて見込がない。故に下手が七五角と出たのは、深く定跡の研究さへ積んであれば、かなり恐ろしい手であつて、上手も却々油断が出来ない譯である。かういふ處は一寸面倒な處だから、下手が一番間違ひ易いので、上手としては指せる理屈なのである。下手七四銀は從容とした好手。

譜下手七四銀と出たのはさういふ意味も含まれてゐた。下手八四角は、六七兩筋を視つて飽迄攻撃の位置に居やうといふのである。上手二五桂は自玉の方の折衝は一寸一段落を告げたから、下手が銀を逃げるかどうか模様を見た手であつて、若し下手が自分の指手に一々應ずるやうなら、此の方面に戦渦を作つて漸次混亂の局面にしやうといふ意味で、尙又駒の交換が出来れば、六六及び七五等へ打つて自營の安全を計らうといふ意味も含まれてゐる。下手七五歩は自分の方は堅いから、捨てゝおいても俄に悲運に傾くやうな事もないので、初志を飽迄貫徹しやうといふ手段。こんな處で一々挨拶してゐると、上手から巧みに混戦にされて、今度自分の玉の方が戰場になるから、大變指悪くなる。上手三三桂ナルは却つて敵桂に運びをつけられるのでよい手ではないが、守りに用ひやうといふ意味である。下手譜の如く同桂と指すのが一番よい。後に四五へ跳ねる手段が生じるからである。然し如何なる場合にも桂で取る方がよい譯ではない。自分の桂頭を徐ろに攻められるやう

な時、即ち敵陣の攻めの速い場合などには同金と取る手段もある。上手六四銀と打つたのは、七五へ利かせて守る意味であるが、一つには角を牽制して七三へ成り込む手を覗つてゐる。茲で六六銀と打つても、下手七六歩、上手同金、下手七五歩、上手八六金、下手八五歩の姿となつては胸損の結果を生じて宜しくないから、幾分でも紛れの多い方法を選んだのであつて、上手としては至當の手段である。尙又譜の如く上手六四銀と打たず、七五歩と強く取り込む手もあるから、次に變化圖を入れてそれに對する下手の攻撃法を説いて置く。實戦の場合或ひは上手としては、此の七五同歩の手段が強くして激戦になる結果となるから、一番多く用ひるかも知れない。故に變化についても充分お調べになる事を切にお願ひする。下手七六歩と取り込むのは豫定策である。次に變化を述べる事にする。

上手六四銀の所七五同歩に對する下手應酬法

- 七五歩 ●同銀 ●七六歩 ●六六歩
- 七五歩 ●六七歩ルナ ●同銀 ●七五角

接に敵に影響のない手で受ける事は絶対に出来ない。下手六六歩は敵の金を取る意味、上手六六同銀と應じる手は、胸損となつて全滅するから七五歩と取る一手である。下手六七歩ナル上手同銀の次に下手七五角と出て、何處までも一氣に攻め立てる。但し上手同銀の所、同玉と取つても下手七五角と出るのである。その手順は上手は八七へ飛車の侵入があるから、攻防兩様に七六銀と打つて凌ぐ、下手その時五七角ナル、上手同銀、下手七五歩と指して飛車の活動計るのである。故に譜の如く下手の六七歩ナルを上手同銀と取るのである。下手が七五角の時上手六六銀と打つのは、極力凌がんとする手であつて、敵の應手如何によつては、指し切らせやうとする手段。下手同角と取つたのは斯ういふ場合當然のことではあるが、若し角を逃げれば、七五歩と打たれて攻守轉倒の局面となり、指切りに陥る。上手同銀右の所同銀スグと應じては、下手に七六金及び銀と打たれて潰滅となる。下手七四桂は如何にも攻撃の好手筋なのである。三七銀と打つ方が胸筋のやうであるが手緩

- 六六銀 ●同角 ●同銀 ●七四桂
- 七五銀 ●六六桂 ●同銀 ●八六歩
- 同歩 ●同飛 ●八七歩 ●六六飛
- 同銀 ●七六金にて下手必勝

(面局の迄金六七は圖化變)

九	星							星		
八		銀				王	飛	飛		
七						王	飛	飛		
六		飛		王	飛	金				
五	飛				飛					
四			歩	歩	歩					
三		歩	桂	金		桂		歩		
二		歩	玉	金						
一	香							香		
		一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩歩銀銀銀 駒持手下

【講義】即ち上手七五同歩と取る。下手同銀は當然の應手であるが、前に七五歩と合せた時からの豫定の策である。上手七六歩と忙しく受ける。斯ういふ局面になつては、直

い。下手三七銀なれば上手二九飛、下手四六銀ナル、上手六四角と應接され、混戦状態になる惧れがある。下手は何でも混戦にならない方が指し易いものである。上手七五銀打は、銀桂の交換となつて損であるが、致し方がないのである。六六にゐる銀を逃げては、直ちに下手から六六歩と打たれ、若し同銀と應じる結果となれば、即ち一步得る代償として自分は一手も指さずに、下手に桂を打たれて、そのまま續いて銀を取られた計算となる。又下手六六歩の時上手更に六七にゐる銀を執れへ逃げて、六七銀と王手に打たれて、飛車を成られることとなり、陣營の防備薄弱であつて防ぎ切れぬので、譜の如く七五銀と打つのは已むを得ない。下手六六桂、上手同銀引は手順。下手八六歩と打つた手は良い手である。上手同歩と指す外なく、下手同飛、上手八七歩は當然の應手。下手その時六六飛と切つたのは、是又攻撃上手筋ともいふべきものであつて、敵に金銀類の受け駒のない場合、一氣呵成に肉薄することは多少の犠牲を提供しても、さしたる危険はないものである。上手同銀

の時下手七六金と打つた變化局面に至つては、上手術策盡きて最早軍門に下らざるを得ない。

これは上手が七五同歩と應じた場合の、應酬法として説くが、角落將棋にはこれに似た形の局面がよく現はれるものであるから、讀者諸君は一手一手についてよく御研究なされ、飲み込んで了つて置けば、攻撃上非常に利する點が多からうと思ふ次第であります。實際弱い方は駒を渡さへすれば、後に至つて必ず受け切られるやうな考へをもつておられるのであるが、敵の持駒はいつでも知つて居なくてはならない。甚だしい例をあげると、なぜ斯うお指しになりませんかといふやうな質問に對して、銀を打たれると思つたとか歩を打たれるかと思つたとか、こつちに無い駒を答へる方がありますが、それは絶対に注意し乍ら對局してゐなくてはいけない。以下本文に戻つて説明を續ける。

第二十三圖面以下の指手。

- 図七六金 七五歩 図六六金 六六二歩
- 図七三銀 同 角 図六四歩 同 角

手六六金と逃げた時、下手六三歩と打つのは、敵の危険物を除去すると同時に、味方の飛角を手順に見通しをつけて、以て攻勢上便ならしめんとする手段、上手七三銀ナル、下手同角は双方順序である。上手六四歩と突くのは手筋である。これは五筋に敵角をさへぎる場合近づけて置く方が便利であるのと、今一つには味方の七七に在る桂の活用とを兼ねてゐるのである。下手同角は飽迄角路を通して置く意味、上手五五歩は放任して置いては下手に四五歩と突かれるし、又二九飛と引いてゐても、敵角は矢張自營に利してゐるから、その危険の根源を致で喰ひ止めたのである。下手三七銀は敵陣を亂しながら金を得る手段であつて、此の局面では手駒に金を持つのが一番攻めるのに都合がよいからである。この時四五桂と跳ねると、上手同金、下手同歩の時に、八六から銀取りの桂馬を打たれ、飛車先を先手に止められるので却つて指し悪い局面に陥る。

第二十四圖面以下の指手。

- 図二九飛 四六銀 同 銀 七六金

図五五歩 二七銀

(面局の迄銀七三は圖四十二第)

九	香							香
八	飛							
七	歩	桂	金					歩
六	歩	玉	金					歩
五	歩							歩
四	歩							歩
三	歩							歩
二	歩							歩
一	香							香

歩桂 駒持手下

【講義】 上手七六金は至當である。下手七五歩は穩かに駒徳を計る手段であつて安全第一の方法である。此の處六七歩と打つ手筋もある。即ち下手六七歩の時上手は同玉と取る一手、下手五七角ナル、上手同銀、下手八七飛ナル、上手八八歩の順序となつて、上手の銀が六四銀に在る關係上指し切りに陥る。故に譜の如く指すのがよい。上

(面局の迄金六七は圖五十二第)

九	香							香
八	飛							
七	歩	桂	金					歩
六	歩	玉	金					歩
五	歩							歩
四	歩							歩
三	歩							歩
二	歩							歩
一	香							香

歩桂 駒持手下

【講義】 上手二九飛と逃げたのは已むを得ない。下手四六銀と取つたのは、三七銀打ちの時の豫定である。上手同銀と取る一手、その時下手七六金と打つた第二十五圖面迄にて必勝なのである。第二十五圖面以下上手として指し進めるとすれば、いろいろの手があるが何れも見込はないのである。左にその二三のものについて述べて、以て此の稿の筆をおく。

先づ上手同命と取る。下手同歩と進む。そこで上手としては可なり忙しい局面となつたが、敵が堅いので攻める事は絶対に不能故八六桂と打つ。下手七五銀と穩かに進んで居る。上手その時六五金と打つても下手七七歩ナル、上手同銀、下手七六歩打にて、上手負けである。

今度は又右手順中六五金の所、六五桂と跳ねて見る。下手その時八六銀、上手同歩、下手同角、上手その時八七歩なれば、下手七七金と打つて寄りである。又八七歩と打たず七七歩打ちなら、下手七五桂と打つて置いて、以下七七歩ナルの手段があるから勝算は儲かである。

尙又第二十五圖面の場合上手七六同金のところで、金を横柱にして八六桂と打てば、下手方六六金と取る。上手七四桂と敵の銀を拂ふ。即ち飛車取りであるが、その時下手方は飛車を逃げても優勢ではあるが、七六歩と突き出して置いても勝ちである。然し下手七六歩よりも七六桂と打つ方が寄りが早い。

それから又下手の七六金打ちに對し上手六七銀打ちと應

ずれば、下手八七飛ナル、上手六九玉、下手六六金、上手同銀の時下手五六桂と打ち、上手此の銀を取られては堪らないから、五七銀上ると指す。下手方その時五角と出て銀角の交換を了せば、以下金銀の持駒となるから、五六にゐる桂馬の力と相俟つて、敵玉に必死をかけることは容易であらう。

尤も第二十五圖面迄にて下手方大いに優勢であるから、斯くの如く何れの手で上手方が應じてても、簡明に勝となり得るのであつて、これは大體上手方の七九にゐる銀の繰らないうちに、下手が挑戦したのが非常に時機を得てゐたのであつて、所謂挑戦の機微をとらへたものである。本定跡中特に注意を要する點は、此の七九にゐる上手の銀の動き方であつて、此の銀が八八に出てから攻勢を採る場合には、右に説明した所によつて充分研究をして置かないと、紛れを生じる。即ち下手五七角ナルと切つて、次に七五歩と攻める手順となつた場合、上手は敵飛に侵入される恐れがないから、六七玉と上つて防ぎ事が出来る順序となる。

槽組の巻

(上手二五桂跳び四八飛廻り)

前二號とも上手が二五歩と突かず、そこへ桂を跳ねる含みを残してあるものを説いたが、今回はその繼續的説明として、上手が四八飛と廻り、二五桂跳ねを利用して烈しく攻める手段に對する、下手の攻防法を述べる事にする。

大體上手の四八飛廻りは、以上述べた如き急激に攻める意味の外に、尙もう一つには四七飛と浮いて、下手が六、七、八三筋から攻めて来た場合、その飛車の横利きを應用して、極力防ぐ穩健な意味をも兼ねてゐるのである。故に本號には前の二五桂跳の戦方を述べ、次の上手持久戰的策路のものは、次號に譲ることにする。

例、依り諸君は既に御承知のことゝは思ふが、順序として最初の手順から書いてゆく。
第二十五圖に至る迄の指手。

- ▲四八銀 ▲三四歩 ▲五六歩 ▲五四歩

▲五七銀 ▲三二銀 ▲四六歩 ▲四四歩
 ▲二六歩 ▲五二金 ▲三八金 ▲四三金
 ▲四七金 ▲六二銀 ▲三六金 ▲六四歩
 ▲四五歩 ▲同歩 ▲同金 ▲四四歩
 ▲四六金 ▲六三銀 ▲六六歩 ▲三三銀

【講義】 上手四八銀と出るのは、普通飛車先の歩を突くのが現今では殆んど定法の如くなつてゐるけれども、本號の如く二五桂跳ねの心算で指す場合には、手徳の意味はないのだから、結局同じ理窟である。下手三四歩は定法である。次の上手五六歩、下手五四歩も同じく角落の定法。上手五七銀は、下手の駒組のまだはつきり定らぬ場合であるから、何れの駒組で下手が指して来ても應じられる手であつて、今迄説いたものには此の時に五七銀と出たのではないから、或は奇法の如く思はれる節もあるかも知れないが決してさうではない。下手三二銀の次に上手四六歩の處で、若し下手の槽圍ひにされるのを嫌へば、中飛車にて急戦する含みで六六銀と出る手段もあるが、その時下手は矢

張り五二金右と出て差支へない。即ち上手五八飛なら、下手六四歩、上手五五歩、下手六五歩、上手同銀、下手五五歩にて宜しい。その時上手六四銀なら、下手六二飛にて優勢であり、尙又五四銀なら下手六二銀と對抗して何等支障を来さぬ。右の手順中下手六五歩に對し、上手早くも決戦の意味で五四歩と取り込んで下手六六歩、上手五三歩ナル、下手六七歩ナル、上手五四飛、下手四四角、上手五二と、下手同飛、上手同飛ナル、下手同金にて駒の損徳はないが、下手はと金を作つただけ徳が出来る結果となり優秀は問題にならぬ。故に上手の急戦は無理であるから、徐ろに指さんとすれば、下手も亦胸組を整へる順序となる。下手四四歩の次に上手二六歩は手順である。下手五二金右と出て、いよ／＼櫛圍ひの仕度にかゝる。上手三八金は活動にうつる手順、下手四三金、上手四七金双方は又手順である。下手六二銀は今迄にも屢々説明してあるけれども、大切な手であるから注意を要する。今こゝで此の銀を出ないと即ち上手に五筋の歩を換はられて、末に至り指しにくい。

此の方法は用ひられてゐないのである。

参考の爲め一寸附記して置くから、對局の場合應用して實戦に試みるも面目からう。然し譜の如く穩かに四四歩と指せば安全である。上手四六金の次に下手六三銀は、敵が五筋の歩を換えに來た時五二飛と逆襲する含みであつて、角落中重要な手である事は前にもよく説いた通りである。上手六六歩は下手から突かれると、後に角の覗きを生じて指しにくい。下手三三銀にて第二十六圖面となる。

第二十六圖面以下の指手。

- ▲三六歩 ▲八四歩 ▲六八玉 ▲八五歩
- ▲七八玉 ▲四二玉 ▲六一歩 ▲三二玉
- ▲六八金 ▲三一角 ▲三七桂 ▲二二玉
- ▲四八飛 ▲三二金

【講義】 上手三六歩は桂の活用を計り且つ其の筋からの攻撃の意味、下手八四歩、上手六八玉、下手八五歩、上手七八玉は双方手順、次に下手四二玉は早く玉を圍はんとする手段であつて、三二金と上つてから後に圍ふと一旦角を

上手三六金及び下手六四歩の次に、上手四五歩と突くのは角落に對する上手の常套手段であつて、此の金で中央歩の交換をなし、歩を手中に入れて、いざ攻撃といふ時の役

(面局の迄銀三三は圖六十二第)

下手持駒

▲	▲			▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲							
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲							
			▲	▲	▲	▲		
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲							
▲	▲			▲	▲			▲
▲	▲			▲	▲			▲

▲ナ 駒持手下

に立てるためである。下手四四歩の所で強く三三桂と跳ね上手四六金、下手四五歩、上手四七又は三六金の時、下手五三銀と出て位を張る方法もあり、さう指しても充分指せるのではあるが、自ら混戦にするやうな嫌ひがあつて餘り

三三に引いて更に四二へ上らぬ中は、完全に圍ひ切れぬから譜の如く指す方が此の場合一手徳である。上手一六歩は後に至り桂を利用して端から攻める準備。下手三二玉の次に上手六八金は五六七各方面の備へ。下手三一角は玉を圍ふためと、角を戦線に送り出す準備。上手三七桂は稍陣營も整つたので、何時にても急戦出来るやう斯く活用するのである。下手二二玉と圍ひ、次に上手四八飛と廻つたのは本定跡の主要の點であつて、一氣に敵に肉薄しては了とする手段である。然しこれは一面穩かに四七飛と浮いて持久戦模様指す事をも得るのであつて、それは紙面の都合上本跡には述べ切れぬので、次號に譲つたといふ事は前に述べた次第である。それから前に一寸戻るが、上手三七桂の場合普通は、三五歩と一旦交換して後に此の桂を跳ねる所なのだが、急戦に指す場合斯かる手は省略してゐる場合が上手としては多い。それでは何故一旦三筋の歩は交換してから桂を跳ねるのが當然かと言ふと、でないとして上手方桂を跳ねた時に三三歩打の手段がないから、攻撃上溢瀆

を来すからである。本定跡は後に至り、上手が手順に此の二筋の歩を切るこゝなるので此の手を省略直ちに桂を

(面局の迄金二三は圖七十二第)

九	皇					駒	王	皇	
八			飛		馬	王			
七			馬		馬	馬	馬		
六	馬	馬	馬	馬				歩	
五				歩	歩	歩			
四			歩	銀	金		銀		歩
三	歩	歩	玉	金				飛	歩
二			桂	角				桂	香
一	香								

上つたのである。下手方三二金と上つたのは、完全な構圖

ひに組み上げたのである。

第二十七圖面以下の指手。

- ①一五歩 ②八六歩 ③同歩 ④同飛
- ⑤八七歩 ⑥八二飛 ⑦二五桂 ⑧二四銀

ても、格別俄かに危険はないのだが、こゝで一つ注意を要するの、八六に飛車を置いたまゝ、迂濶に端の方を構つてゐると、香車が敵にわたつた時、八八香と打たれて肝心の飛車を捕られて了ふ。

上手八七歩と打てば下手八二飛と引くのは當然。次に上手二五桂跳ねは、これに依つて下手の陣營を攪き亂さうといふ手段であつて、下手それに対する應手としては、本譜の如く二四銀と出る外、捨て置いて五三角と出る手があるが、譜の如く指したのは、端の防衛を兼ねつゝ避けたのであつて、いざといふ場合には二五銀と切る手があるから比較的危険はない譯なのである。左に下手譜の如く指さす五三角と出る手について變化として一寸述べて置く。

- ①二二桂 ②同桂 ③二五歩 ④四五歩
- ⑤同金 ⑥同桂 ⑦同飛 ⑧四四歩
- ⑨四九飛 ⑩三五歩 ⑪三九飛 ⑫四五歩
- ⑬四六歩 ⑭四七金 ⑮五八銀 ⑯四六歩

【講義】 上手一五歩は豫定の手順、下手八六歩、上手同歩、下手同飛の時上手八七歩と打つたが、此の時上手が八七歩と打たず、端から攻めて来た場合の下手の指す手を一寸述べて置くことにする。即ち上手一四歩、下手同歩上手一三歩、此の時下手方いろ／＼の手があるが、八八飛と引くのが一番宜いのである。その時上手は端の疵をとがめるため一四香と出れば下手八六歩と打ち、上手に八八歩と受けさせ、以下一三香と敵歩を取つて了へばよい。その時上手同歩ナル、下手同玉、上手二五桂、下手二五玉、上手三三桂ナル、下手同金スグと應酬して、次に四五香打ちの手段や、八七桂打込み等の手段があつて大いに下手方指し易い。

尚又右の説明手順中、下手八六歩打ちに對して下手八八歩と受けずに一八飛なら、下手八七歩ナル、上手六七玉、下手一五歩、上手同飛、下手一三桂にて、是又大いに優勢である。故に本譜の如く上手は八七歩と、おだやかに指す外はないのである。只下手としては如何に端から攻められ

- ①四四角 ②三二歩 ③四二金
- ④四九飛 ⑤三七桂 ⑥三九飛 ⑦五七金

【講義】 上手が二五桂と跳ねた時、下手が捨て置いて五三角と出れば、上手三三桂ナルは當然である。下手同桂の處で同金スグと應じる手もあるが、それも却々堅くて以下上手も一寸施す術はない。けれども右譜の如く同桂と應じ以下その桂を使用する手段の方が徳なのである。上手三五歩は下手が同桂と取つた以上、今度は下手から四五歩と突いて来るのは判り切つてゐるから、それでは漸次萎縮する形勢となるので、決戦の意味に斯く指すのは至當である。下手それには構はず四五歩と突く。次に上手同金の處金を逃ければ、穩かに下手に三五歩又は三五角と取られ、大いに形勢を損じるから逃げる手はない。又三四歩と取り込めば下手同金と應じて置きさへすれば、金取りの先手があり、白玉は安全であるから、矢張下手がいい。故に上手が同金と指す手は至當である。下手同桂、上手同飛は共に當然。その時下手四四歩と打つのは堅い。此の處、五角出等の手段

もあるが、強く上手に同飛と切られると以下四歩打及び七一角打ち等の手段があつて相当危険になる。上手四九飛は他に適當な逃げ場所がないので、此の場合一番此處が宜しい。下手三五歩は禍ひの種であるから、斯くの如く取りのぞいて置くのは安全な手段である。かういふ處を捨て置いて、攻勢に轉じると末に至つて支障を來してくるものであつて、自分の方の駒の姿を悪くする事は如何なる場合でも宜しくない。次に上手方三九飛と寄つたのは、既にして格別の手もなくつて了つたから、其の筋から發展策を講じやうとする手段、次に下手四五歩は三五歩を保護しつゝ、角を活用する含みと、四筋にと金を作らんとする計畫である。但しこの處で六五歩と突いて、早く攻勢に出る手もある。それは上手同歩なら、六七歩と打つ事が出来るし又上手が捨て置いて三五飛と進めば、一旦三四歩と守つてから、六六歩と取り込んで指すのであつて、此の手も却々きびしい攻め手である。上手四六歩は手順に銀をその筋に繰り上つて活躍せん爲めである。下手その時四七金と打つた

は非常に不利な局面になるので、先手を取りつゝそれを凌いだのである。下手四四角と避ける。その時上手三三歩は攻撃、下手四二金は當然の指手であるが、三一金と引いては玉が狭くなつていけない。上手四九飛は格別手が無いが

(面局の迄銀四二は圖八十二第)

下持駒 香

九	星					飛	王	飛	星
八			飛		王	飛	飛	飛	
七				飛	飛	飛			
六		飛	飛	王	飛	飛			
五	飛	飛							
四		銀	歩	歩	歩	歩			歩
三		歩		金		銀	歩		
二		歩	玉	金			飛		歩
一	香	桂	角				桂	香	
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

下持駒 香

ら、敵の仕掛けを待つ意味に、所謂請求した手である。上手三七桂は四七の金を取り拂はれては堪らないから、勿體ない手ではあるが、斯ういふ場合には先手がとれるので、

のは好手である。自營も堅實であつて危険はないけれども敵陣にも自分の攻勢をとる手掛りがないから、先づ斯う打つて攻勢の手掛りを作つたのである。上手五八銀と打つて

(面局の迄金七五は圖化變)

下持駒 香

九	星					飛	王	飛	星
八				飛	王	飛	飛	飛	
七			桂		金	飛	飛		
六		飛	歩	歩	歩	角	歩		
五	飛	歩				金	銀	歩	
四		歩	歩	飛	角	金			
三		歩	玉			金			飛
二		歩							桂
一	香								香
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

下持駒 香

凌ぐのは已むを得ない。捨て置いて五七金と取られ、同金の時四八銀と打たれては、それ迄の將棋になつてしまふ。下手四六歩は手順に進んだのであつて、大變利益の大きい手段である。上手四五桂はそこへ敵から桂を打たれて

大して無駄な手ではない。即ち桂馬は假りに無駄になつても一手の利益があるからである。下手五七金と取つた變化圖までの局面となつては、上手方見込がない。即ち上手同銀にては直ちに下手四七歩ナル、又同金にては下手に四八銀と打たれ飛車を何れへ逃げて、次に下手五七銀ナル、上手同銀、下手四七歩ナルにて大いに優勢である。以上述べた外に上手の指手が一つ二つあるが、いづれも上手苦戦は免れず同じやうな結果である。

前の變化圖に至る迄の下手方指手の説明は大體終つたから、又本文に戻つて下手二四銀以下の解説にうつる。第二十八圖面以下の指手。

- ④四五歩 ④五二角 ④三三五歩 ④四五歩
- ④同 金 ④三五銀

【講義】 上手四五歩は敵に二四銀と上られて見ると、以下他に適當な手段がないから、四筋に位をとつて置く手であつて、下手の應手を試みるのである。下手五三角は捨て置いて、さしたる事はない處であるが、譜の如く強く應

じるのが一番よい。模様によつては、二六へ活躍の手段も生じやうし、且白玉の範圍も廣くなるのである。上手三五歩は、四四歩と直ちに取り込んで、下手方に同金及び同

(面局の迄銀五三は圖九十二第)

丁金銀香

九	香					香			
八									
七									
六									
五									
四									
三									
二									
一	香	桂	玉	金	銀	角	歩	歩	歩

歩歩歩 駒持手下

角の兩様の手段があつて、一切の味を消して了ふので當然である。下手敵の三五歩を漫然と同歩と取つたのでは、自分の角道が止るので、以下四四歩と取り込まれ、次に三三歩と打たれて、敵にいろ／＼の手段を興へるので、一旦四

(面局の迄歩同四一は圖十三第)

丁金銀香

九	香					香			
八									
七									
六									
五									
四									
三									
二									
一	香	桂	玉	金	銀	角	歩	歩	歩

歩歩歩歩桂金 駒持手下

れるので悪い。上手三三桂ナルの時、下手同金スグは體健な應手である。上手二五桂はこゝで一時的攻撃の手をゆるめては、下手に一手どんな手でも、防衛策を施されて絶對指切りに陥るので、當然の攻め手である。下手三二金と避け

たのは極力、胸徳を計り上手を指し切らせやうとする手段である。その時上手一四歩と仕掛けたのは、こゝに良い手があるからではなく、何としても形勢は既に指り

五歩と先手に取るのは好手である。上手同金は至當。下手三五銀と取るのも當然ではあるが、此の邊は輕妙な手順である。此の場合同歩と取つては、上手方に四四歩と打たれ、又四四歩と打つては三四金と交換を挑まれて下手方悪い。第二十九圖面以下の指手。

- 三三歩 同 桂 ○三五金 同 角
- 三三桂 同 金 ○二五桂 ○二二金
- 一四歩 同 歩

【講義】上手三三歩は敵陣を亂して、飽く迄攻撃の手段を繼續しやうとするのである。下手同桂と取る。此の場合四二金と寄つては、次に飛車道の通つた時上手に四三飛と切られ、同金の時三二金と打ち込まれ、下手の力としては指し悪い將棋となる。上手三五金と取つた此の所の手順の掛引は、何とかして下手の應手を誤らせうとする策戦であつて、従つて下手も一手指し損へば忽ち形勢を悲運に傾かせる危険な所である。下手同角は當然、若し同歩と取れば次に上手から三三桂と交換された時四五からその桂を打た

- 一四香 同 香 ○三三歩 ○四二金
- 四三飛 同 金

切り模様である故、一步手中に收めんとする強襲手段である。下手飽く迄冷静に同歩と取る。第三十圖面以下の指手。【講義】上手方一四同香は過激な手ではあるが、歩切れでは如何とも仕方がないので已むを得ない。下手同香の次に上手三三歩は、攻め手としては當然である。下手その時同金と取り、上手同桂ナル、下手同玉の結果となつても、差支へはないけれども、前後の手順を充分讀み切つて、敵をあくまで指し切らせやうと四二金と避けるのが、一番正しい手である。上手もこゝまで指して來たのだから、今更愚圖々々してゐる譯にもいかないので、強く四三飛と切る。然し今少し穩かに指すならば、一三銀と打つのであるが、それなら下手方同角と取つても、三一玉と引いても差支へはない。又上手一三銀打ちの處で、三二銀打ちなら下手方同金、上手同歩ナル、下手同玉にて矢張り差支へな

い。上手四三飛ナルの時、下手同金と取つた處で右の圖面となる。

第三十一圖面以下の指手。

(面局の迄金同三四は圖一十三第)

丁玉桂 香

九						香	桂	王	飛	香
八								王	飛	香
七								飛	飛	香
六								飛	飛	香
五								飛	飛	香
四								飛	飛	香
三								飛	飛	香
二								飛	飛	香
一								飛	飛	香

歩歩歩歩歩香桂金飛 駒持手下

【講義】 上手三二金はもう一手も落着いておられない處だから當然である。そこで下手一二玉と逃げる。此のころ一一玉と逃げると、直ちに次の指手の通り、上手に三二

備な點もあると思ふから、以下双方の指し手順について、二三更に詳しく述べて、以て此の稿の終りとする。

第三十二圖面の場合上手それには構はず、

【一一金】 八七飛、六九玉、四九飛

【五八玉】 五九金

【講義】 下手が七五桂と打つた時、上手が二一金とはいつて来たのは、餘りに無謀な手であつて問題にならないが持駒がないので受ける手がないから、下手の指し手に萬一間違ひがあればといふ僥倖心に外ならない。下手八七飛と成つて、上手餘儀なく六九玉と逃げた時、下手近く四九飛と打つ。悲しい事には上手方合ひ駒がないから、五八玉と上る。その時下手五九金と打つた下の第三十三圖面迄に詰みである。

尚又上手斯く簡単に詰められては問題にならないので、兎も角一旦八八銀と上つて凌いで見る。即ち

【八八銀】 四九飛、七六歩、五七角
【同金】 六九銀

銀と王手で打たれて一手損である「決局は上手指し切りであるが、下手としては譜の如く避けるのが手順である。上手二二銀と打つた意味は、指手に窮したので、以手二一

(面局の迄桂五七は圖二十三第)

丁玉桂 香

九						香	桂	王	飛	香
八								王	飛	香
七								飛	飛	香
六								飛	飛	香
五								飛	飛	香
四								飛	飛	香
三								飛	飛	香
二								飛	飛	香
一								飛	飛	香

歩歩歩歩歩香桂金飛 駒持手下

【講義】 上手が一旦八八銀と上つたなら、下手は四九飛と打つ。これも一手すきである。捨て置けば下手七九金、上手同銀、下手八七飛ナル迄に詰む。故に上手方七六歩と逃げ路をあける。下手その時五七角ナルと切つて、上手

【講義】 上手が一旦八八銀と上つたなら、下手は四九飛と打つ。これも一手すきである。捨て置けば下手七九金、上手同銀、下手八七飛ナル迄に詰む。故に上手方七六歩と逃げ路をあける。下手その時五七角ナルと切つて、上手

(面局の迄金九五は圖三十三第)

丁玉桂 香

九						香	桂	王	飛	香
八								王	飛	香
七								飛	飛	香
六								飛	飛	香
五								飛	飛	香
四								飛	飛	香
三								飛	飛	香
二								飛	飛	香
一								飛	飛	香

歩歩歩歩歩香桂金飛 駒持手下

が同金と取つた時、下手六九銀と打つた左の第三十四圖面迄にて、上手の玉は七七、六八、のいづれへ逃げて七八金にて詰みである。然し下手五七角ナルの處、直ちに六七

金と打つても詰みで、唯手数がかゝるだけのことである。常定跡はあまりにあつて無く上手方敗れて了つたのであるが、讀者の中に角落の場合、上手から滅茶苦茶に攻め

(面局の迄銀九六は圖四十三第)

九	香	桂	飛	步	步	步	香	玉	步	香
八										
七										
六										
五										
四										
三										
二										
一										

駒持手下
歩歩歩歩歩香金

られて、その應手に苦しむ方も多からうと存じ、上手の奇襲に對する下手の攻防法を一回説かうと思つたので、こゝに掲載した次第である。然し實戰に際して、必ずしも上手が、斯くの如くもろくも敗けて了ふものではない。それは

櫓組 (上手四七飛受けの指方)

前回は上手方が、二五桂の早跳びをしたため、下手方に極力受けられ、遂に指切りとなつて敗局に終つたものを説いたが、今回は上手方二五桂と早跳びせず、中盤に四七飛と浮いて、下手の攻撃に備へて自重する手段に對する、下手の強襲法を説述することにする。

此の上手四七飛は、五筋及び六筋と横に利かしてあるので、下手方もそれに對する攻め手の研究がしてないと、途中攻撃が挫折するおそれがある。

どの將棋でもさうであるが、特に角落などは一旦攻撃をとつた場合、その攻撃が一時中絶して、上手に先手を持たれるやうな事になつては、非常に指しにくいものである。

前號に説いてあるものを、参照して載けばよくお判りになる事とは思ふが、雑誌の特質上更に途中までの手順を記載して置く方が當然と信じ、重複の嫌ひはあるが、左に一應掲載して參考に供することにした。

上手としては斯様に指しては指し切りになると思へば、其の所で一旦差し控へて、模様を見るやうな手を指してゐるからである。さういふ場合に下手が直ちに攻撃にうつらず一旦自營の防ぎに一手を費して置けば安全第一であるが、さうした穩かな方法は一寸とりにくいものである。故に以上述べた手順の中でも、もし上手が一氣可成に譜の如く指して來なければ下手は敵の飛車道でも止めておれば充分なのであつて、少しでも戦ひのあつた後には必ず自陣の亂れを整へて置くことを怠つてはいけない。一手一手の寄せ手順となつては、さうした氣分を超越して考へねばならないが、其の邊の意味はよく味つて載きたい。

X X X X X X X

(面局の迄飛二八は圖本基)

九	香	桂	飛	步	步	步	香	玉	步	香
八										
七										
六										
五										
四										
三										
二										
一										

駒持手下
歩

基本圖面に至る迄の指手。

- △四八銀 △三四歩 △五六歩 △五四歩
- △五七銀 △二二銀 △四六歩 △四四歩
- △二六歩 △五二金 △三八金 △四三金
- △四七金 △六二銀 △三六金 △六四歩
- △四五歩 △同歩 △同金 △四四歩
- △四六金 △六三銀 △六六歩 △三三銀

- ▲三六歩 ▲八四歩 ▲六八玉 ▲八五歩
- ▲七八玉 ▲四二玉 ▲一六歩 ▲三二玉
- ▲六八金 ▲三二角 ▲三七桂 ▲二二玉
- ▲四八飛 ▲三二金 ▲一五歩 ▲八六歩
- ▲同歩 ▲同飛 ▲八七歩 ▲八二飛

右基本圖面の場合に、前號は上手方が二五桂と跳ねて、急戦策をとつたのであるから、その双方の應接に對する利害得失はそれに依つて御研究を乞ふとして、本號には上手が此の圖面の場合二五桂と跳ねず、下手の仕掛けを待つものについて以下述べやう。

基本圖面以下の指手。

- ▲七六歩 ▲七四歩 ▲六七金 ▲七三桂
- ▲七七桂 ▲九四歩 ▲八八銀 ▲七五歩
- ▲同歩 ▲六五歩 ▲同歩 ▲七五角
- ▲七六歩 ▲九三角 ▲四七飛 ▲七四銀
- ▲五五歩 ▲六二飛

な役目をつとめると共に、自分の角を九三へ一時退却して敵陣陣脚の責任を保たしめる用意である。然し乍ら、此の局面の場合九四歩と突かず、直ちに六、七兩筋から挑戦する急手段もあつて、それとても必ず悪結果に陥るといふ譯ではない。本講座の二號であつたかに、たしか私が説いて置いたと思ふが、讀者はそれによつて参照されたい。上手八八銀の處で、一見九六歩と玉の懐を廣くして置く方が手筋のやうにも思はれるが、その時は下手方透さず、直ぐ六五歩と仕掛けてよい。その手順は下手六五歩、上手同歩、下手九五歩、上手同歩、下手九七歩となつて、以下如何に上手が防衛しても、上手方は端の缺陷を補ふ適當な手段はないのである。故に上手の八八銀はかゝる局面上當然の受け手と謂ふ可き手段であつて、然らざれば他に指し手を求める場合である。下手七五歩の開戦はもう、すべての方面の整備がついたので好時機である。上手同歩は餘儀ない。然し手を抜いて他に攻撃方法を求めてくる場合も、實戦中あるかも知れないが、その應酬法については前に述べたこ

(面局の迄飛二六は圖五十三第)

九	皇							皇	
八					王	將			
七			將	將	馬	馬	馬	馬	
六		馬	馬	馬	馬	馬			
五	馬						銀	步	
四			步	步			桂	角	
三	步	步	銀	金					
二	步	玉	金			飛			
一	香	桂						香	
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩歩 持駒手下

【講義】 上手七六歩及び下手七四歩は共に桂の活用にする手であると同時に、自己の金銀の活動範圍を廣くする手段。上手六七金は六筋及び七筋の備へである。その時下手七三桂は攻撃に着手した手段であり、上手の七七桂はその受け手であつて、此の桂を跳ねず在りて、下手から六筋の戦端を開かれては大いに悪い。次に下手の九四歩は讀者諸君の既に御承知の通り、末に至り敵玉逸出の場合重大

とがある。下手六五歩および上手同歩は双方當然の手順。下手七五角と進出するのは豫定の手段である。上手七六歩も已むを得ない、若し放任して置いて、其處へ下手から歩を打たれると忽ち潰れて了ふ。下手九三角と退く。上手四七飛は極力下手の鋭鋒を避け、受け切らんとする含みである。又斯く上つて置けば、萬一敵角に侵入されるやうな局面を生じても、直接飛車にあたらぬので、即ち手筋といふべき手段なのである。敵の角の筋には、なるべく味方の大切な駒を置かないやう、常に心掛けて置く必要がある。接戦となつた場合さうした一手の警戒が、重大な影響を生じて来るものである。下手七四銀は、敵の陣營は相當堅固であつて、只單一角一枚のみの利き駒では打ち破る事が出来ないで、應援に出掛けるのである。上手白營はかなり丈夫ではあるが、徐ろに下手方が攻撃方法をめぐらして来るので、四六にゐる金を漸次五筋へ移して、五、六兩筋の守備に用ひんとする手段であつて此の局面上唯一の好手である。下手五五歩と應じては、手順に上手の金に進

まれて手損となるので、それには構はず、六筋より強く攻めんとする爲に六二飛と廻る。

第五五六金 第五五歩 第六六金 第五四金
第二五桂 第六五桂 同 桂 同 金
同 金 同 銀

(面局)の送銀同五六は圖六十三第)



【講義】 上手五六金は豫定の手段であつて、六筋方面の

以下上手が七四桂なれば下手は穩かに六四銀と指してよく又上手七四金なれば、下手六六銀と敵桂をとつて角の活躍を計れば、七四にゐる敵金に自分 飛車が利いてゐるから大いに下手の優勢である。右の手順説明中、下手五五歩に對し上手同金、下手五四歩の時上手六四金と出すに、五六金と穩忍すれば、下手は六五桂、上手同桂、下手同銀、上手同金、下手同飛、上手六六歩、下手五五桂、上手四八飛、下手四七金と強く迫つて、是れまた大いに優勢なのである故に本譜の如く上手六六金と指して、下手の鋭鋒を避けつゝ、應酬してゐるのは至當の手段である。下手上手に軽く六六金と寄られて見ると、敵の陣營は相當堅固であり六筋より猛襲しても、擊退されるおそれがあるので、自己の玉營が少しく亂れるけれども、その攻撃隊の應援として譜の如く五四金と強く指すのは、此の局面上至當である。よく諸君がお指しになつてゐる場合見てゐると、一旦槽なら槽に組んで了ふと、もう一寸でもその駒組を崩すまいとして、非常に不便を感じつゝ對局されてゐる方々も多い

備へ。こゝで若し上手五四歩と取り込めば、下手は構はず同金と進み、上手五五歩の時、下手六五桂と跳ね、上手は五四歩と敵の金を取つてゐられないので已むなく六五同桂と應じる。その時下手六六歩と打ち捨て、上手同金でも或は同銀でも、下手六五金と交換を挑まば、次に七四の銀を捌く手順となつて大いに優勢である。故に上手は最初の考へ通り五六金と寄つたのであつて、讀者は一寸複雑してゐるやうでも、靜かにお調べになればよくお判りになることと思ふ。下手五五歩と取るのは即ち手順の妙であつて、同じやうでも下手方六二飛と廻らぬ中、即ち上手が五五歩と突いた時直ちに同歩と取つたのは、その味ひに置いて大いに異なるのである。上手飽くまで軽く六六金ヨルと體をかはず。此の所上手も強く同金と應じて決戦方法に出づれば、下手は一旦穩かに五四歩と打ち、上手六四金と指せば、下手六五桂と跳ね、上手は六四にゐる金が、敵飛車に取られる顧となるので、已むなく六三歩と打つ、その時下手五七桂ナル上手同金、下手七二飛、上手六六桂、下手五五銀迄にて、

やうだが、決してさういふ意味のものでなく、良い手だと思つたなら、どし／＼發展してのび／＼とお指しになるやう心掛けねばならぬ。上手が、金を一枚餘計味方の左翼へ移したから、下手も金を一枚戦線へ送つても別段危険のない理である。尙又本體構圍ひといふものは、玉のそばに金銀が三枚終りまでゐるから、堅實なものと思つてはいけない。三枚もゐるから、一枚位活動して出て尙且つ二枚残り、尙更に一枚戦圍に立つても、更にまだ一枚残つてゐるといふ工合で堅實なのであるから、その邊 呼吸はよく會得して置かれたい。上手の二五桂と跳ねたのは、六筋には敵の全力が集注されて居り、今日となつては策の施すことがないので、下手の攻めを待つと言ふ意味に、自分も亦幾分でも下手の陣營を亂して置き、手駒が多く入つた場合、一氣に逆襲せんとする素地を作つて置くのである。然し此の場合上手自陣を放任せず七五歩と突いて、混戦に導かんとする手段もあるが、一寸面倒にわたるから、その上手七五歩に對する下手の應酬法は、後に變化として説くこ

とにする。下手六五桂は上手の二五桂に對して構つてゐては、一筋から攻められる手段が残つてゐて、自己の陣營が却つて亂れる決果となるから、豫定通り攻撃に着手したのであつて當然である。上手同桂の所で、あはて、三三桂ナルと指しては、下手に桂馬を一枚餘計持たれるので、味合を残して置くのは含み多い。若し取らうと思へば先手であるから後に至つてもとれるのであつて、斯かる手を直ちに指さずに置くは、習はせある方法である。下手六五同金、上手同金、下手同銀と應接して第三十六圖面となる。

第三十六圖面以下の指手。

●六六六歩 ●五六六歩 ●同 銀 ●六六六銀
●同 金 ●同 角 ●六六七金 ●五五五桂

【講義】上手六六歩は當然の受け手である。下手そのとき同銀と進んで決戦する手段もあつて、それでも決して悪くはないのだが、譜の如く五六歩と突く方が軽くして優れてゐる。上手六五歩と取つては下手に五七歩ナルと指されても大いに味が悪いし、尙又直ちに下手に五五桂と打たれ

になる。上手六七金と受けるのは仕方がない。捨て置いては八八角と切られ上手同玉の時、下手六八飛ナルにて詰んで了ふ。又軽く六七歩と凌いでも、下手に五七金と打たれて悪いし、六八金と打ち捨てられ、同玉の時下手に八八角ナルと指されてゐても矢張りけない。又上手が六七歩の時、下手は以上二種の手を指さず、單に三九角と成つてゐても上手が悪い。故に譜の如く六七金と打つのは至當の受けである。次に下手五五桂と打つのは一番安全な攻撃法である。此の所で下手七七歩及び、八八角ナル等の手段もあるが、いづれも紛れが多くて下手の策としては適當でない。

第三十七圖面以下の指手。

●六六六金 ●四七桂 ●六六三歩 ●五七七銀
●六六二歩 ●六八飛

【講義】上手六六金と敵の角を取る。此の場合五五同銀と敵桂を拂つては、下手に八八角と切られ、同玉の時に五八銀と打たれて悪く、尙下手五八銀の所五六金と打つても勝つである。次に下手四七桂ナルの所六六飛と進出しても

でも大いに悪いので、五六同銀と應じる外はない。下手六六銀は一舉にして自分の飛角の活動をはかる手段であつて、當然である。上手同金のところで、六五歩と受けても、下

(面局の迄桂五五は圖七十三第)

Table with 9 columns and 9 rows showing a Go board position. Pieces include King, Silver, Gold, Knight, Pawn, and Cannon. Labels at the bottom: 歩歩歩歩歩金 駒持手下

手に六七銀と取られ、次に六六歩と打たれて見込がないので、同金と取つたのである。下手同角は至當の進出ではあるが、同飛と進んでは、上手に六七銀と打たれて一寸面倒

(面局の迄飛八六は圖八十三第)

Table with 9 columns and 9 rows showing a Go board position. Pieces include King, Silver, Gold, Knight, Pawn, and Cannon. Labels at the bottom: 歩歩歩歩歩金 駒持手下

つたのである。下手その時一旦同飛と應じてゐても、勿論差支へはないのであつて、さう指せば上手は更に六四歩と打つ外はないのであるが、敵玉に早く迫る方が、將棋の本質から至當であるから、譜はそれに構はず下手五七成桂と

寄つたのである。上手敵の五七成桂に對し、自玉の受けに一手を費しては、下手に成桂を寄せられただけ損失が凌る。下手は當然六三飛と指すであらう。さすれば上手は絶對見込がない局面となるので、自玉は八筋へ逸出する手段があるのを頼りに、強く上手六二歩ナルと指すのである。下手直ちに六八飛と打つて追窮する。

第三十八圖面以下の指手

▲七五玉 ▲七八金 ▲八六玉 ▲六六飛
▲三三桂 ▲同 桂 ▲八五玉 ▲八三金

【講義】 上手七七玉と逃げる一手である。下手一寸重いやうだが七八金と打つたのは手順であつて、躊躇してゐては凌がれて了ふ。上手八六玉及び、下手六六飛ナルは双方當然の手順。上手三三桂と成つたのは下手の應手を試みて、その受け方によつては、持駒の威力を利用して入玉の手段をとらうとする策戦。下手同桂と應じるのは一番安全である。同玉及び同金いづれの手で應じて、上手の爲めいろ／＼の策を與へてよろしくないのは、一見しても判る通り。

い。八三金と打つて必死を掛けて置けば、最早上手としては絶對凌ぐ手段なく、下手の手中には金及び桂があるから容易に詰めるのである。依つて下手が八三金と打つた第三十九圖面にて上手敗けであるが、若し下手の八三金を手順に抜いて入玉を企てるべく、上手一四桂と打つて見る。下手同歩と取り、上手一三銀、下手同香、上手一銀、下手一二玉と指して、絶對に、下手方の八三にゐる金をはづか術はないから矢張上手の敗けである。然しこんな駒を使つては、もし下手の八三金を外す結果になつても、上手に見込がなく、到底入玉など叶ふ譯のものではない。

大體以上述べ來つた所によつて、勿論不備の箇所もあらうが、御研究なされたなら、上手が四七飛と浮いて自重する場合の、攻防法はお判りになつた事と思ふ故、今回は是だけに止めて置いて、第三十五圖面以下、上手五六金ヨル下手五五歩、上手六六金ヨル、下手五四金の時、本文にては上手が二五桂と跳ねたのであるが、さう指さずに上手七五歩と突いた場合の變化について少しく説述して置かうと

りである。上手敵陣は堅くて一寸手の下しやうがないので八五玉と脱出を計る。この處捨て置けば勿論すぐ詰んで了ふが、上手九六歩と凌いでも、下手七五金、上手九七玉、下手八五桂にて矢張り寄りである。故に上手は譜の如く八

(面局の迄金三八は圖九十三第)



五玉と上つて見る外はないのである。その時下手六二龍と一旦とつて置いて、自陣にその龍が利いてゐて、上手は術策を施す餘地はないのであるが、手数が掛つて面白くな

思ふ。讀者諸君は一寸煩しいかも知れぬから、第三十五圖面以下の指手順の處を繰返して見て戴いて充分お調べを願ひたい。即ち

▲七五歩 ▲同 銀 ▲同 金 ▲同 角
▲六六銀 ▲九二角 ▲七四歩 ▲六五桂
▲同 桂 ▲同 金 ▲同 銀 ▲同 飛

(面局の迄飛同五六は圖一第化變)



【講義】 上手七五歩に對して、下手は銀を退却してゐて

は指し悪くなるから、強く同銀と出る、上手同金の所七四歩と攻めては、下手に六五桂と跳ねられて、七三歩と成つても下手から五七桂ナルと指されて大層悪い、下手同角の時上手六六銀は極力受け切らんとする手段であつて當然である。下手九三角の所で強く六六同角と切り、一気に肉薄する手段もあるから、左にその手順を参考のため述べて置かう。即ち下手同角なら、上手同金、下手七六歩、上手同金、下手五八銀、上手四六飛、下手六五桂、上手同桂、下手同金、上手同金、下手同飛にて優勢である。然しそれよりも譜の如く穩かに角を逃げてゐる方が下手としては策の得たものである。上手七四歩は決戦策であつて、幾分なりとも紛れを求めるのである。下手六五桂、上手同桂、下手同金、上手同銀、下手同飛は双方とも餘儀ない指し手である。

- 六六六歩 ●七五飛 ●七七七銀 ●五八八銀
- 四八八飛 ●六七銀 ●同 玉 ●六五桂
- 同 歩 ●七七飛 ●同 玉 ●五七角

櫓組 上手方三八飛廻り 下手方七二飛廻り

前回は上手方四八飛と廻つて、中盤に更に四七飛と浮いて、下手方の仕掛を持つ意味のものについて詳述したが、今回は上手方三八飛廻りの策に対する、下手方の應酬法を述べることにする。

尙今回は上手方が早く八八銀と上つて自玉の安全を計つたので、下手方は一旦七二飛と廻つて、餘りに對戦する手順を述べるから、從來述べ來つた(七五角と進出する手段)ものとはその點に於て、相當相違してゐる故、特に充分の御熟讀、御研究あらん事を希ふ次第である。

- 二六歩 ●三四歩 ●四八銀 ●三二銀
- 五六歩 ●五四歩 ●四六歩 ●四四歩
- 三八金 ●五二金 ●五七銀 ●四三金

【講義】 上手六六歩の所で金と打てば、下手は同飛と切つて猛襲すれば必ず優勢である。然しさういふ場合あたつてゐない方の角を切るのは禁物である。下手七五飛と振るのは好手である。上手は歩がないので七七銀と受けたが、若し七六金と打てば矢張下手同飛と切り、次に五八銀打ちにて有利である。



●四七金 ●六二銀 ●六八玉 ●八四歩

(面局の進歩四八は圖十四第)



右の圖面に至る迄の手順の解説は、從來屢々述べてあるから、省くことにする。たゞ一寸相違してゐる點は、上手方が早く玉を上つたので、下手方も八四歩と早く飛車先の歩を進めたのであつて總て棋戦は一方にのみ偏しては、いろ／＼と悪影響をもたらしすものであつて、敵の模様によつて、駒の配置をせなく

てはならない。例を擧げて言へば、向ふの指手に構はず、餘り一方にのみ、自分の駒を偏重させては、その味方の手薄の方へ敵が奇襲して来たやうな場合、始末に負へないやうな結果となる。故に向ふが自分の方を攻めて来るやうな氣配の時は守り、向ふが自分の方を圍つてゐるやうな場合は、急にはこつちを攻める手段がないのであるから、敵を攻める準備をしてゐて、何等差支へはない理由である。要は是等の點が、實戦上の懸引とでも言はふかゝ否そんな言葉では適切でなく、實戦上當然の正しき軍法とも言ふべき要點なのである。

よく初心の方は、たとへば楯組に指さうと思ふと、それのみに氣を取られてゐて、敵の指手に構はず、所謂向ふ見すに、自分の目的を達成する迄は、折角の好手があつてすら、それを指さないで駒組のみ、急いでゐるやうな方もあつて、一言一寸申し添えて置く次第である。

第七八玉 八五歩 六八金 八六歩

上手方一六歩と着手したのは、局面上後手のやうに思はれるかも知れないが、是によつて下手方が受けるか、又は受けないとすれば、どういふ手段に出るか、所謂模様を見たのであつて、早晚突き出さなくてはならない大切な場所であるから、決して無益な手ではなく、場合に善處した手段なのである。

下手方六三銀と上つたのは、漸次攻撃の準備であつて、他の駒との釣合の上から見ても、局面上唯一の好手である。御覽の如く、此の銀が下にゐると、如何にも窮屈に見える陣容が、一手譜の如くかう上ると大層伸び／＼とするのである。次に上手方六七金と上つたのは、是又下手方の銀との釣上斯く指すのであつて、六七兩筋の守備たる事はいふ迄もない。下手方三三銀と上つたのは、目下の形勢から見て、急に激しく攻撃する手段も見當らないので、追々堅實なる楯圍ひに組み上げんとする準備である。

尚上手方の一六歩と突いた釣合上、他の將棋ならば、當然こちらも一四歩と受けるべきであるが、さう指すのは楯

- 同歩 同飛 八七歩 八二飛
六六歩 六四歩 一六歩 六二銀
六七金 三三銀

【講義】 上手方七八玉と寄つたのは豫定の圍ひである。下手方八五歩も同じく豫定の手段であつて、飛車の活用に資する手である。上手六八金は陣營の整備、下手八六歩、上手同歩、下手同飛は双方當然の應接。次に上手方八七歩と打つた時、下手方八二飛と深く引くのは、平手戦と異り大駒落のことであるから、八四飛と中段に構へたのでは、將來攻撃に着手した場合、いろ／＼支障を來すのであることは、諸君が既に御承知の通りである。

次に上手方六六歩と突くのは、自陣の懷ろを廣くしつゝ、金銀の活躍範圍を擴張したのであり、下手方が若し、その筋の位を放任すれば、更に上手方六五歩と突いて、完全に位勝ちとなるのである。故に下手方六四歩と受けたのは當然であつて、敵から突き越されれば、自分の銀の勢力を制限され、以下攻撃挫折の形勢を構成する。

圍ひの場合に限つて悪いのであつて、末に至り玉を二筋へ圍ふ關係上、敵から一筋より戦争をされる懸念がある。尤も下手方が受けずにゐて、上手方から一五歩と突き越されれば、矢張りその順は生じるのであるが、そうする迄

(面局の迄銀三三は圖一十四第)

Table with 8 columns and 8 rows showing a Go board position. Columns are labeled 一 to 八 (1 to 8) and rows are labeled 一 to 八 (1 to 8). Pieces include King (王), Silver (銀), Gold (金), Knight (桂), and Pawn (歩).

には上手方は貴重な二手を費すのであつて、下手方が一四歩と受ければ、其の筋は双方一手一手を費してゐる事になり、上手は結局一手も費さないで済んだ計算となるのであ

る。是れ即ち、下手方が受けるのと、受けないのとの、異つた意味を生ずる次第である。

第四十一圖面以下の指手。

- ▲一五歩 ▲四二玉 ▲二六歩 ▲二二玉
- ▲三八飛 ▲三一角 ▲三五歩 ▲同歩
- ▲同飛 ▲三四歩 ▲二八飛 ▲二二玉
- ▲七六歩 ▲七四歩 ▲八八銀 ▲二一金
- ▲九六歩 ▲九四歩

【講義】 上方一五歩と突き越したのは、さきに一六歩と突いたに伴ふ手段であつて、一手費したのを無意義に終らしめない意味から見ても、至當である。

次に下方四二玉と上つて整備につく。上方三六歩と突くところ、三六金と出て四五歩と交換をはかる手段もあるが、それは今迄にも度々説いてゐるから、それによつて御調べを願ふ。下手三二玉と圍ふ時、上方三八飛と振つたのは、その筋の歩の交換を了し、徐ろに對戦せんとする含みある手段である。此のところ三七桂と跳ねては、以下

次に上方九六歩と突いたのは、益々玉の範圍擴張の策であつて、下方又九四歩と位を維持するのは當然。

(面局の進歩四九は圖二十四第)

九	香	桂	飛	王	飛	桂	香	九
八								八
七								七
六								六
五								五
四								四
三								三
二								二
一	香	桂	角	金	銀	歩	歩	一

歩 駒持手下

第四十二圖面以下の指手。

- ▲二五歩 ▲七二飛 ▲七七銀 ▲七五歩
- ▲同歩 ▲同飛 ▲二八飛 ▲七二飛
- ▲七六歩 ▲七四銀

【講義】 上方二五歩と突くのは、徐ろに攻撃の準備。

上方の金銀は戦線へ活躍する餘地を失ふ。下方それに構はず一角と引く。上方三五歩は豫定の行動である。

尙一寸解説が前に戻る嫌ひはあるが、上方が初め、二五歩と突、次に置いたのは、此の飛車を三筋へ振る豫定であつたからで、それでは何故、飛車を三八へ振る策戦の場合、上方早く二五歩と突き越してはいけないかと言ふと、模様によつては、下手三五同歩、上手同飛の時、下方に二四歩と突かれる手や、或ひは三四銀と突つ張られる(但下方の玉は今一手二二へ寄つてゐる計算)やうな手段があつて面白くないからである。又一つには上方の飛車を三筋へ振つた場合、二五の歩が一時孤立するから、下方に八五飛などの手段も生じる。上手三五同飛の時、下手四歩と手堅く打ち、上手三八飛と再びもとへ戻つた時、下方二二玉と更に圍ふ。上手七六歩は桂の活用を兼ねて、自陣の懐ろを廣くする手段。下手七四歩は同じく桂の活用をはかると同時に、その筋の位をたもつ手段。上手八八銀は備へ。下手三二金と上つて完全なる構圍ひに組上げる。

下方七二飛と振るのは、本定跡の大切な所であつて、現状のまゝ例の通り、七五歩と突き六五歩と突き、七五角と進出しても、此の局面は、上方が早く八八銀と上つて居り、尙上方の五七銀には、四七金の連絡があるから、從來の筆法を以て攻めたのでは一寸六ヶ敷しいのである。

よく初心の方は何でも、角落構圍の終極は、角を七五へ進出しさへすれば、容易に勝ち得るものと思つてゐるやうだが、よく敵の前後の駒組の模様によつて、臨機處置をとらねばならないのである。上手七七銀と上つたのは堅全に自玉の頭を守つたのである。下手七五歩と交換を挑むのは豫定の手段。上手同歩、下手同飛の時、上手二八飛と又もとへ振つたのは、一寸奇異の感に打たれる手だが、言ふまでもなく次の手を以て、下方に二五飛と振られたらば、大變であるから——危いこと——次に下方七二飛と引いたのは一切の紛擾を避ける意味において慥かな手である。今度上方捨て、置いて、下方に七五歩と打たれては、完全にその筋の位を占められて不利な局面となるの

で、上手七六歩も當然の防手である。下手七四銀と繰り出すのは、漸次攻撃の策略であつて、穩健なうちにも、鋭い味合を含んでゐる手である。

(面局の迄銀四七は圖三十四第)

九	香	桂	飛	銀	歩	歩	歩	歩	歩	香
八										
七										
六										
五										
四										
三										
二										
一										

歩歩 駒持手下

第四十三圖面以下の指手。

兎八六銀 兎六五歩 兎三七桂 兎六六歩
 兎同銀 兎六五歩 兎五七銀 兎八二飛
 【講義】 上手八六銀と上るのは、慣はせある防手であつ

即ち上手五七銀と引かず、七五銀と出たものとする。下手八五歩と打ち、上手方が七七銀と退却すれば、下手方七五銀、上手同歩、下手同角の結果となり、次に上手方は敵角の侵入に何等か備へなければならぬので、大いにその應手に窮するわけである。

尙又右手順中下手八五歩の時、上手方七七銀と引かず、七四銀と取れば、下手八六歩の順となり、そこで上手方は八六同歩と疵を凌いでゐては、下手方に七四飛と指されて胸損であるから勢ひ、八三又は六三へ銀を先手に成る外はない。その時下手方は(上手六三銀ナルの方なら)八七歩ナル、上手同玉、下手八二飛にて大いに優勢であるし、尙又(上手八三銀ナルの方なら)八七歩ナル、上手同玉、下手六二飛にて是亦大いに優勢である。

右に解説した通りであるから、下手方の六五歩に對し、上手方七五銀と出る手段はないのであつて、弱いやうに見えても五七銀と退却する外はないのである。

その時下手方八二飛と一間寄つて、再びもとの位置へ据

て、此の一手を怠ると、下手方に六五歩と突かれ、上手方同歩の時、下手七三桂と活躍される順序となり、忽ちにして上手方不利の局面となるのである。

尙又上手方此の八六銀の意味は、自己の端即ち九筋の凌ぎをも兼ねてゐるのである。

次に下手方六五歩と突いて交換を挑んだのは局面上唯一の好着手であつて、上手六五同歩と應ずれば、下手方も同銀と進み、次に七六銀の手段を狙ふのである。故に上手方六五同歩の手段は不利であるから、それには構はず、譜の如く三七桂と跳ねて、我々敵陣攻撃の準備をはかるのである。下手六六歩と取り込み、上手同銀の時、下手方六五歩と抑へて置くのは、實に大きな位勝ちであつて、一寸遠いやうに見えるが、此の下手方の六五歩の勢力が敵玉に強い響きを與へてゐる事は論をまたない。

次に上手五七銀と引いたのは、上手としては餘り退嬰策の如くにも見えるが、此のところ七五銀と強く出ても、下手方に八五歩と打たれて、大層悪いのである。

はるのは至極難かな手段であつて、漸次玉の小鬘から、攻撃の舉に出でんとするのである。

下手方が七二飛と廻つた使命は、徹頭徹尾敵の玉頭より

(面局の迄飛二八は圖四十四第)

九	香	桂	飛	銀	歩	歩	歩	歩	歩	香
八										
七										
六										
五										
四										
三										
二										
一										

歩歩 駒持手下

粉砕せんがためには非ずして、六、七、八の各方面より一舉に襲はん準備を施すためであつたのだ。故に左の圖の如き模様を呈しては、既にして、七二飛と廻つた使命は、充分果し得たものと言つてよいのである。

第四十四圖面以下の指手

【講義】 上手四五歩と突くのは、自分も亦攻撃の緒に就いたのであつて、局面上當然の指手である。

次に下手方八五歩と打つのは、一見重い手のやうであるが、此の場合適切な手段であつて、此の上手方の銀が八六にゐる間に攻撃を施しては、却つてそれを利用されるから、危険(攻撃中絶若しくは攻撃不能の意味)である。

此の時上手方七七銀と引くのは、如何にもおとなしく、上手方の策としては弱い手の如くに見えるが、實は當然の防手であつて、此の所上手七五銀と出ては忽ち危険に陥る——と言つただけでは餘りに漠然としてゐる嫌ひがあるの

で、左に一寸その場合の双方の應酬手段を述べて置かう。

【別講】 上手七五銀と出たなら……
即ち下手同銀、上手同銀の時下手六六銀と打ち込み、上手方同銀にても、同金にても、下手同歩と取り、次に八六歩の突き出し及び、七五角の出があるから、下手優勢であ

であるから、譜の如く七七銀と退却するのが適當なわけである。その時下手方が九五歩と仕掛けたのは、味ふべき手段であつて、將來此の筋の歩が切れてゐるために、大層指し易いのであつて、目下の局面としては一番時機を得た手段と言へる。斯ういふ手はウツカリ、緊要な場合に突かないと上手方に手を抜かれて、何にもならない結果を來すから、其の時機を損ふのが大切であつて、注意をしないと、大變な手違ひを來すことがある。

第四十五圖面以下の指手

【講義】 上手九五歩と應じたのは、次に下手方から九六歩と取り込まれては、疵が大きいから當然の應手である。下手方そこで七五歩と打つたのは、一番早い攻め手であつて、所謂攻撃上の手筋ともいふべき手段である。

上手四四歩と取り込んだのは、兎も角も敵の應手を試みる。

る。尙又右の下手六六銀打ち込みに比して、幾分紛れある嫌ひはあるが、上手方七五同歩の次ぎ、下手同角、上手七六金(七六歩と打てば下手四二角と懸かに指してゐて以下指し易い)の時、下手五七角ナルと切つて上手同金の次に、下手七五歩と叩き、上手同金、下手六六銀の順となつても矢張り指し易い。それから右手順上手七六金の時、下手五七角ナルと切らず、一旦懸かに四二角と引き、上手が幸便に六五金と進むべく六四歩と輕手を指した場合、下手一旦八六歩と突き捨て、上手に同歩と應じさせてから、六四同角と進出して、矢張り優勢である。

尙又上手七六金、下手四二角の時、上手七五歩打ちなら、下手六四銀と打つて、次に七五銀の交換を狙へば、是亦大いに指し易い。

大體この程度の説述にて、お判りの事とは思ふが、若し御不解の點があれば、いくらでも調べてお答へいたします。扱此の邊で本文に戻り、右のやうな次第であるから、下手の八五歩に對して、上手七五銀と出るのは、稍指し過ぎ

たのであつて、幾分なり攻撃の手掛りを作つて置くのであつて、局面上至當の一手である。

その時下手方同金と應じるのは、心得べき手であつて、

(面局の逆歩五九は圖五十四第)

香	桂	飛	銀	歩	歩	歩	歩	歩	香
桂	角	金	銀	歩	歩	歩	歩	歩	桂
角	金	銀	歩	歩	歩	歩	歩	歩	角
銀	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	銀
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩

此のところ同銀と取つては、上手方に二四歩と突かれ、いろ／＼策を施される餘地を與へるのである。次に上手七五歩と取つたのは、強く凌ぎ切らうの策であつて、下手から七六歩と取り込まれては、大いに指し悪い

といふ事は、諸君においても一目瞭然のところ。

下手方七五同銀の時、上手七六歩と打つのは、飽くまで強く凌ぎ切らうの手段。下手八六歩と突いたのは豫定の交換であつて、此の場合銀を退却してゐるやうな事では、必ず敗局となる。

上手八六同歩、下手同銀、上手同銀の時、下手方が同角と進出して次の圖となつたが、さて此の場合、上手方どうして凌ぐものか——

第四十六圖面以下の指手。

四七七銀 同 角 同 桂 四八九銀

【講義】 上手方第四十六圖面の場合、八七歩と打つては下手方に五九角ナルと指されて、大いけ指しにくく、以下絶対に見込みがない。故に六八歩又は六八銀の凌げば、下手方に八七銀と激しく打ち込まれて、是亦絶望である。として見ると、最も軽い凌ぎは七七桂と跳ねる手であるが、その時下手方に九八歩と打たれて、九七角ナルの味を作られて大いに悪いのである。故に此の下手九八歩の時、上手

から調べ来れば、前に下手方が九五歩と突いた手段の如何に大切であつたかは、よくお判りの事と思ふが、此の下手方九八歩打ちの手段がなければ、第四十六圖面の場合、上手方に七七桂と軽く飛ばれてゐて、一寸攻め手に窮する所以である。右に述べたやうな次第であるから、上手方七七桂と受ける手段も悪いといふ事になるので、譜の如く七七銀と打つて凌ぐのである。その時下手方同角ナルと切るのには當然の攻め手ではあるが、此の場合にも若し下手恐怖の念にかられて、角を退却すれば、忽ち混戦となり勝敗の數、従つて未定である。下手七七角ナルと切つた時、上手方同桂と應じたのは、若し同金と取れば(上手同玉の手段はない)下手方に直ちに六九銀と打たれ、上手同玉の時(上手七九玉と引いても下手方に七八歩の手がある)下手八九飛ナルと侵入されて悪いので、譜の如く七七同桂と指したのである。その時下手方躊躇逡巡してゐて、自己の飛車先を止められては負けとなるから、八九銀と鋭く迫つたのであつて、一見重い手のやうではあるが、局面上當然の攻め手で

同香と應じれば、下手方に八九銀と打たれ、上手同玉の手段はないから(註)上手八九同玉なら、下手方に七七角ナルと指され一遍に敗けて了ふ)六九玉と落ちる外はない。その時下手方に九八銀と取られてゐて矢張り上手敗けてあ

(面局の迄角六八は圖六十四第)

九	皇							王	皇
八		銀						王	
七				王	王	王			
六							角		
五						歩			
四					歩	金	歩		
三					歩	銀			飛
二					歩	玉	金		桂
一	香				桂				香
		一	二	三	四	五	六	七	八

歩歩歩銀 駒持手下

あつて、斯かる場合には、要するに一つの攻撃手筋である。第四十七圖面以下の指手。

四六九玉 四七八銀 四五八玉 四八八飛

(面局の迄銀九八は圖七十四第)

九	皇							王	皇
八		銀						王	
七				王	王	王			
六							角		
五						歩			
四					歩	金	歩		
三					歩	銀			飛
二					歩	玉	金		桂
一	香				桂				香
		一	二	三	四	五	六	七	八

歩歩歩銀 駒持手下

【講義】 上手六九玉と避けたのは至當の逃れであつて、六八玉と寄る手はない(下手方に八八飛ナルと王手をかけられる)その時下手七八銀と更に打つのも、惜しい駒だが局面上已むを得ない。斯かる場合苟も一手たりとも、緩

い攻めは禁物であつて、寄せ手順のきびしきを尙ぶ事は、是迄も屢々述べる通りである。

次に上手方七八同飛と切りたい處ではあるが、下手方同銀、上手同玉の時、下手八八飛打、上手六九玉、下手八九飛ナルにて見込みないのである。即ちその時上手七九銀と合ひ駒を打てば、下手に八八飛ナルと迫られ、六八銀と凌いだ時、下手七八歩にて、絶對優勢の局面である。尙又右の手順の中、下手八九飛ナルに對し、上手五八玉と上れば下手八八飛ナル、上手六八銀打(六八歩と軽く凌いだのは、次に下手方九九龍ハイル迄にて絶對見込みない)の時、下手九九龍入ル、上手五九銀打ちの時、下手六六香迄にて是亦絶望の將棋である。

右述べた通りであるから、下手の七八銀打ちに對して、上手方は同飛と切らず、五八玉と上つたのであつて、次に下手方が八八飛ナルと侵入した左掲の第四十八圖面迄にて上手方以下絶對に凌ぎ切れないのである。然し乍ら例により、念のため上手方の防手に就いて、二

櫓組 上手三八飛廻り 下手七二飛廻り

本號にも前號と同じもの、即ち上手方三八飛廻りに對し下手方七二飛と廻つて、餘りに應戰する手段に就いて、説述して行くことにする。

大體此の上手方三八飛廻りは、持久戰の方針であつて、下手方の攻撃を待ち、極力防戦し盡さうといふ策戰なのであるから、下手方もその心算で指さないと、指し切りに陥るのである。

つまり普通櫓組の時の戦法によつて、下手方早く七三桂と跳ねると(飛車の方の桂馬)上手方のため、巧妙に凌ぎ切られることは、往々見聞するところである。故に上手方その戦法に對しては、下手方は七二飛と廻つて、漸次應戰攻撃の途につくべきが、一番安全なのである。

以下私の説述するのは、その意味に基いてであるから、讀者諸賢も亦、その私の微意を諒せられ、その心算で御愛

三穿鑿のメスを揮つて置かう。

右の圖面の場合、上手方捨て、は置けないから六八金と引けば、下手六六歩と突き上手同銀の時、下手六七歩と打てば優勢。又上手六八歩と凌げば、下手六七銀成、上手同

(面局の迄ルナ飛八八は圖八十四第)

Table showing a Go board position with pieces like King, Silver, Knight, and Pawn. Includes a legend for piece names and directions.

玉の時、下手七八銀ナラズ、上手五八玉下手九九龍にて矢張優勢。尙上手四九玉なら、下手七九龍と王手をかけ置き、次に六七銀ナル迄の將棋である。

讀御研究あらんことを、ひたすら希ふ次第である。例により第四十九圖迄の指手順を左に記す

- List of Go moves: 二六歩, 三四歩, 四八銀, 三二銀, 五六歩, 五四歩, 四六歩, 四四歩, 三八金, 五二金, 五七銀, 四三金, 四七金, 六二銀, 六八玉, 八四歩

(面局の迄歩四八は圖九十四第)

Table showing a Go board position with pieces like King, Silver, Knight, and Pawn. Includes a legend for piece names and directions.

第四十九圖面以下の指手。

飛七八玉 飛八五歩 飛六八金 飛三一角
飛三六歩 飛八六歩 飛同歩 飛同角
飛八七歩 飛四二角 飛三二八飛 飛三二銀

【講義】 第四十九局面迄の解説は、是まで屢々諸君のお耳——ちやないお目に入れてあるから省略する事にする。大體それまでは駒組も初めの中であつて、既に充分御會得のこと、信じる。

第四十九局面以下上手七八玉と寄るのは、早く自玉の整頓をはかる手段。下手八五歩はその筋の歩兵交換の準備である。次に上手方六八金と上るのは駒組である。

その時下手方三一角と引くのは、飛車先の歩を飛車で交換せず、此の角で交換をして、一手の利益を占めんがための手段である。

その意味は以下譜につれて判然する事と思ふ。

上手三六歩と突くのは、此の手によつて完全に三八飛廻りの意思を明かにしたものであつて、二筋から漸次攻撃の策に出づるのなら、此のところまで三六金と上らなければ、

ば、手徳であるといふ計算。

上手方三八飛と寄るのは、前に述べた如く、持久戦様様に位を低く構へたのである。

下手方三三銀と手堅く守る。

(局面の迄銀三三は圖十五第)

八	香	桂						香
七	飛	桂						飛
六	歩							歩
五	歩							歩
四	歩							歩
三	銀							銀
二	金							金
一	角							角
九	玉							玉
八	金							金
七	銀							銀
六	歩							歩
五	歩							歩
四	歩							歩
三	歩							歩
二	歩							歩
一	香	桂						香

第五十局面以下の指手。

飛三五歩 飛同歩 飛同飛 飛三二金
飛三二八飛 飛三四歩 飛一六歩 飛四一玉

後に金銀の活動が出来ないわけ。

これは定跡の講義であるから、右のやうに一々申し上げるが、實戦の場合は、向ふの指し手によつて、その戦路を早く観破しなくてはならない。

その意味に於て、定跡の精通といふことが大切なのであつて、多くの型に通じてゐれば、その位の事は忽ち容易に観破し得る問題である。

そこで下手方八六歩と突くのは、豫ねて予定の通り、その筋の歩兵交換策である。

上手八六同歩、下手同角と進み、上手方が八七歩と打つ時、下手もとの位置へは引かず、四二角と好位置へ据えるのであつて、下手方の角は三一へゐるよりは、此の四二の方が好位置である事は、私がかどくしく言ふまでもなく諸君に於て先刻御承知の筈。

として見ると一旦飛車で八筋の歩を交換したのでは、後に下手方一手を費して四二へ角を上らなければならぬのであるから、此の機會に角にてその歩の交換を了して置け

【講義】 上手三五歩と突いたのは、兎も角その筋の歩も交換して、一步掌中に收めんがためである。

下手方三五同歩は當然。上手三五同飛と進出した時、下手三二金と上つたのは、こゝで三四歩と打つても結局同じ順である。

上手先に三八飛と引くのは、一切の紛擾を避けたのであるが、次に下手方がウツカリしてゐれば、直ちに三五歩と位を張らうの恐ろしい計畫である。

故に下手方直ちに三四歩と打つて置くのは、當然であつて、上手方に三五歩と位を張られては、まあ十中の八九敗局であるといつても過言ではない。

それほど角落戦には位取りが大切であつて(尤も角落戦に限らずどの將棋でもさうであるが、角落は殊にその響きが大きい)とこの筋でも、位を張る張られるが、その一局の向背を左右するものである。

次に上手方一六歩と突くのは、前號にも述べた如く、上手方としては大切な手なのであつて、將來端から攻撃をと

る準備であり、又一つには接戦となつた場合、下手方の角を一五へ飛び出されないためでもある。次に下手方四一玉と寄つたのは、漸次安全なる構圍にする準備である。

(面局の迄玉一四は圖一十五第)



歩 駒持手下

第五十一圖面以下の指手。

- ▲二五歩 ▲二一玉 ▲六六歩 ▲六四歩
- ▲七六歩 ▲七四歩 ▲六七金 ▲六二銀

であり、下手方の攻撃に對する唯一の姿勢である。下手方六三銀もそれと同じ意味。

(面局の迄銀三六は圖二十五第)



歩 駒持手下

第五十二圖面以下の指手。

- ▲九六歩 ▲九四歩 ▲八八銀 ▲二二玉
- ▲二八飛 ▲七二飛 ▲七七銀 ▲七五歩
- ▲同歩 ▲同飛 ▲七六歩 ▲七二飛
- ▲三七桂 ▲七四銀 ▲三六金 ▲六五歩

【講義】上手二五歩と突いたのは、後の攻め準備であつて、此のところ此の歩を突かすにおいて、三七桂と跳ね、更に二五桂と跳躍する手段もある。それは既に前に上手二五桂跳ねの部に説いてあるが、適當の機会にもう一回ぐらゐは、それに就いて述べたいと思つてゐる。

下手方三一玉は豫定の圍ひ。上手方六六歩と突くのは、金の活動を擴くし、尙ひいては七筋の位取りである。

下手方六四歩はその受けであるが、前にも言ふ如く敵に突つ張らせては指しにくくなる。

上手七六歩の突き出しは、玉の懷ろを廣くし、桂の活用にあつては指しにくくなる。

下手方七四歩もその筋の位を維持し、且つ將來桂の活動等に備へる手段である。

上手方六七金と上つて、愈々自營の勢をばかる。此の形は角落の場合においては、上手方一番多く應用するもの

▲同歩 ▲七二桂

【講義】上手方九六歩と突くのは、大體が持久戦の方針であるから、玉の範圍をひろくして置くのであつて、接戦に際し此の端歩が一手突いてあるために、助かるといふやうな例は亦決して少くない。

下手方九四歩はその受けである。

上手方八八銀と上つたのは、模様によつて七七銀と出て、防ぎに用ひんがためである。

下手方二五玉と上つて全くの構組となる。

上手二八飛とともへ廻つたのは、漸次桂を活用して將來二、四兩筋から相協力して下手方を攻めんとする、深い意味を含んでゐる。

次に下手方七二飛と振るのが、本定跡の大切なところであつて、此の所普通の如く、下手七三桂と跳ね、上手七七桂と應じた時、下手七五歩と突き、上手同歩と應じ、下手六五歩と突いて、次に七五角と進出しても、上手方の右の金が五七へ利いてゐる關係上、上手方の陣は一寸破り出來

ない。
故に本譜の如く下手方七二飛と振つて、徐ろに對戦する
のが一番安全な方法なのである。
以下私の説述に伴ひ、是非とも充分前後の利害得失を御
研究いたされたい。

上手七七銀と上るのは、極力その筋の防衛手段である。
下手七五歩と突いて、一旦その筋の歩を交換して置くの
は、豫定の行動である。上手同歩、下手同飛、上手七六歩、
下手七二飛までは双方當然の應酬である。

そこで上手方三七桂と跳ねたのは、下手方の策戦が、六
七兩筋より極力攻め来るにありと觀破し得たので、自分
も亦、四筋より下手方の陣營を亂すべく、その緒に就いた
といふわけの手段。

下手方七四銀と繰り出すのは、七二飛の意味をうけ繼いで、
飽くまでそれを貫徹すべき準備である。

上手三六金と上るのは、次に四五歩と仕掛けて、下手方
同歩、上手同桂、下手四四銀の時、上手二四歩と突き出し

ものかは、よくお判りであらう。

次に下手方六五歩と仕掛けるのは豫定の攻撃であつて、
是により自分の角路を通し、尙以下銀桂の活動を劇するの
である。その時上手方六五同歩と應じたのは、局面上他に
に適當な手段がないから、此の際としては至當な應手なの
である。若し手を抜き置けば、下手方に六六歩と取り込ま
れ、次に六五歩と打たれると大いに位を損じる。

下手七三桂と跳ねたのは好手筋であるが、此の順逆を
誤らぬ様、特に御注意ありたい。

第五十三圖面以下の指手。

- ▲六六銀 石 ▲六一飛 石 ▲四四五歩 石 ▲六五銀 石
- ▲四四歩 石 ▲同 金 ▲四四五桂 石 ▲同 金 石
- ▲同 金 ▲六六銀 石 ▲同 銀 石 ▲七四桂 石

【講義】 上手方六六銀右と上るのは、敵の六五桂跳ねの
手段に備へたのである。

しかし此の場合、上手方として 早く變化を求める意味
に七五歩と軽く突き出す手段もあつて、それに對する應手

て、下手方の玉頭破壊策を講ずる時の唯一の武器である。
もつとも、此の上手三六金の所、直ちに四五歩と突く手も
あるがそれは少しく無理な仕掛けである。
即ち上手方四五歩と突けば、

- ▲同 歩 石 ▲同 桂 石 ▲四四銀 石 ▲四六金 石
- ▲六五歩 石 ▲二九飛 石 ▲九五歩 石 ▲同 歩 石
- ▲九八歩 石 ▲同 香 石 ▲九七歩 石 ▲同 香 石
- ▲九六歩 石 ▲同 香 石 ▲八五銀 石

右のやうな結果となり下手方歩切れではあるが、大いに
指し易い。尙又右の手順中下手方の六五歩に對し、上手方
二九飛と引かず、六五同歩なら、下手方七三桂と活用して
充分である、といつて上手方格別他に適當な手段はないの
であつて、その場合、二四歩と突いて敵の玉頭を攻めても
歩だけの持駒では効果なく、時機尙早である。

是れ上手方が本譜の如く、四五歩と仕掛けず、三六金と
上る理由であつて、言はゞ敵の模様を見たのである。
かくの如く研究して見ると、如何に一手の緩急が大切な

を研究してないと、下手方一寸間違つて處である。

即ち上手方七五歩突きなれば、

- ▲同 角 石 ▲六六銀 石 ▲六五桂 石

(面局の迄桂三七は圖三十五第)

八	星					王	星
七		銀		香	香	香	
六			銀	香	香		
五						銀	步
四			步	步	步	桂	
三			步	金	角	飛	
二			步	玉			
一	香		桂				香

右のやうに捌いて行けば、下手方必ず優勢である。此の
やうな處で、躊躇 逡巡することは大禁物であつて、強く
決戦する意思がなければ、却つて禍するところが多い。た
とへば右の手順中、上手六六銀右に對し、下手方一旦角を

退却したりしては、指しにくくなるといふ理由である。是れ上手方が七五歩と突かず、穩かに六六銀右と出た理由であつて、その時下手六二飛と廻つたのは、攻撃の手筋として、充分味つて置いて載きたい。

これを他に手段を求めては、いづれも攻撃不能に陥るのである。例令ば直ちに六五銀と出れば、上手方に捨て置かれて、結局下手六二飛と廻る手順となるのである。又上手方に強く六五同銀と應じられても、下手方の飛車の運用が涉々しからぬので、矢張指しにくくなる。

是れ下手方六二飛と寄つて、機熟するを待たつたわけ。その時上手四五歩と突いたのは、六筋は最早敵の勢力集注して、適當な防衛策がないから、自分も亦四筋から、桂を利用して攻撃の準備をはかるのであつて、局面上至當の着手である。

下手方それには構はず、六五銀と交換を挑む。上手一旦四四歩と取り込むのは、兎も角下手方の應手を問ふたのである。

却つて指しにくいのである。

そこで下手方四五同金と切るのは、非常に好い手段であつて、是非とも實戦に際して、忘れず應用して載きたい。一時駒の釣合から見れば損であるが、それがため敵の攻撃力を根絶し、先手の權利を握るのであるから、棋勢の上から見て、ちつとも損にはなつてゐないのである。

此の邊の英斷をよく味ふ事が必要であらうと思ふ。上手方四五同金と取るのは至當である。下手その時初めて六六銀と取り込む。上手方同銀と上る一手である。

次に下手方七四桂と打つのは、よい攻撃手筋である。此のやうなところを攻めるのには、桂馬が一番有効なのであつて、六五歩と打つやうな手は、自分の飛車道が止るのでいけないのである。つまりさういふ手を重たいといふのである。

此のやうなきびしい攻撃手段があるから、前に下手方四五同金と切つたのであつて、上手方としては桂馬を渡した

下手四四同金と上るのは、是亦手筋といふべきものであつて、此のところ同銀と上つては、上手方に二四歩と突かれていろ／＼策を施こされる。尤も下手方四四同銀と應じれば、上手方に二四歩と突かれて、それによつて勝敗を轉倒する程悪い手であるといふ意味ではなく、さう指したとしても格別俄に不利な局面に陥ることはない。たゞ下手方としてはなるべく面倒な將棋にならぬ方が上策であるから四四同金と應じた方が、遙かに安全なのであるといふ意味である。諸君は是非とも、駒を並べて見て、四四同銀の型も一應は研究して置く必要があらう。

さうした形に對する下手方の攻防法も、いづれ折を見て委しく説述したいと思つてゐるが、本號は誌面の都合上、殘念乍ら省略することにした。上手方四五桂と跳ねるのは、當然の攻撃である。此のところ四五歩と打つたのでは、下手方におとなしく金を引かれてゐて、後の手段に窮する。又四五金と強く決戦策を取つても、下手方に相手にされず四三歩と受けられてゐても

くなかつたのであるが、桂を跳ねなければ、下手方を攻撃する手段がないので、局面上已むを得なかつたわけ。上手方が結局下手の掌中に桂を持たせる順を嫌つて、攻めて來なければ、下手方は六筋の位勝ちを利用して、七八兩筋から角の威力を發揮すべくつとめればよい、さうすれば自然飛車も充分活動出来る局面となるのである。

(面局の迄桂四七は圖四十五第)

九	香	桂	玉	銀	歩	歩	歩	歩	香
八									
七									
六									
五									
四									
三									
二									
一									

下 駒持手

第五十四圖面以下の指手。

- ☉七七七銀 ☉六六六桂 ☉同銀 ☉六五五歩
- ☉七七七銀 ☉六六六銀 ☉六八八金 ☉八五五桂
- ☉七九桂 ☉六七銀

【講義】 上手七七七銀と打つのは餘儀ない受け方である。

即ち捨て置くわけにはいかないから、七五銀と上れば、下手に同角と切られるし、五七又は七七へ銀を退却すれば、直ちに下手方に六六歩と打たれ、次に六七銀と打ち込まれて潰滅である。是れ上手方七七七銀と打つ外はない所以——そこで下手方六六桂と跳ね、先づ敵銀を一枚仕留め、上手が同銀と上る時、六五歩と打つ。

前にはなるべく自分の飛車先へ歩を打たぬやう、御注意申し上げたのであるが、斯様な場合(桂のやうな調法な駒が手にない時には、他によい方法がないから、已むを得ないのであつて、若し此の處でも手兵に桂があれば、矢張り下手方七四桂と打つべき手筋であることは勿論)

次に上手方七七七銀と玉頭に引くのは當然であるが、此の處で五七銀と引く手もあるから左に一寸それについて述べ六六歩と突き出して置いて充分である。

尙又右の手順の中、上手七七同金のところ、同玉なれば下手方直ちに八五桂と跳ね、次に六六歩と突き出して、大いに優勢な將棋である。

故に上手方は、下手の六六銀打に對し、六八金と打つて凌ぐのが局面上至當である。その時下手方八五桂と跳ねるのは、所謂總攻撃である。

上手方七九桂と打つて極力凌ぐ。

此のところでは上手方七七の銀を逃げれば、下手方は直ちに六七銀ナルと指し、上手方が同玉にても、又は同金にても、下手方六六歩の突き出しにて必勝である。

であるから、上手方としては體のごとく、七九桂と打つて一意防戦にとめる外はないのである。

その時下手方六七銀ナルと指すのは、兎も角敵がそれを何で取るか、その應手を問ふたのであつて、此のところ周章でも、下手方七七七桂ナルと指すのは面白くない。

即ち下手七七七桂ナルと指す、上手方幸便に同金ヨルと應

- ☉六六銀 ☉六八八金 ☉六七七銀 ☉同金
- ☉六六銀 ☉六八八銀 ☉四七金

て置かう。下手の六五歩に對し上手方五七銀なら——

右のやうな手順となり、下手方に四七金と打たれるに及んでは、却つてその攻撃の目標となるおそれがある。尙又右の手順中、上手方六八金と打つて凌ぐところ、六八歩と打つて守れば、下手方五七銀ナル、上手同金の時、下手方六六歩と突き出して置いて、次に六五桂の跳ね出しを狙へば必ず優勢である。

そこで又本文の解説に戻り、上手方七七七銀と引く時、下手方六六銀と打ち込んだのは、飽くまで攻撃の手を弛めず、激しく攻め立てるのである。

そこで上手方放任して置くわけにはいかないから(註)下手方に六七七銀ナルと指されては全滅である)六八金と打つて凌ぐ。此の處でも上手六八金と打たず、六八歩と打つて守れば、下手方七七七銀ナル、上手同金の時、矢張り下手

じて、次に下手方が同銀ナルと指した時、上手同金と上つて、下手方の六筋攻撃を、遠ざかる順序となる。

つまり下手方としては、此の敵の七七七銀を取らないで置いて「逃げよ」「逃げよ」と指すのがよい。

上手方としては、此の七七七銀を逃げれば、下手方に六筋を突き出される順となるので、到底凌ぎ切れないから、なか／＼銀を動くわけにはいかないのである。

此の邊の呼吸は非常に大切なところである。第五十五圖面以下の指手。

- ☉六六七金 ☉六六六銀 ☉六八八銀 ☉六七七銀
- ☉同玉 ☉七七七桂

【講義】 上手六六七同金は當然、次に下手方六六銀と打ち込んだのは、手順に敵の金と自分の銀とを交換する含み。上手方の六七にゐる駒が金でなければ、その時には初めて、

下手方七七七桂ナルと指せるのであつて、上手の六七に金がゐる間は、下手方七七七桂ナルと指せば、上手方に幸便に同金と寄られて、以下の攻撃上不便を感じる。

上手方六八銀と打つのは、飽くまで防戦につくす手段。下手方六七銀ナルと指して、完全に敵の金を制服し盡す。上手今度は六七同銀と上れないのであつて、右に説述したごとく、さう指せば、今度こそ下手方に七七桂ナルと指され、次に六六歩の突き出されがあつて、上手方大いに悪く、如何に奮戦しても絶望である。

(面局の迄成銀七六圖五十五第)



それであるから、上手方兎も角六七同玉と應じるのは、此のやうな場合としては已むを得ない。然しながら次に下手七七桂ナルと指すに及んでは、その

櫓組 上手三八飛廻り 下手七二飛廻り

今回も前號と同じく、上手方三八飛廻りに對し、下手方健なる七二飛廻りの戦法によつて、對局するものを説述することにした。

たゞ本號の説くところの、前號と異なる點は、中盤において上手方が八七銀と上つて、防戦につとめるところであつて、前號のは上手方七七銀と自分の玉頭に上つて、戦つたものであつた。以下不肖の説述するところによつて、その利害得喪のよつて較べられる點を、充分御研究下さらんことを、ひたすら希ふ次第である。

例により基本圖面までの解説は省く――

- 図二六歩 三四歩 四八銀 三二銀
- 図五六歩 五四歩 四六歩 四四歩
- 図三八金 五二金 五七銀 四三金
- 図四七金 六二銀 六八玉 八四歩
- 図七八玉 八五歩 三六歩 三一角

掌中には、金銀三枚をおさめたことになるから、以下上手方が如何に努力しても、矢張見込かない。

(面局の迄成桂七七は圖六十五第)



第五十六圖面の場合、上手七七同桂ならば、下手方に六六歩と突かれるし、同銀と應じて、直ちに六六銀と打ち込まれて、是亦上手方の敗局である。故に上手方七七同玉と取るのが一番よいのであるが、その時下手方は六六歩と穩かに突き出して置くか、又は七五歩と打つて次に角の活用をはかるか、その孰れを觀んでも必ず必勝の棋勢である。

- 図六八金 八六歩 同歩 同角
- 図八七歩 四二角 三三飛 三三銀
- 図三五歩 同歩 同飛 二四歩
- 図三八飛 三二金 六一六歩 四一玉

(面局の迄玉一四は圖七十五第)



第五十七圖面以下の指手。

- 図二五歩 三一玉 二八飛 二二玉
- 図六六歩 六四歩 七六歩 七四歩

【講義】 上手二五歩と突き出すのは、後にその筋から攻撃の準備である。

下手方三一玉と寄るのは、早く槽圍ひに組み上げる仕度。上手方二八飛と戻るのは、敵の模様を見つゝ、徐ろに對戦の意向である。

下手方二二玉と上つて安全なる槽圍ひを完成する。

上手方六六歩と突くのは既に諸君御承知の通り、金將の活用を兼ね、玉の懐ろを廣くする手段であるが、此の歩を突かずに六六銀と上つて、所謂奇謀を企てる人もある。然しその手段は何分にも歩越しの銀であるから、充分の活動が出来ないのは當然であつて、その時は下手方直ちに六四歩と突き、漸次上手方のその銀を壓迫する方針を立てれば自然指し易い局面となる。

此の上手方の奇謀に對する、下手方の攻防法も折を見て説きたいとは思つてゐるが、上手方としてはどうしても、うまく此の銀を利用する方法がないので、定跡の研究が行き渡つてゐる今日、滅多には應用しない手段である。

【講義】 上手六七金と上るのは、六七兩筋の備へ。下手方六三銀もそれと同じ意味である。

上手九六歩と突くのは、玉の懐ろを廣くする大切な手段であつて、下手方の九四歩はそれに對する、當然の位取り次に上方手八八銀と上つたのは、極力玉頭を手堅く守らんとするのであつて、模様によつては、前説述のごとく七七銀と上る手段もあるし、尙又以下本譜のごとく、八六歩と突いて、漸次八七へ上る手段もある。

要するに上手方としては、非常に大切な銀であつて、此の銀の運用如何が、忽ち自玉の安危を左右するのである。下手方に二飛と廻るのは、既に前説及び前々號に於て、諸君にお話してある通り、安全第一なる攻撃法である。

上手方八六歩と突く處は、前號にては七七銀と上つたのであるが、その手段は玉の懐ろが狭くて、敵に將來攻められた時、受けにくかつたので、本譜は斯く指して、飽くまで積極的方針に出たのである。

此の上手方の策戦は、かなり多く應用せられるところで

下手方六四歩はその筋の位の維持。上手七六歩と突き、下手七四歩と受けるのも、六筋の歩と殆ど同じ意味である。

(面局の迄歩四七は圖八十五第)

下玉持備 番

九	皇	將				將	將	皇
八		進			王			
七				王	將		將	
六	將			將	將	將		將
五		將						
四			歩	歩	歩	歩		歩
三	歩		銀	金			飛	
二		玉	金	角		銀	桂	香
一	香	桂						

歩 駒持手下

第五十八圖面以下の指手。

- 六七金 ○六三銀 ○九六歩 ○九四歩
- 八八銀 ○七二飛 ○八六歩 ○七五歩
- 同歩 ○同飛

あつて、下手方の攻防法が、正しいものでないと、却つて上手方に強く位を張られる順序となり、大いに不利な状態を醸す。即ち上手方の方針は下手方の仕掛けを待ちつゝ、模様に応じて逆襲せんとするのであつて、下手方としては反對に七八方面の位を敵に占めさせては、敵玉は入玉の姿勢となり、勢ひ急激な決戦策を採らなければならぬやうな結果となる。

此の點に充分の注意を拂つて置かないと、忽ちその上手方の策戦に乗せられて了ふ。

下手方の七五歩と突くのは、その筋の歩の交換を了し、徐ろに六三の銀を戦線へ繰り出さん準備である。

上手方七五歩と應じるのは至當であるが、此のやうなところでも、若し上手方が同歩と取らず、八七銀と上つて來たら、下手方は透かさず七六歩と取り込み、ト手が同銀の時、直ちに七五歩と打つて、その筋の勢力を確實に握る工夫に出でなくてはならない

是れ上手方が七五同歩と、穩かに應じたる理由——

下手七五同飛と進出して次の局面となる。

(局面の迄飛同五七は圖九十五第)

八	香	桂							王	飛					香	八
七																七
六																六
五																五
四																四
三																三
二																二
一	香	桂														一

第五十九局面以下の指手。

- 七六歩 ○七二飛 ○八七銀 ○七四銀
- 三七桂 ○八二飛 ○七七桂 ○六五歩
- 同歩 ○八五歩

【講義】 上手方七六歩と打つのは穩かな防手であつて、此のところ七七銀と上れば、下手方は先に七二飛と戻つて

のであつて當然の防手である。

その時下手方六五歩と突くのは、角の利用策であつて、此の將棋における大切な手筋である。

上手六五同桂と跳ねれば、下手方に六四歩と打たれるから、六五同歩と應じたのであつて、當然である。

下手方さうしてから八五歩と打つのは、是非とも覚えて置かれたい攻め手筋である。

第六十局面以下の指手。

- 八五歩 ○八六歩 ○九八銀 ○九五歩
- 同歩 ○九二桂

【講義】 上手方八五同歩と取るのは已むを得ない。若し同桂と跳ねれば、下手方に八四歩と打たれて胸損である。その時下手方八六歩と打つて、一先づ敵銀の姿を悪くして置くのがよい。

此の手順を作るべく、前に六五歩と突いて、角の道を開けて置いたのである。

上手方九八銀と引く一手である。

上手方に七六歩と受けさせ(上手方が七六歩と打たなければ、下手方から七五歩と位を張る) 餘りに銀を戦線へ運べば指し易い。故に上手方七七銀と上らず、七六歩と堅く仰へるのは一番おとなしい指し方である。

下手方七二飛ともへ引き戻す。

上手方八七銀と上つたのは、極力七八兩筋を凌がんとする策に外ならない。

此のところ前にも言ふ如く、上手七七銀と上れば、前説述のものと同じ結果となり、尙それでは上手方の八九の桂を捌く手がないから、八六歩と突いた意味が消滅する。

下手方七四銀と進出するのは豫定の攻撃準備。

上手方三七桂と跳ねるのは、自分も亦四筋から、敵陣を破壊せんとする心算である。

其の時下手八二飛と戻るのは、此の上手方の八七銀に對する唯一の戦法であつて、次に八五歩と攻める準備であることは勿論である。

上手方七七桂と跳ねるのは、下手方その攻撃に備へた

その時下手方九五歩と端に着手するのは、局面上唯一の攻撃場所であつて、又是ほど利き目のある早い手段は、他には見當らないわけ。

(局面の迄歩五八は圖十六第)

八	香	桂							王	飛					香	八
七																七
六																六
五																五
四																四
三																三
二																二
一	香	桂														一

上手方次に下手に九六歩と取り込まれては、忽ち全滅の状態であるから、兎も角一旦、九五同歩と應じたのであつて、局面上已むを得ない指し手である。

そこで下手方九三桂と跳ねるのは穩健第一の指し手であ

るが、此のところ直らに九五同香と走つては危険である、後に變化として、此の下手方九五同香と走るものに就いて述べるから、それによつて御對照せられたい。

(面局の迄桂三九は圖一十六第)



第六十一圖面以下の指手。

- ⑥六六銀 ⑥八五桂 ⑥同桂 ⑥同銀
- ⑥八八歩 ⑥九七歩 ⑥同銀 ⑥七四桂
- ⑥七五銀 ⑥九五香

そこで下手方歩切れであるから、兎も角九五香と先手に走つて、一步掌中に収める。

(面局の迄香五九は圖二十六第)



第六十二圖面以下の指手。

- ⑥九六歩 ⑥六六歩 ⑥七七金 ⑥九六香
 - ⑥同銀 ⑥七五角 ⑥同歩 ⑥七六歩
 - ⑥八五銀 ⑥七七歩 ⑥同玉 ⑥八五飛
- 【講義】 上手方九六歩と打つて守るのは當然。

【講義】 上手方六六銀と上るのは、事態容易ならずと見て、七五にて敵角道を沮止せんがためである。

下手方八五桂と跳ねるのは、手順に銀の活動を企てるのであつて、當然の攻め手である。

上手八五同桂と應じるのは已むを得ない。捨て、置けば下手方に九五香と走られるから――

下手八五同銀と進出するのは豫定の行動。

上手方八八歩と打つのは、至當の防衛策である。その時下手方一旦九七歩と打つて、敵の銀を釣り上げて置くのは好手筋であつて、直ちに九五香と走つて、上手方に九七歩と打たせては面白くない。

上手方九七同銀の一手である。八九銀と引いたのでは、全く下手方のため壓迫された局面となり、その不利や一目瞭然たるもの。

下手七四桂と打つのは、敵陣をより以上嵐さんとするのである。上手方としては、六六桂と取られてはたまらないから、七五銀と上つて敵角路を止めつゝその難を避ける。

下手方六六歩と打つのは、敵陣をいよ／＼亂脈に陥らしめる手段である。

上手七七金と寄るのは已むを得ない。

下手九六香と走り、更に一步収めて、上手方が同銀の時七五角と切るのは好手筋である。

すべて大駒落の場合には、敵玉に迫り得る順序が来たら、大駒を見極つて、どし／＼肉薄する方法をとるべきである。然し下手方の銀が八五にゐる間に、此の角を切らないと、以下譜のごとく七六歩と打つ手段が消滅するから、上手の九六同銀に對して、下手方同銀と取らずに、角の方を切るのであつて、此の邊の手順は充分玩味して、誤らざる様々に御注意あらん事を希望する。

上手方敵の七五角と切るを、同歩と取つてゐるのは、如何にも漫然たる着手のやうであるが、此のところ八五銀と指せば、下手方に六七歩ナルと指され、上手同玉にても、又は同金にても、そこで下手方に三九角ナルと先手に没入される順序となるので、譜のごとく七五同歩と應じたので

あつて、已むを得ない手段なのである。そこで下手方七六歩と打つたのは豫定の攻め、上手方八五銀と取るのは是亦餘儀ない手段であつて、他に應ずべき手段は絶対にないのである。

下手方七七歩ナルと先つ金を仕留めて、上手方同玉の時一旦八五飛と進出して駒徳をする。是にて下手歩切れではあるが、結局角一枚と金銀二枚と換えた事になる。

第六十三圖面以下の指手。

- 七六銀 ●六七金 ●同 銀 ●八七歩
- 同 歩 ●六七歩

【講義】 上手七六銀と打つたのは、先手に自陣の亂れを繕ふ手段であつて、他に適當な防手はない。

そこで下手方驚いて飛車を逃げ出したりなどしては、以下上手方に防戦策を施こされる懸念があるので、譜の如く即座に六七金と打ち込むのは、強くして好い手段である。上手六七同銀と引く外はない。

そこで下手方直ちに同歩ナルと指さず、一旦八七歩ナル

(面局の迄ルナ歩七六は圖四十六第)

王手群 駒持手

九	香							王	飛	王
八	桂							王	飛	王
七	玉							王	飛	王
六	銀							王	飛	王
五	金							王	飛	王
四	金							王	飛	王
三	玉							王	飛	王
二	桂							王	飛	王
一	香							王	飛	王

銀銀銀 駒持手下

右の局面となつては、上手方どうにも方法がないのであつて、即ち六七同玉と取れば、下手方八八飛ナルにて、以下持駒豊富であるから必勝である。たゞ一寸間違ひ易いのは、上手方が七六玉と上つて来た場合である。その時は下手方穩かに八一飛と引いて居つてもよく、又八四銀と打つて居ても矢張り必勝である。

此の將棋は上手方八七銀と上つて、極力七八兩筋の守

と指すのは、所謂手順の妙といふべきものであつて、此の將棋に限らず、斯うした手順はよく出来るものであるから實戦に際してなるべく間違はぬやう應用せられたい。

上手方八七同歩の外はない。

(面局の迄飛五八は圖三十六第)

王手群 駒持手

九	香							王	飛	王
八	桂							王	飛	王
七	玉							王	飛	王
六	銀							王	飛	王
五	金							王	飛	王
四	金							王	飛	王
三	玉							王	飛	王
二	桂							王	飛	王
一	香							王	飛	王

銀銀金 駒持手下

下手方さうして置いてから、六七歩ナルと指した次の第六十四圖面迄となつては、以下如何に奮戦しても、上手方見込みのない將棋であり、下手方必勝である。

備をはかつた時、下手方が直ちにその缺陷を咎めたのであつて、その攻撃手順は角落に限らず、平手戦にでも、又二枚にでも、應用なし得るところであらう。

たゞ下手方として注意を要するのは、上手方が七七桂と跳ねた時、自分も七三桂と跳ねなくては攻撃出来ないものと思つて、その手段をとつてはいけない事である。

下手方の桂が跳ねてない爲に、六五歩と仕掛けられた時も、八五歩と突かれた時も、上手方は同桂と應じる手がなかつたのである(下手方に歩を打たれて、桂馬を一枚只捕獲されるから)。

此のやうに敵の指し手の可否について、直ちにその缺陷を衝く事に一層力を入れて、棋道の御研究をなされたならば、諸君は驚くべき進境を示すこと、信じる。即ち中盤から寄せ手順にかけての、鋭い味合を會得せよと翼ふ意味であつて、駒組も勿論大切ではあるが、それは覺え易いものであつて、中盤以後に及んでは、餘りにその變化が複雑である爲、折角いゝ處まで漕ぎ付けて置きなから、可憐敗

けて了ふといふ様な例も少くない。

それは要するに實力の不完全といふ事に歸着する問題であつて、準備のつき次第、鋭どく激しく、而も指し切らぬやう、敵を寄せる事について特別の御研究を希望する。

變化第六十一圖面における、下手方の九三桂跳ねの所、九五香と走れば――

- 九六歩 同 香 九七歩 八七歩
- 同 玉 八五銀 同 桂 同 飛
- 八六歩 同 角 八七玉 五九角
- 八六歩 同 馬 八七歩

【變化講義】 下手方本文のごとく九三桂と跳ねず、直ちに九五香と走れば、上手方は右の譜の如く、直接九六歩と叩き、下手更に同香と進む時、上手方九七歩と打つ、下手方見す／＼香車を一枚只渡しては、大いに不利であるから八七歩ナルと指し、上手同銀と上れば、下手九七香ナルと指す心算、故に上手八七同玉と上る。

下手八五銀と進み、飽くまで上手の玉に迫つて行く。

上手三九飛 下手七二飛

前號まで説いたものは、上手方が一旦三八飛と廻つても次に又二八飛と振り戻すものであつたが、本號には上手方三九飛と引いて、後に八九へ廻り、極力その方面の防戦につとめるものに就いて説述しやう。

此の上手方の策戦は、所謂高等戦術であつて、新聞將棋などには屢々見受けるが、普通の方の對局には餘り見受けられないものである。

それだけに、下手方の研究も亦充分でないといふ事に歸着するのであつて、若し上手方がその高等戦術に出た時は手を空しうしてなすを知らざるやうな按配では困る。

之れ即ち本號に、私が是れを撰んだ次第であつて、讀者諸君もそのおつもりで御愛讀御研究のほどを願ふ。

例により基本圖面迄、手順のみを示す。

- 二六歩 三四歩 四八銀 三二銀
- 五六歩 五四歩 四六歩 四四歩

上手八五同桂と應じ、下手方同飛の時、一旦八六歩と打つて、下手方に同角と取らせて置いてから、七八玉と引くのは輕妙であつて、いきなり七八玉と落ちては、下手方に八六桂打ちの手段があつて上手敗けとなる。

(面局の迄歩七八は圖化變)

皇								皇
八								八
七								七
六								六
五								五
四								四
三								三
二								二
一								一

歩歩歩歩桂 駒持手下

そこで下手兎も角五九角ナルと侵入をしても、上手方に軽く八六歩と先手に打たれ、同馬の時更に八七歩と打たれ次に九六歩と香車を取られる順となつて、下手方指しにく

面局の迄金二三は圖四十六第)

皇								皇
八								八
七								七
六								六
五								五
四								四
三								三
二								二
一								一

歩 駒持手下

- 三九飛 三二金
- 三八金 五二金
- 四七金 六二銀
- 七八玉 八五歩
- 三六歩 八六歩
- 八七歩 四二角
- 三五歩 同 歩
- 二九飛 三二金
- 五七銀
- 六八玉
- 六八金
- 同 歩
- 三二八飛
- 同 飛
- 三二銀
- 三四歩
- 四二金
- 八四歩
- 二一角
- 同 角
- 三三銀
- 三四歩

右の第六十五圖面までの手順については、諸君が既に充分御承知のところであるから、その解説を省く。

たゞ今迄は上手方三九飛と引かず、三八飛と引いてわたのである。その處だけが従来と異なる點であつて、それは本號のはじめに述べた如く、次に八九の方面へその飛車を廻して、極力防衛につとめんとする上手方の深算である。

第六十五圖面以下の指手。

- 一六歩 ○四一玉 ○一五歩 ○二一玉
- 三七桂 ○二二玉 ○六六歩 ○六四歩
- 七六歩 ○七四歩

【講義】上手方一六歩と突くのは、角落における手筋であること、既に屢々説き來つた通りである。次に下手方四一玉と寄るのは圍ひである。

そこで上手一五歩と突き越したのは、今までの定跡ではかう指してゐなかつた點である。

此の手は模様によつては、桂を利用して所謂樽端崩しの戦法に出でん策戦であつて、下手方としては、餘り油断を

- 九六歩 ○七二飛 ○八六歩 ○七五歩
- 同歩 ○同飛 ○七六歩 ○七二飛
- 八七銀 ○七四銀

(面局の迄銀四七は圖六十六第)

丁玉銀 香

九	香	桂						王		香
八										
七										
六										
五										
四										
三										
二										
一	香	桂								香

歩歩 駒持手下

【講義】上手方六七金と上るのは駒組を整へるのである。下手六 銀と上るのは、それと殆んど同意味であつて、漸次飛車先に繰り出して活躍せんとする準備。

(面局の迄歩四七は圖五十六第)

丁玉銀 香

九	香	桂						王		香
八										
七										
六										
五										
四										
三										
二										
一	香	桂								香

歩歩 駒持手下

ゆるさないところ。

次に下手三一玉と寄り、上手方が三七桂と跳ねる時、更に二二玉と上つて、堅實な構組みとなる。

その時上手六六歩と突き、下手六四歩と受け、上手七六歩と突き、下手方又七四歩と受けるところは御承知の通り

第六十六圖面以下の指手。

- 六六金 ○六二銀 ○八八銀 ○九四歩

したのでは、大駒落の事ゆゑ、絶対に見込がないから、餘りに下手方の仕掛けを待ち、機を見て逆襲に出づべき深算の下に、着々と自營の堅實をはかつたのである。

下手方九四歩と突くのは、將來その筋から敵の左翼を打ち破る手段に出づる時の他足にせんがため。

上手方九六歩と受けるは當然であつて、此の筋の位を損じては敵角の筋であるから、以下大いに指しにくい。

そこで下手方七二飛と廻るのは、前々號にも前號にも述べたごとく安全なる攻撃法である。

上手方八六歩と突くのは、次に八七銀、構へになさん含みであつて、玉の懷ろを一層ひろくする手段。

下手方七五歩と交換をはかるのは、後に銀の進出をするための手段である。

上手方同歩と應じるのは、飽くまでその筋の位を損じないためである。

下手方七五同飛と進出するのは當然。その時上手方七六歩と打つのは、是亦至當の防手である

が、此の所七七銀と上つて、位を張る策戦に出て、下手方に逸早く七二飛と早逃げされれば、結局上手方七六歩と打たなければならなくなるから、つまらないのである。是れは前號にも述べてある。

そこで下手方七二飛と引きさがる。

上手八七銀と上るのは、手堅く七、八兩筋を守つたのであつて、七七銀と上つたのでは、以下桂の活用法がなく、従つて飛車を呼び寄せて極力防戦の策も取れない結果となる。次に下手方七四銀と進出したのは、豫ねての豫定手段であるが、漸次六七八の方面から、敵を攻撃の用意。

第六十七圖面以下の指手。

- 七七桂 ○八二飛 ○八九飛 ○六五歩
- 同歩 ○九五歩 ○同歩 ○八五歩

【講義】上手方七七桂と跳ねるのは前號にては、此の型のまゝにして置いて下手方のため、忽ち破壊されて了つたから、今回は八九飛と廻つてそれに備へる可く、譜の如く早く桂を跳ね上つたのである。

と廻つて来た。

之は前にも述べた如く、極力その方面の防衛に備へたのであつて、上手が八七銀と上る策戦の時は、下手方としては、次に斯くの如く飛を廻つて来る事も、豫め計算して置かなくてはならない。

そこで下手方六五歩と突くのは、前號にも説いた通り、角の道を開けたのであつて、上手方としては、此のところに疵がついては面白くないので、六五同歩と應じる。

その時、下手方九五歩と突くのは一寸不可解のやうな手であるが、戦争が激甚になつては、此の歩を突いても、上手方が一々挨拶をして呉れないから、目下の局面として斯く着手して置くのが、最も時機を得てゐるわけである。

それならば、何故何の用があつて突くのかといふ事になるが、敵飛が八筋にゐる關係上、將來九筋から戦争が初まれば、必ず下方手の優利な局面となることは請け合ひとして見ると、端の戦争は歩が切れてゐなくてはだめだといふ事になるのである。

下手それには構はず、八二飛と廻る。つまり上手方が八九飛と廻るか廻らぬかは、實戦中では絶対に判定し得ないところであつて、敵は多分廻るのだらうと豫想する外はないのであるから、若し敵が廻らなければ、前號の如く直ち

(面局の迄歩五八は圖七十六第)

九	皇						皇
八						王	
七			王	王	王	王	
六			飛	飛	飛	飛	
五			歩	歩	歩	歩	
四			銀	銀	銀	銀	
三			金	金	金	金	
二			角	角	角	角	
一	香	桂	玉	玉	玉	玉	香
	一	二	三	四	五	六	七

歩 駒持手下

に撃破する事が出来るのであるし、若し又敵がこちらの豫想どほり、飛車を八九へ廻つて来れば、その時はその時の對策を講じやうといふわけである。

下手方の八二飛に對し、上手方はこちらの想像通り八九飛

それから尙今一つの條件は、接戦中一步欲しい事がある。その時に九五歩と走つていつでも一步掌中に握れるわけ。即ち一步の質胸をこゝに、こしらへて置く手段なのである。かうして調べあげて見ると、一步犠牲に供するのは惜しい様な氣もするが、決して無駄な犠牲ではなく、立派な役に立つてゐるわけ。

言ふまでもなく、局面が急忙を告げて来てからでは、もう間に合はない手段であつて、さうかと言つて早過ぎれば、その筋から攻められる順序となり、丁度いゝ時機を狙はなくては、折角の好手も役に立たなかつたり、却つて仇となるわけ。

そこで上手方九五歩と取つた時、下手方八五歩と打つて漸く總攻撃の機運熟し来る。

第六十八圖面以下の指手。

- 八五歩 ○七三桂 ○六六銀 ○九八歩
- 同歩 ○八五桂 ○同桂 ○同銀
- 八六歩 ○九七歩 ○同歩 ○同香 ○八六銀

面局の迄銀六八は圖八十六第

九	皇							銀		
八					王			銀	皇	
七			香	香	香	香	香	銀	皇	
六			香	香	香	香	香	銀	皇	
五	香								香	
四			歩	歩	歩					
三	歩	歩	銀	金	角				飛	
二			歩	玉	金	角			飛	
一	香		桂						香	
		一	二	三	四	五	六	七	八	九

下打駒 駒打下

【講義】上方手八五同歩と應じるのは當然であつて、同桂と跳ねれば、下方手に八四歩と打たれる。次に下方手七三桂と跳ねるのは、譜のごとく以下八五桂と活躍せんがためである。上方手六六銀と上るのは、極力戦線に近づいて、防衛是れに努めん心算である。然し此のところ、上方手六六銀と上らず、早く下方手

上方手八五同桂の處で、若し八六歩と打つて凌げば、下方手九七歩と打つのである(註)——さきに九八歩と打つて敵香を釣り上げて置いた意味は、此のやうな場合になつてハツキリとして来るであらう。

そして上方手八五桂の時、下方手九八歩ナル、上方手同銀、下方手八五銀、上方手同歩、下方手八六桂打つて大いに指し易い尙右の手順中、上方手八五桂と跳ねず、八五歩と取れば、下方手矢張り九八歩ナル、上方手同銀、下方手九五香にて、是又上方手大いに不利の局面である。

故に上方手本譜の如く八五桂と應じたのであつて、下方手の銀を手順に進ませないといふ考へから、八六歩と打つて凌ぐはよろしくないわけ。

そこで下方手八五同銀と取つたのは當然、上方次に下方手八六歩と打たれたのは、たまらぬところであるから、我から八六歩と打つたのである。

その時、下方手又九七歩と敵香の頭へ打つのは、實によい手筋であつて、上方手八五歩と敵銀を取れば、下方手九八歩

の角を止めるため、上方手七五歩と突いて變化を求めると、段もあるから、それは本文の説き終りに、變化として記すことにした。

今此のところ、その解説に取りかゝると、一朝一夕でないと却つて複雑し煩しいことと思ふから——讀者は何卒後に記す「上方手七五歩突に對する下手應酬法」を御熟讀あつて、本文と對照せられんことをお願いする。

上方手六六銀の時、下方手九八歩と打つたのは、好手筋であつて、諸君は此の端のやりくりに就いてよく味つて戴きたい。

さきに下方手が九五歩と突き置いたのも、茲に及んでいろ／＼の手段を求めんがためであつて、その下方手九八歩に對し、上方手は同香と應ずる外はない。

さうして置いてから、下方手八五桂と交換を挑む。

此の邊の一手一手の緩急は大切であつて、どれでも一手誤れば、忽ち策戰の齟齬を來し、實力の相違があるだけに、上方手に反對に乗ぜられるであらう。

ナル、上方手同銀の時、矢張り下方手に八六桂と打たれて、上方手大いに不利の局面である。

故に下方手の九七歩と打つを、上方手同香と應じるのは至當の手段であるといふわけ。

下方次に八六銀と交換を挑む。

かうしておけば、何時何時でも、下方手の角は九七へ侵入することを得るのであつて、如何に端の着手が至當であつたかは、ハツキリと御諒解出來たことと思ふ。

初め下方手九五歩と突つかけてからは、水の流れる如くすらくと攻め立てるのであつて、此の中特に九八歩打ち及び九七歩打ち等の手段は、充分味つて會得せらんことを願ひするのであつて、一手の順逆も忽ち一局の向背に關すること、屢々述べる通りである。

第六十九圖面以下の指手。

- 八六銀 ○同 ○飛 ○八七銀 ○八一飛
- 八六歩 ○八五歩 ○七五歩 ○八六歩

【講義】上方手八六同銀と取るのは至當である。その時下

手同飛と進むのは強い手であつて、大駒落の場合としては當然の強行策である。

(面局の迄歩六八は圖十七第)



然し此のところ、下手方八六同角と出たらばどうであるか——上手方に捨て、おかれても、下手方九七角と成る手はないし、又八八銀と受けられるやうな手段もあるし、或は強く七五銀と打たれるやうな手段もある。故に下手方の手段としては、それは變化が廣過ぎて面白

第七十圖而以下の指手

- 八六銀 七四桂 八五歩 九八銀
- 五九飛 八六桂 七七玉 八五飛

(面局の迄飛五八は圖一十七第)



【講義】上手方銀を逃げてゐては、下手方に八七銀と打ち込まれて全滅であるから、同銀と出る。そこで下手方七四桂と歩越しに打つたのは、敵若し同歩なら、八六飛又は八六角と進出して駒徳である。

くないのであつて、八六同飛と進むのは一番紛れが少なくてよるしいわけ。

上手方飛車の交換を嫌つて、八七銀と受けたのは、大駒落の將棋としては當然の防手である。

八六同飛と交換に應ずれば、下手同角となり、次に上手方としては、敵の九七角ナルの手段を凌がねばならない順となるから、大いに指し悪いのである。

又同じ持駒の飛車にしても、自分よりは敵に有効に使用される局面であるから、かくそれを避けたのは已むを得ない。下手方八一飛と一旦避ける。

上手方八六歩と打つて、そこへ敵から打たれるのを凌ぐ。そのとき下手方直ちに八五歩と打つたのは、上手方若し同歩なら、九七角ナルと侵入する手があるから、好い攻撃の手段である。故に上手方八五同歩の手はないから、譜の如く七五歩と突いて、角の見通しを避ける。

次に下手方は兎も角八六歩と取り込んで行く。

故に上手方八五歩と手堅く守る。

その時下手方單に、八六桂或ひは六六桂と跳ねたのは、一切の味を消して了ふので、九八銀と攻めたのは好い手筋である。その時上手方若し八八飛と上れば、下手方八六桂と跳ね、上手同飛の時下手八七銀と打ち、上手が玉をいづれへ逃げて、そこで下手方九六歩と打つて、大いに優勢である。之れ即ち上手方がその手段を避けて、銀を軽く見切つて、遠く五九飛と避けたわけ。

下手その儀ならば「敵くものは夏も小袖」と八六桂と跳ねて、先づ銀徳をする。

上手方は兎も角、合ひ利かすの玉手であるから、七七玉と一間伸び上げる。

その時下手方八五飛と進出した次の局面迄となつては、大いに優勢であり、必勝の局面である。

右の第七十一圖面の次ぎ、上手方捨て、おけば、下手方に七八桂ナルと指されて、幸便に飛車を侵入されるから、七六玉と上つてそれに備へれば、下手方一旦八一飛と砲か

に引きおけば、次に七八桂ナル及び、八七銀打ち等の手段があるから、必勝である。尙圖の場合上手極力防衛の手段として、六八金と引いても、下手方に八七銀と打ちおかれれば、矢張り上手方の敗局である。

一變 化解説

—上手六六銀と上らず—

「七五歩突に對する下手應酬法」

(圖本基化變)



所以

そこで下手方六六角と切るのは當然の順序であり、言ふまでもなく、此の所でも下手角を退却すれば、上手方に七五歩と打たれて、絶對に指しにくい。

上手六六同金の時、下手方八七銀と打ち込む。上手八七同銀と應じる所で、六八玉と寄る手段もあるから、それは次に示すことにする。

千手録備 每圖手手手手手



角落の研究 (飯塚勲一郎)

- 七五角 鹿六六銀 鹿八六歩 鹿七六銀
- 鹿六六角 鹿同金 鹿八七銀 鹿同銀
- 鹿同歩 鹿同玉 鹿七五銀打

【講義】下手七五同角と取るのは強い手である。然し同銀と上る手もあるやうだが、上手方に七四歩と打たれて粉れが多い。

そこで上手方六銀と出るのは、即ち手順といふものであつて、本文では單に上手六六銀と出たため、手遅れとなつたのであるから、斯くの如く先手を取りつゝ上つたのである。

そこで下手方驚いて角を退却すれば、上手方言ふ所の「思ふ壺」であるから、強く下手方八六歩と打つたのである。

次に上手方七六銀と避ける所、八六同銀と應じれば下手方直ちに同角と切り、上手同飛の時、下手七五銀打ちと合はせ、敵飛の退却した時、下手方七六歩と攻めて大いに優勢なのである。是、即ち上手方が七六銀と上り來つた

下手八七同歩ナルの次に、上手方同玉のところ、同飛と應じて、矢張り下手方に七五銀と打たれば、指しにくいのである。

故に強く八七同玉と上つたのであるが、下手方が七五銀と合せた上の圖面までとなり、下手方必勝である。

次に下手方は八五桂と跳ね出す手段及び、七六歩等の手があるから、優勢なのであつて、もし以下を指し繼ぐものとすれば、上手六七銀打ちか、乃至は六七金と引く位のものであるから、その時下手方は八五桂と跳ねて、以下大いに強く闘へば、如何せん大駒落の響きが甚大であるから、上手方到底凌ぎ切れないのである。尙又右の中上手方が六七金引ならば、下手方は一旦六六歩と打つておくことを忘れてはならない。

それから又上の圖面の場合、上手方七五同金なら、下手方同銀と進み、今度は持ち駒に金があるから、より以上上手方苦戦は免れない。

すべて大駒落の場合、毎々言ふとほり、下手方が寄せ

にかゝつたなら、出来るだけ激しく、鋭どく、肉薄する事を忘れてはならない。
向次に下方の八七銀打ちに對し、上手六八玉と寄るものに就いて一寸述べておかう。
上の圖面は上手方が、八七同銀と取らず、六八玉と寄つたところである。

下方七六銀ナルと指す。上手同金の一手である。



櫓組 上手方二六金上り

上方三八飛廻りに對し下方七二廻りの研究は、前號まで略終結したと思ふ。

故に本號には今まで一度も説き及ばなかつた、上方二六金上りの手段に對する、下方攻防法を述べて行かう。

此の上方二六金上りは、三筋の歩を換へてから、四筋の歩を交換し、手順に四六の好位置へ、金を据える策戦であつて、三六金と早く出る手段に比すれば、上方方としては、其間一手の利益のあるものである。

尙一層細かく言へば、上方方初めに四筋の歩を交換して、後か三筋の歩の交換をすれば、丁度三六金の姿勢となるのであるから、四六金の形とするには、更にもう一手餘分に費さなければならぬ——けれども此の二六金と出て、初めに三筋を交換、後から四筋の交換をすれば、手順に四六金の姿勢となるのであつて、一手の利益と言ふよりは、一手の損失もたかと言ふべきなのである。

そこで下方矢張り七五銀と打ち込むのが、よい手順であつて、上手は同金と應じては、幸便に下方の七四銀を捌かせる順序となるから、六七銀と打つて凌ぐのが至當。そこで下方七六銀と取り、上手が同銀の時、一旦七五歩と抑へ上手が已むなく六七銀と引いた時に、下方八五桂と活躍して充分な棋勢である。

即ち上方八五桂と取つた時、下方同飛と進出する。次に上方は八七歩ナルと指されてはたまらぬから、八歩と打つてそれに備へる。

そこで下方は矢張り八七歩ナルと指し、上方同歩の時八八歩と打てば、上方應手に困むのである。

その時飛車を他へ逃げれば、下方には七六桂打ちの手段があるし、同飛と取れば、下方には七六桂打ちの手段がある。故に上方七五歩と突いて、早く敵角の壓迫を企て、も、下方の應酬が斯くの如くであれば、結局効を奏しないといふわけであつて、本文の如く穩かに六六銀と上つておく方が、上方方としては優つてゐるのである。

第七十二圖面に至る迄の指手。

- 二六歩 三四歩 二五歩 二三三角
四八銀 三二銀 五五歩 五四歩
四六歩 四四歩 三八金 五二金
五七銀 四三金 六八玉 八四歩
七八玉 八五歩 六八金 六二銀
二七金 四二角 二六金 三三銀

(面局の迄銀三三は圖二十七第)



右の第七十二圖面に至るまでの指手順解説は、省略しても既にお判りの筈と思ふ。

たゞ上手方が是までの定跡は、三八金の次ぎに四七金と上つて、以下三六へ出たものである。

それを本號のものは、上手方三八金を四七へ上らず、二七から二六へ上つて来たのであつて、圖までの指手順のうち、從來のものとは異なる點はたゞそれだけである。

第七十二圖面以下の指手。

- ☉三六歩 ☉三二金 ☉三五歩 ☉同歩
- ☉同金 ☉三四歩 ☉三六金 ☉四一玉
- ☉一六歩 ☉三一玉 ☉六六歩 ☉六四歩
- ☉七六歩 ☉七四歩 ☉六七金 ☉八六歩
- ☉同歩 ☉同飛 ☉八七歩 ☉八二飛

【講義】 上手方三六歩と突くのは、以下その筋の歩の交換をはかるため、及び桂の活用に関する手段である。

下手三二金と上るのは堅實なる構圍ひの策也。

上手三五歩と突き、下手同歩、上手同金、下手三四歩、

上手八六同歩、下手同飛の時、上手八七歩と打てば、下手方は八二飛ともとの位置へ引き据える。

(面局の迄飛二八は圖三十七第)

九	香	桂	飛	銀	角	金	玉	桂	香
八	香	桂	飛	銀	角	金	玉	桂	香
七	香	桂	飛	銀	角	金	玉	桂	香
六	香	桂	飛	銀	角	金	玉	桂	香
五	香	桂	飛	銀	角	金	玉	桂	香
四	香	桂	飛	銀	角	金	玉	桂	香
三	香	桂	飛	銀	角	金	玉	桂	香
二	香	桂	飛	銀	角	金	玉	桂	香
一	香	桂	飛	銀	角	金	玉	桂	香

第七十三圖面以下の指手。

- ☉四五歩 ☉同歩 ☉同金 ☉四四歩
- ☉四六金 ☉六三銀 ☉八八銀 ☉二二玉
- ☉三七桂 ☉七三桂 ☉七七桂 ☉七五歩
- ☉同歩 ☉六五歩

角落の研究 (飯塚勘一郎)

上手三六金までは双方當然の應酬である。

そこで下手方四一玉と寄るのは、安全なる場所への移動。上手一六歩と突くのは、角落戦における定法とも言ふべき手筋であつて、敵角の進出を未然に防ぎつゝ、その筋から將來攻撃の準備。

下手三一玉は豫定の運び。此のところ一四歩と受けるべきでないことは、構圍ひにおける秘訣の一つ。

上手六六歩と突いて金の働きを廣くすれば、下手方六四歩と突いてその筋の位を保つ。

上手七六歩も六六歩と稍同じ意味であり、下手方此の筋も位負けせぬやう七四歩と受ける。

大體此の兩筋は、角落の場合、一番重要な必要の場所であつて、いづれが先に突き出しても、必ず一方は受けるべきところである。

次に上手方六七金と上つて、自陣の整備をはかる。

下手方八六歩と突くのは、一先づ飛車先の歩を切つて置

【講義】 上手四五歩と突くのは、その筋の歩兵交換策である。下手四五同歩、上手同金、下手四四歩、上手四六金までは双方至當の應接である。

そこで下手方六三銀と上るのは重要な手段であつて、此のところ二二玉と急げば、上手方に五五歩と交換を挑まれ、上手方の金が、五六に据はる順序となるから、後の攻撃上非常に指しにくいことになる。

これ下手方が六三銀の出を先にした理由であつて、それにも拘はらず、上手方五五歩と突けば、下手同歩と應じ、上手同金の時、下手五二飛と廻つて大いに優勢である。

即ちその時上手五四歩と打つても、下手方に同銀と取られて悪いので、五六金と引く一手である。その時下手方五五歩と打つてその筋の勢力を占め置けば、大いに指し易い局面となるのである。

次に上手八八銀と出たのは、玉側の守りである。下手方漸く二二玉と上つて完全な駒組を成す。

そこで上手方三七桂と跳ねたのは、漸次それを利用して、

下手方の堅陣を打ち破らんとする計畫である。ここで下手方も七三桂と跳ねる。是れも矢張り敵陣の攻撃準備であつて、上手方が捨て、置けば、直ちに下手六五歩と仕掛けて差支へはない。

故、上手方も七七桂と應じて防衛につとめる。そこで下手方七五歩と突くのは、以下角を運用の策戦であつて、所謂角落槽組の場合の攻撃手筋である。

前號まで二三回は他のものを説いて来たから、或ひは一才失念してゐるお方があるかも知れないが、初號以來此の下手方七五歩突きの手段に對する講義は、屢々してある筈であります故、それと對照して諸君は充分御研究下さい。そして上手方七五同歩の時、下手方六五歩と突くのは、次に角を七五へ進出して、攻撃する心算である。

此の些細なところ(即ち六五と七五)でも手順前後すると、いろ／＼の紛れを生ずるものである。

つまり先に下手方が六五を突けば、上手同歩、それから下手が七五を突けば、上手方同歩と應ぜず、六六銀と出て

の所若し手を抜けば、四五歩と打つ位のものであらう。されば下手方は六六歩と取り込み、上手同銀の時、下手六五歩と打ち、上手同桂(註)若し上手六五同桂と應ぜず五七銀と退却すれば、下手七五角の進出にて大いに指し易い。下手同桂、上手同銀の時、下手六四銀と強く交換を挑んで、必ず指し易く、大いに優勢の局面である。

これ上手方が六五同歩と穩かに應じた所以。そこで下手方七五角と進出したのは、豫定の行動であつて、角落戦における、下手攻撃の手筋であることは、前にも述べた通りである。

その時上手七六歩と打つたのは當然の手段であつて、捨て、置けば反對に下手からそこへ打たれる。下手方もこの方面へ引かず八四角と右へ一間引き戻して、飽くまで敵陣を睥睨する。

尙此の下手方八四角のところ、若し九筋の歩を突いてある場合であつたなら、九七角と引くべきであること勿論。その時上手方二九飛と引いたのは、兎角敵の角の筋に飛車

来るかも知れないのである。然しさうなつて見て、飛車ト手不利と斷定するわけではなく、紛れが多くなるといふ意味である。

(面局の迄歩五六は圖四十七第)

星								星
	飛				王	飛		
		桂		飛	飛			
			歩	歩	歩			
			歩	歩	銀	桂		歩
			歩	銀	金			飛
			歩	玉	金			
			歩	桂				香
			香					

第七十四圖面以下の指手。

- ▲六五歩 ▲七五角 ▲七六歩 ▲八四角
 - ▲二九飛 ▲七四銀 ▲四五歩 ▲六二飛
- 【講義】上手方六五同歩と應じるのは至當であるが、此

を置いたのでは、攻防上不便であるから、一旦自重したのであつて、是亦手筋といふべきである。

尙此の上手二九飛と引くところで、直ちに四五歩と攻める手段もあるから、それは本文の終りに變化として述べることにする。どうぞ此の本文と御對照して御熟讀あんことを切に希望する。

つまり上手二九飛と引かないで、四五歩と打つ手段に對する、下手方の應酬法である。然しそれは後の變化としてのお約束——どれ／＼本文を取り急ぐことにしやう——下手方七四銀と上るのは、漸次角桂に協力して敵陣撃破の準備である。

その時上手方四五歩と打つたのは、自分も亦攻撃の精についたのであつて、下手方それには構はず六二飛と廻る。けれども上手方が二九飛と引かないで、四五歩と攻めて来たのなら、下手方は此の六二飛の手段を指してゐてはいけないのであつて、それは敵が一手早く攻めて来た關係上、自分の六三の銀がまだ七四に上つてはゐない計算であるか

ら。是れ即ち後に變化の解説を要する所以。

(面局の迄飛二六は圖五十七第)



第七十五圖面以下の指手。

○四四歩 ○同 金 ○四四五桂 ○同 金
○五三桂 ○五五銀 ○六五桂

【講解】 上手方四四歩と取り込むのは、兎も角敵の愚手をうかつたのである。

その時下手方同金と取るべきであることも、既にしば

ば私が力説し来たところであつて、四四同銀と上つては上手方に二四歩と突かれて、事面倒である。そこで上手方四五桂、跳ねるのは、下手方の櫓の堅陣を此の桂によつて、かき亂さうとする手段。

下手方それに対して、四五同金とアツサリ切るのも亦、此の際に於ける手筋であつて、金桂の交換は、駒の釣合ひから見ては損失であるが、その桂を利用して先手を取りつゝ攻めるといふ條件が相當大きいから、面倒な思ひをして自陣の破綻を招くのに比較すれば寧ろ徳なのである。上手方四五同金と取るのは當然。

そこで下手方五三桂と打つのは、次に六五へ活躍する含みであつて、なか／＼きびしい手段である。

然し此の場合、單に下手方六五桂と跳ねて行く手段もある。即ち下手方(五三桂と打たずに)六五桂なら、上手同桂、下手六六歩上手同金にても同銀にても、下手六五銀にて大いに指し易いのである——が右の手順中、上手六五同桂のところ、六六歩と受ける手があるから、それは相當下手方

第七十六圖面以下の指手。

○六六歩 ○五七桂 ○同 金 ○六五銀

【講解】 上手方六五同桂と取つては、下手方に更に同桂と跳ね出されて大いに不利 棋勢となる。故に譜の如く六六歩と打つて、此の局面に備へたのは、適當な應手である。

そこで下手方五七桂ナルと先づ敵の銀を奪ふ。上歩方同金と取るのは至當の手段。

次に下手方六六歩又は六六飛と切つても、上手方に金桂などの持駒があるから、指し切りに陥る。といつて六五歩と打つて、徐ろに攻勢を取るのには、此の場合緩いのである。尚又下手六五桂と攻ね出しても、上手方に軽く六七金と寄られ、次に七七桂ナルと指し、も、上手方に同銀と懸じられて、是又下手方指しにくくなる。

そして又下手方の陣營も、四三の金があなくなつてゐるので、可なり薄觀を呈して居り、敵に五四金を利用して攻められる順序となつては、相當苦戦の局面を招くのである。

(面局の迄左桂五六は圖六十七第)



としては紛れがあらうと思ふ。故にそれよりは、本譜の下手五三桂と打つ方が指し易いと信じて、それを撰んだ次第である。

上手方敵に五三桂と打たれては、五四金と避ける外はない。四六金と引いては、次第に壓迫されて、悉く萎縮せざるを得ない局面となる。

下手方そこで六五桂と跳ね、決戦に出かける——

であるから本譜の如く六五銀と上るのが一番よい手といふわけであつて、實に強い味ひを含んだ手段である。

(面局の迄銀五六は圖七十七第)



第七十七圖面以下の指手。

- 六五桂 同 桂 〇六七金 〇七七步
- 〇六八玉 〇七八銀 〇五八金 〇六七銀
- 〇同 金 〇五七金

【講義】 上方六五同桂と取る外はない。假りに五三金

下方六七銀ナルと指して、上方が同金と上る時、五七金と強く打ち込む。

(面局の迄金七五は圖八十七第)



第七十八圖面以下の指手。

- 〇同 金 〇七八步 〇五八玉 〇五七桂
- 〇同 玉 〇六六角 〇四六玉 〇八八角

【講義】 上方五七同金と取る外はない。その時下手一旦七八歩ナルと指すのは、所謂手筋であつ

角落の研究 (飯塚勲一郎)

と打つても、又は突つ込んで、下手方に強く六六銀と出られて、必ず手負けである事は論を俟たない。上手の同桂に對し、下手同桂に跳ねるのは豫定の手段その時上手六七金一寄るのも當然の防手である。下手七七歩と打つて攻める。そこで上方六八玉と避けたのは當然ではあるが、此のところ七七同銀と取れば如何なる局面となるであらう。以下それに就いて一寸探討のペンを走らせるのも強ち無益の業でもあるまいと思ふ。

〇七七銀 同 桂 〇同 金 〇八五桂

即ち上方が下手の七七歩に對し、六八玉と寄らず、七七同銀と拂へば、右のやうな結果となつて、次に上方は金を逃けても、又は六七金と打つて凌いでも、勢ひ駒損となるので、到底勝算は覺束ないわけ。

故に本文上方六八玉と寄つたのである。

次に下方七八銀と打つて激しく迫る。

上方捨て、置けば、六七銀と取られて詰まされて了ふから、五八金と打つて凌ぐ外はない。

(面局の迄ルナ角八八は圖九十七第)



て、上方が同玉と取れば、次に五七桂成にて必勝である。として見ると矢張り上手は踏の如く五八玉と避ける一手であるから、結局下手方は歩を化つただけ徳といふわけ。下手方五七桂ナル、上手同玉の應接を経て、下手方六六角と飛び出す。

上方四六玉と避けた時、下手方八八角ナルと一旦指して置いた、左の第七十九圖迄となつては、上方凌ぐ手段

なく絶對の敗局である。

右の圖面までとなつては、上手方全く收拾すべからざる局面であつて、相當持駒はあつても、下手方の掌中にも、矢張り適當な武器か揃つてゐるから、如何とも防戦の術はない。之を要するに、下手方五三桂打ち以下の強襲手段が效を奏したのであつて、第七十七圖面の下手方六五銀と進むに及んでは、上手方全く絶望に陥つたのである。

毎號私が述べる如く、諸君は何卒此の寄せる手順のところを、一段と力を入れて御研究下さい。

寄せに際して、緩い手段を指してゐると、忽ち敵の乗ずるところとなり、反對に自分の方を受けるやうな結果となり、俗に言ふ主客轉倒して、折角の好局をむざ／＼敗局に終らしむる例も亦少くない。

假令へば、一手透きをかけた心算でゐたら、さうでなかつたとか、取る一手だと思つて指したら、敵が取らなかつたとか、いふやうな事のないやうに、重ねて言ふが、鋭く寄せて行くことに、充分の研究と工夫とを要するわけであ

同角 六六銀 同角 同金

【講義】 下手方四五同歩と取るのは強くてよい。單に七四銀と上るよりも、此の場合は後の自陣の形が宜しいので譜の如く指す方がよい。

上手四五同桂と跳ねるのは豫定の行動であり、當然の攻撃である。そこで下手方七四銀と上つたのは、銀桂の交換を甘受して、我又敵陣撃破の端緒に就いたのである。

上手方三三桂ナルと指すのは豫定の手段。

その時下手方同金ヨルと指すのは、心得て置くべき取り方であつて、同桂と取れば二四歩と玉頭を攻められるし、尙又同金上ると指したのでは、將來飛車でも切つて肉薄する時直ちに先手を以て打ち込まれるのである。

次に上手方七五銀と打つたのは、極力防戦につとめる手段であつて、目下の棋勢としては、下手方に迫る適當な攻撃策はないのである。

但し此の上手方七五銀打のところ、敵の仕掛けを持つ意味に、二九飛と引いて置く穩かな手段もあるが、その時

る。次に前にお約束の變化に就いて、二三説述の筆を運ばせて置くことにする。

(圖 第化變) 下五同歩 同角

星								星
	銀				王	銀		
		銀		銀	銀			
				銀				
				歩	歩		角	
				歩	銀		桂	歩
				歩	金			飛
				歩	玉			香
				香	桂			

歩歩 駒持手下

右の變化第一圖は、本文に於いて、上手二九飛と引くところを、四五歩と打つた局面である。

以下下手方の攻防法を述べる。

四五歩 同角 同桂 七四銀 同三三桂 同金 同七五銀 同銀 同同歩

直ちに下手方に六六歩と打たれ、同銀なら、同角と切られて、次に五七銀と打たれる手段があるから、上手六六同金と上れば、矢張り下手方に六五桂と跳躍されて是亦指しにくい。故に下手方の六六歩に對し、上手六八金と引くものとすれば、下手方に強く六五銀と突つ張られて、その時上手同桂と跳ねても、矢張り下手方に同桂と應じられてゐて、大いに指しにくくなるのである。

是れ上手方二九飛の總策策によらず、譜の如く七五銀の手段を撰んだ所以。

下手方七五同銀と取るのは當然。

上手同歩の時、下手同角と出る。次に上手方飽くまで先手を取る意味で、六六銀と打つたのであるが、下手方はここで此の角を退却してゐては、大いに後の攻撃に支障を及ぼすので強く同角と切る。

即ち下手此の英斷に出でず、八四角にても、或ひは五三、四二等へ引いても、その時上手方に七四歩と攻められるのであつて、さうなつては再び攻勢に轉する機會を、一寸空

むわけにはいかない局面となる。

故に下手方の六六角切りは當然であつて、上手方は同金と應ずる(註)——此の處上手同銀と取つては、下手方に三七銀と打たれて大いに悪い)

(面局の迄金同六六は圖二第化變)

下手銀 上手金

星							星
	銀				王	銀	
				銀	王	銀	
			銀	銀	銀		
			銀		銀		
			歩	歩		桂	歩
			歩	金			飛
			歩	玉	金		
			歩	桂			香
			香	桂			

歩歩歩歩桂銀銀 駒持手下

變化第二圖面以下の指手。

- 二七銀 ●二九飛 ●四六銀 ●同銀
- 七四桂 ●七五金 ●六六歩 ●同銀

さて以上で、第七十四圖面の場合従かに六五同歩と應ずる手段を説き盡したので、次に六五同桂と来た場合の攻撃法を述べて見ようと思ふ。

既に諸君も今まで私の秀筆を飽かすに御愛顧下されたので、角落の構圖ひは充分御卒業なされたことと思ふ。

序における駒組の順序の如きは、比較的平易なものなのであるが、それでも軽卒に判断し、順逆の途を誤れば、忽ち上手方の術中に陥り、將來の攻撃に支障を及ぼすものであるから、餘程注意をしなければならぬのである。

けれどもそれより尙一層の研究の必要あるは、中盤即ち駒の岐れより、寄せ手順に及ぶ味ひであつて、是はたとへ一手でも誤れば、忽ち勝敗に影響するものであつて、毎々言ふやうに、大駒を切つて敵玉に肉薄するあたりは、特に慎重に慎重を重ねて、鋭くゆるめず一氣に敵を押し切つて了ふ工夫が肝要である。

此の點はくどく私が御注意申し上げるのであつて、それは大胸落の場合、私などの實驗の上から見て、下手方に激

【講義】 下手方三七銀と打つのは、手順に金銀の交換を求めのみでなく、敵陣を擾乱さんとする手段である。上手方二九飛と避けたのは當然の應手である。

下手四六銀ナルと指し、上手同銀と取つて出るも是亦双方至當の應接に外ならない。

その時下手七四桂と打つのは、非常によい攻撃の手筋であつて、斯かる局面の場合、桂の力が攻撃の足場として感大であることは、既に諸君も御承知のところであらう。

上手方此の金を取られては、以下の防衛上非常に困難を來すので、兎も角七五金と避けたのは至當の對策である。そこで下手方は六六歩と打つて、攻撃の手掛りを作つて置き、次に六七へ金又は銀を打ち込む工夫に出れば指 易いのである。

即ち下手方の六六歩に對して、上手方捨て、置くはたまらぬところと、五八銀と打つて凌いでも、下手方に直ちに六七銀と打ち込まれ、同銀、同歩ナル、同玉の攻めに、下手方六六銀と打ち込んで、七五の敵金を捕獲してしまへば、必勝の棋形である。

しく迫られると、多少の胸徳とはなつてゐても、上手結局凌ぎ切れない順序となるからである。

諸君は此の私の言を諒とせられ、その上手方の氣分をよく忖度して對局にあたられんことをくれぐれもお願ひする次第である。

よく世間で「あの人は實力がある」とか又は「實力が足りない」とか言ふのは、實に其の點の讀みの深い淺いを指して言ふのであつて、最初の駒組のところは、大抵どんな方が指しても同じことなのである。

中盤以後の調べが届いてゐるといふことは、とりもなほさず、實力が充實してゐるといふ事なのであつて、さうなればらうためしもの——假令角落でなくとも、平手にでも香落にでも、その努力は忽ち酬いられて、絶大な効果を現はすものなのである。

第八十四圖面に至る迄の指手を載せるのは重複して如何にもくどい様であるが、念には念を入れ、再び掲げて置く。

- ☉二六歩 ☉三四歩 ☉二五歩 ☉三三三角
- ☉四八銀 ☉三二銀 ☉五六歩 ☉五四歩
- ☉四六歩 ☉四四歩 ☉三八金 ☉五二金
- ☉五七銀 ☉四三金 ☉六八玉 ☉六二銀
- ☉七八玉 ☉八四歩 ☉三六歩 ☉八五歩
- ☉三七金 ☉四二角 ☉二六金 ☉三三銀
- ☉三五歩 ☉同歩 ☉同金 ☉三二金
- ☉三六金 ☉三四歩

右の手順の解説は省略しても、諸君が既に御承知の筈であるから、一向差支へはないことと思ふ。

たゞ下手方角落構圍ひに組み上げる場合は、左翼の金銀三枚を早く繰り上げれば大體間違ひはないのであつて、それを後にして、他の方面に着手すると、上手方に早く二筋から攻撃されて、不利な局面となる場合がある。

又上手方の金が早く、三八、四七、三六といふ順に上つて来た時は、下手方六二銀以下六四歩と突いて、早く六三銀の姿勢にしなければ、上手方に五五歩と交換される順を

ある。

下手方六四歩と受けるのは、當然の應手であつて、此のところを上手方に六五歩と突き越させては、必ず指しにくくなる。上手方五八金と上るのは、一寸變つたやうな手であるが、六八金と上ると何ら相違はないのである。

たゞ下手方がそれに對して、敵は何事が計畫あるものゝ如く思つて、自分も變つた應手に出れば、上手方或ひは四七金と更の上つて来るかも知れないのであつて、下手方が驚かないで普通に指して居れば、上手方は矢張り、六七金と上る外に手段はないことになる。

下手方四一玉と寄つて漸次玉を安全に圍ふ仕度。

そこで上手方七六歩と突いたのは、敵の模様を見つゝ、勢力を張つたのである。

下手八六歩と突いたのは、その筋の歩兵交換であつて、必ず一度は突き換えなければならぬところ（飛車の活用上）上手八六同歩は當然。

下手方八六同飛の進出も豫定の行動。

生ずるので末に至り指し悪くなる。

(面局の進歩四三は圖十八第)

	香	桂		玉	角	金	銀	歩	歩	飛	桂	香
八	香			銀	金							
七				歩	歩							
六				歩	歩							
五												
四												
三												
二												
一	香	桂		玉	角	金	銀	歩	歩	飛	桂	香

第八十圖面以下の指手。

- ☉六六歩 ☉六四歩 ☉五八金 ☉四一玉
 - ☉七六歩 ☉八六歩 ☉同歩 ☉同飛
 - ☉六七金 ☉八二飛 ☉八七歩 ☉七四歩
- 【講義】 上手方六六歩と突くは、玉及び金銀の勢力を擴張する手段であつて、その筋の位を張らんとするので

上手六七金と上るところで、速早く七筋の歩を突き出して位を張る手は危険である。却つて下手方からそれを利用して逆襲せられる順序となる。

そこで下手方一旦八二飛と引いたのは、體健第一の手段。上手八七歩と受けるのは當然であつて、下手方に八六歩と打たれては、大勢を忽ち制せられる。

下手方七四歩は位の維持であつて、今度は上手方に七五歩と突き越す手段もあるから――

第八十一圖面以下の指手。

- ☉一六歩 ☉六三銀 ☉八八銀 ☉三一玉
- ☉三七桂 ☉二二玉 ☉四五歩 ☉同歩
- ☉同金 ☉四四歩

【講義】 上手方一六歩と突くのは手筋である。

下手方六三銀と上るのは、五六七三つの筋の備へであつて、緊要な手段である。

次に上手八八銀と上るのは、玉邊の堅めであつて、模様によつては、七七銀と上る含みである。

下手三玉と寄せて益々安全な場所へ移す。
上手方三七桂と跳ねるのは、攻撃の準備であつて、下手方の櫓の堅陣を破壊するには、唯一の武器である。
下手二玉と上つていよいよ安全な處へ圍ふ。

(面局の迄歩四七は圖一十八第)



その時上手方四五歩と突いたのは、その筋の歩の交換を了し、着々と攻撃の機を窺ふのである。
下手方敵に四四歩と取り込ませては、忽ち疵を生じるか

櫓 金銀を更に盛り上げる工夫を取ることであつて、つまり判り易く言へば、入玉模様の勢力を作ることである。上手方としては敵にそんな手段を取られては、自分の方から

(面局の迄歩四四は圖二十八第)



指す手は格別なし、實に困却の局面となるのであつて、是れ上手方四五桂跳ね、時機尚早の所以である。

尚又下手の四四銀に對し、上手三三歩打ちなら、下手同桂と應じて歩徳であるから後に上手方矢張り指しにくいの

ら、四五同歩と取つたのであつて、至當の應手である。
その時上手方同金と上つたのを或ひは「上手として餘りに離健過ぎるではないか」と審かる方があるかも知れないから、此のところ上手四五同桂と跳ねる手段に對する、彼の利害關係をいさゝか研究して見るのも、決して無益な穿鑿のみ批難も受けまい。

即ち上手方四五同桂と跳ねれば、下手方は四四銀と上つて避ける。そこで次に上手方としの脅威は下手方に幸便に三五歩と突つ張られる手段である。故に下手が四四銀と出た時、上手方は一旦四六金と體をかはず外はない。その時下手方一四歩とでも突いて置けば、以下上手方としては格別指す手がないので、非常に困つてしまふ決果となる故に上手方四六金と寄らずに、四六銀と應援に出て来れば下手方直ちに四五銀と切り、上手方が同金にても又は同銀にても、下手四四歩打ちにて胸徳であるから優勢である。それから右のやうな局面の場合、下手方の心得て置くべきことは、敵を急に攻めないことである。そして漸次下から

である。

故に上手四五同金は至當であつて、下手四四歩と仰へる第八十二圖面以下の一手。

- 圖四六金 圖七三桂 圖七七桂 圖七五歩
- 圖同歩 圖六五歩 圖同桂 圖六四角

【講義】 上手四六金と引くのは當然である。

そこで下手七三桂と跳ねるのは、攻撃の準備である。

上手方七七桂と上るのは、それに對する當然の應手であつて、斯く指さずに置いては、次に下手方から、七五歩と突かれ、續いて六五歩と突かれ、角を進出された時、上手方到底凌ぎ切れないのである。

次に下手方七五歩と突き捨てたのは、以下譜の如く六五歩と突いて、角の活用をはかる手段である。上手方七五同歩と應かに取るのは當然。

そこで下手方六五歩と開けるのは豫定の手順である。

上手今までは六五同歩と取つたもののみ説述したのであるが、今度はこゝで同桂と應じる手段に就いて述べて行き

たいと思ふ。尤も上手方此の六五同桂のところ、穩かに六五同歩なら、下手方は七五角と進出するのである事は勿論上手方の六五同桂に對し、下手方六四角と上るのが、一番紛れ少くて下手指し易いとおもふ。

然し此のところ、下手方六五同桂、上手同歩、下手七五角と進出しても指せないことはないのである。たゞそれは下手方としては、危険に陥るから、それを避けて本譜の六四角の方をおすゝめする次第である。

次に下手六五同桂と應じる場合についての結果を二三述べて置くことにする。

——下手六四角のところ六五同桂なら——

- ▲六五歩 ▲七五角 ▲四四五歩 ▲五三桂
- ▲二四歩 ▲同歩 ▲四四四歩 ▲同金
- ▲三六桂 ▲四四五歩 ▲四四四桂 ▲同銀

【講義】 下手七五角と進出した時、今まで多くは上手方が、七六歩と打つものに就いて研究されてゐたのであるが、上手方その方面を手抜きして、右の手順のごとく、四

五歩と合せてくる場合、下手方としては、五三桂と打つて備へるのが一番よいのである。そして上手方が二四歩と突くのを一旦穩かに同歩と取り置き次に上手方四四歩と取り込んだ時同金と取つて上るのがよいのである。

そして上手三六桂の時、必ずすぐ四五歩と打つて、先手を取ることを忘れてゐてはいけないのであつて、局面は正に混戦状態であるから、一手の緩急が忽ち勝敗なのであつて、先手を取る取られるのが一局の向背を左右する。

そして上手四四桂と金を取る時、下手穩かに同銀と取つて上つて置けば、依然として、四五歩打ちの先手が残り、次に上手方金を四七へ逃げなくてはならない順序となるから、下手方は七七歩と打つて攻めて行けばよい事になる。

けれども上手方の掌中には金の持駒があるから、七三金と打つ手段が残つてゐて、下手方なかく指し易いといふ局面ではないのである。

又右の手順中上手方二四歩の時、下手同歩と取らず、直ちに四五歩と取る手もある。さう指せば、上手二三歩ナル

下手同金、上手一五桂、下手二四歩、上手二三桂ナル、下手同玉の順序となり、矢張り前に四五歩と突いた先手が残つてゐるから、指せない事はない。

けれども下手方の技術としては、自己の陣營が大いに亂れることになるから、なかく困難な局面である。

又右の手順中下手方が二四同歩の時、上手四四歩と取り込まず、二五歩と繼歩の手段に來れば、下手方は矢張り四五歩と突つ込んで、その方面の解決を早く迫るがよい。

それから又下手方五三桂と打つて備へた時、上手方單に三六桂と打つてゐたら、矢張り下手方は四五歩と強く突つ張つて、その處の解決をつけなければならぬ。

であるから上手方の手中に桂馬を渡せば、いろ／＼と策戦を施こされるのではあるが、何しろ大駒落の事であるから、斯様に研究をすれば、下手方としては絶對的に不利であるといふわけはないのである。たゞ力量の相違の上から見て、かくの如き混戦状態を演出すれば、下手は必ずどこかで一手ぐらゐは間違ひ易いものであるから、危険である

と斷定する次第であつて、況してや金を敵に渡せば、七三金と打たれる筋が残つてゐて、一手も落着いてはゐられない將棋である。

たゞ下手方の七五角と進出した時、上手一旦七六歩と打つたら、下手方は八四角と引いてゐる順であるから、その時上手方が四五歩と攻めて來ても、今度はそんなに大混戦に陥るわけではないのである。それは下手方に六六歩と打つ手段があるから、上手の陣も相當攻められ易いからである。

是即ち本譜において下手六四角と上つた理由——
第八十三圖面以下の指手。

- ▲二九飛 ▲六五桂 ▲同歩 ▲七三角
- ▲四五歩 ▲五三桂 ▲四四四歩 ▲同金
- ▲二四歩 ▲同歩

【講義】 上手二九飛と引くのは、四筋から桂を利用して敵陣を攻撃の場合、自分の飛車が敵の角の筋にゐては、危険であつて、充分 戦争が出来ないのでそれを避けたので

ある。下手六五桂と自分から交換をしたのは、後手を引いて損のやうだが、格別の手段も(目下の局面としては)ないから敵の指手を待つ意味である。又一つには将来攻撃の場合敵の六六を開けて置く方が、都合がよいからでもある。

(面局の迄角四六は圖三十八第)

手主将領 将軍将軍

星							王	將	星
八	飛						将	将	八
七		将	將	將	將	將			七
六	将						将		六
五		步	步	角	銀	桂			五
四	步	銀	金					飛	四
三	步	玉	金						三
二	香	桂							二
一									一

歩 駒持手下

然し此のところ、下手方一四歩と突いて自玉の懐を広くして置く手もある。
上手六五同歩は至當の應手。

つて、以下下手方が一歩踏み誤れば、忽ち上手方の衝中に陥り、千俵の谷へ落ち込まなければならぬところ。

そこで下手方一旦穩かに二四同歩と取りのぞく(此のところ同銀と上つては、上手方に三六桂と打たれ、下手大いに苦戦の局面となる)然しこゝで下手方手を抜いて、強く四五歩と打つ手段もあるが、何分にも上手方二三歩ナルと指させては、自玉の身邊が亂れるので指しにくくなると思ふ。

第八十四圖面以下の指手。

- 三六桂 ○四五歩 ○四四桂 ○同銀
- 四七金 ○七七歩 ○六八玉 ○三五銀

【講義】上手方三六桂と打つのは當然の攻め手である。

此のところ二五歩と繼歩の手段に出たいのであるが、それは下手方に四五歩と打たれて面白くないのである。

それでは上手方先に四五歩と打つて、下手方が四三金と引いた時、二五歩と繼歩をしてはどうか——と思ふ方があつても知れないが、成程さうなれば上手方の注文通りで

下手七三角と引くのは、飽くまで敵の陣を戦んでゐるためであつて、攻撃と言ふ意味の外に、強い防ぎの味を含んでゐるのである。

そこで上手方四五歩と打つのは、飛車を一旦を避けてある關係上、當然の攻め手である。

下手方五三桂と打つのは局面上唯一の防衛策であつて、此のところ捨て、置いては、忽ち上手方の乗るところであつて、危険千萬といふべきもの。

讀者は以下の攻防法についてよく、玩味せられんことを切にお願ひいたす次第である。

上手方四四歩と取り込むのは、兎も角下手方の應手を問ふたのであつて、捨て、置いて下手方に四五歩と取り込ませては、折角上手四五歩と打つた意味を失ふ。

下手方、前に變化の説明にも述べた如く、此のところ同銀と上つては、一筋から攻められる順序となるので面白くない。故に四四同金と應ずるのが最乗の策である。

その時上手二四歩と突き出すのは、當然の攻撃手段であ

真に申分はないのだが下手方その敵の注文に盲く應じるものとは限らず、上手が四五歩と打てば、響くがごとく三五金と交換を挑むのは、火を見る如く明かなこと。

(面局の迄歩同四二は圖四十八第)

手主将領 将軍将軍

星							王	將	星
八							将	将	八
七		将	將	將	將	將			七
六	将						将		六
五		步	步	金	步	桂	銀	角	步
四	步	銀	金						飛
三	步	玉	金						
二	香	桂							香
一									

歩歩歩 駒持手下

是れ上手方がその策を採らず、殊更三六桂打ちの手段に就いた理由である。——

そこへ下手方四三金と引いても、或ひは三五金と出ても次に上手方には二四桂と跳ねる手段があつて、面白くない

から、強く先手を取るために、譜のごとく四五歩と仰へた
は蓋し賢明の策とも言ふべきもの。

上手四四桂と兎も角金を取る一手である。下手同銀と冷
静に應じて置いて、依然四五歩と打つた先手は残つてゐる
その時上手方四七金と引くのは、今更實に忍び難いところ
ではあるが、向ふは三枚、こちらは二枚の利き胸である
から、衆寡敵せず、遂に四筋の戦闘は敵に一步を譲つたわ
け、それに此の際三六金と寄る手はないのであるから、(註
下手方に直ぐ三五歩と突き出される手がある)已むを得な
い退却である。

そこで下手方一旦七七歩と打つたのは、上手方が同玉に
ても同銀にても、六五桂と跳ねだす意圖であることは、何
人の目にもすぐとまるところであらう。
故に上手方、敵の五三の桂を飽くまで有効に用ひさせざ
るため六八玉と寄つたのは、局面上至當の應手である。
此の下手方の七七歩打ちのときは、中盤戦以後の手筋
としては、大いに味ふべきものであつて、此の一手によつ

●六六金 ●四六歩 ●七七玉 ●四七歩
●八六歩 ●四八玉

【講義】 上手方五五歩と突いたのは、軽い手であつて、
下手方の角道を阻止する策としては上乘の手段。

そこで下手方同角と進出しては、次に四六歩と突き出し
た時、先手に上手五五金右と上られる。又下手五五同歩と
應じて置くのは、穩かな手ではあるが、緩いといふそしり
は免れないのである。

故に譜のごとく、四三桂と打つのが實にきびしい手筋で
あつて、私が此の巻頭にも言ふ如く、中盤以後の寄せ手順
は鋭く指せと言つたのは、此の手のやうなのを指して言つ
たのであつて、諸君は熟視すれば、それが如何に鋭い攻め
手筋であるかお判りになるであらう。

そこで上手方、今度下手に五五桂と跳ね出されてはたま
らないので、四八金と先逃げてそれに備へる。
下手方四六歩と突き出して置くのは、是亦好手筋であつ
て、緩い手のやうに見えて實は大層きびしいのである。

て、上手方の玉は非常に窮屈な姿勢となつたわけである。
それにつけても歩を巧みに使ふことは、將棋對局の上に實
際必要な條件であらう。
次に下手三三銀と進出するのは、角の威力を充分に發揮
せんがための手段たることは亦明白のところ。



●五五歩 ●四三桂 ●四八金 ●五五桂

かうした手筋は次に一手でと金になり得るのであるから
少しは緩いやうに見えても、實際は右にも言つたごとく、
かなり早い手なのであつて、と金が敵陣を歩の速力の大な
ることは、諸君が實戦に際して御経験済みの處であらう。

次に上手方七七玉と上つたのは、下手方、四筋攻撃が、
相當きびしい味をもつてゐるので、譜の如く斯く指して、
下手方に六五桂と跳ねさせ、次に下手方が五七桂ナルの時
幸便に同金上ルと片付けやうといふ深算である。故に下手
方も上手のその意のあるところを觀破して輕卒に六五桂跳
ね出しを決行したのであつて、兎も角四七歩ナルと、此
の方面の豫定の行動を遂行する。そこで上手方一旦、四七
同金と取りたいところであるが、下手方に五五桂と跳ね出
されては、却つて滅亡の期を早める順序となるので、捨て
置いて八六歩と、先づ由玉、安全に備へたのである。

下手方少しも騒がず、何しろ駒徳のことならばと、四八
とと、敵の金を取りのぞく。以下上手方としては金一枚の
持駒では、下手方を攻撃するに難く、自陣は漸次衰へる一

方なので、到底指し續いても見込みなく、下手方、絶対に優勢である。

これは上手方が四五歩と攻める時、下手方五三桂と應じたのが當を得ていたのであつて、次の三五銀及び四三桂打ちの兩手段によつて、全く上手方窮状に陥つたものである

(面局の迄と八四は圖六十八第)



右の第八十六圖面までとなつては上手方絶對に見込まないのであつて、下手方は自玉が安全であるから、餘ろにと金

を活動して駒徳をはかれば、自然勝ちに向ふのである。此の將棋は右の最終圖によつて見る通り、下手方の構圍ひのうち、金銀二枚まで自玉のそばに居ず、僅かに金將一枚だけわろのみであるから、大いに下手方打ち破られたやうに思はれるかも知れないが、決してさういふわけではなく、上手方が攻めて来れば、その結果はどうしても、下手方の金銀も相當戦線に立たなければならぬのであつて、それを構圍ひの場合には、假令一枚でもなるべく形を崩さないやうにとめて、對局してゐるのは餘計に危いのであつて、上手方の指し手によつては、どしどし戦線に繰り出して、大いに活躍しなくてはいけない。

下手方の駒が一枚活躍すれば、必然の結果として、上手方にもそれだけのいたみが出来て来るのであり、下手方の駒が二枚戦線に立てば、それだけのいたみが矢張り敵に生じて来るものである。

であるから上手方としては、迂濶に下手方の構圍の堅陣へ手をつける事は出来まいわけである。

角落本組定跡

(上手三六金留)

講師 六段 石井秀吉

本講義に先立ちまして、角落の性質及び要領を、一應明かにしまして後、本題に入らうと思ひます。先づ上手としては、角の無い將棋を、どうしたら互格の陣形を維持することが出来るかを考慮しなければなりません。下手が角を

圖 A



角落本組定跡 (石井秀吉)

圖 B



利用して、充分な位を張らうとしますから、先づそれを防がねばならぬのです。其處で先づ上手は角を威壓して、防禦の陣形を採らしめ、其際に乗じて位を張るやうに努めなければなりません。然しそれには何と云つても攻撃の最大

武器たる角が落ちてゐるので、それを補ふには、どうしても金銀の力を借りねばならない。その金銀の力を借りて、位を張ると云ふ事が角落の一貫した上手の方針なのです。故に下手としては、終り迄位負けをしない様にしてをれば自然と角の有る無いの差が表れて来るのです。つまり位取り如何が大局を支配すると云つても、間違ひではありませぬ。此處でちよつと、位取りと云ふ言葉が御判りにならないといけませんから説明しますが、位取りと云ふのは、攻撃地點を占める意味に外ならないのです。さうしてこの位取りが如何に大事であるかを判り易く云へば、試みに双方が全部の歩を一筋づゝ進めたとしたと假定して御覽なさい。双方とも直ぐ手詰りになつて了ふ筈です。それが一個所何處でも、例へば中央に歩が進んだとしたならば其歩の後は必ず金銀が續き、すぐ驥の歩を交換して、其處に金銀の突出場所が開かれる譯になるのです。(A)圖は歩が進んである時の局面、(B)圖は歩を交換して、金銀が突出した形、以上で位取りの意味が御判りと思ふので、本

位を保つたのである。上手三八金は角落に限つて用ひる手で、位を取る必要上金銀を戦線に進めなければならぬ。駒落の場合の必然的指法である。下手四三銀と角頭から分懸

(面局の迄歩四一は圖一第)

Table showing a Go board position with pieces like King, Knight, Horse, Silver, Gold, Pawn, and Cannon. Includes labels like '駒持手下' and 'シナ'.

したのは三、四、及び五筋の位を主とした意味で、角頭は三角と軽く防ぎ、飛を三二、又は二二へ廻して、玉を右に移し、美濃圍ひの堅壘の内に收めんとする策戦である。上手一六歩は端の位取りであるが、本局の上手早仕掛けの場合

角落本組定跡 (石井秀吉)

題に入ります。

第一圖面に至る迄 指手

- 先二六歩 三三四歩 先四八銀 三二二銀
先五六歩 五五四歩 先四六歩 四四四歩
先二八金 四三三銀 先一六歩 一四四歩

【講義】上手二六歩は角頭を攻める姿勢を採つて、角の働きを制する策戦である。下手三四歩は角の活用を圖つた定法の手で、上手二五歩の時三角と歩の交換を防ぐ意味もある。上手四八銀と上つたのは、下手の如何なる策戦にも應じられる手廣い指法である。下手三二銀は角頭を守つた意味もあるが、本指法の本組としては、上手の四八銀の對抗を主とした意味である。上手五六歩は金銀の働きをつけたもの。下手五四歩は中央の位取り。上手四六歩も矢張り位取り。下手四四歩は角道を止めるが、上手から機を見て四五歩と突かれると、四六へ金銀を進められ、三、四及び五筋を攻撃される順が生じて来るので、穩かに

は、一五角と玉に當てられるのを、未然に防いだ意味も含んでゐる。下手一四歩は其位取りである。第一圖となる。

(面局の迄金五四は圖二第)

Table showing a Go board position with pieces like King, Knight, Horse, Silver, Gold, Pawn, and Cannon. Includes labels like '駒持手下' and 'シナ'.

- 先五八金 三二二飛 先四七金 五二一金
先二五歩 三三二角 先五七銀 六二玉
先二六金 四二一角 先四五歩 同歩
先同金

【講義】 上手五八金と上るのは、色々の變化を喜んで敵の模様を見る手である。下手三二飛と振るのは策戦を明かにすると同時に、豫定の手段である。上手四七金左と上るのは、普通に三六歩と突いてゐては紛れが少ないから、混戦に誘導して、下手の應酬に誤りのあるや否やを狙ひつゝ、力將棋となす含みである。此の時下手は、敵が四七金左と上つて来たからには、三六金留めに來るものと假定して充分である。そこで普通の應手では間に合はぬ順が出来るから、五二金左と應じて置く事が肝腎である。上手二五歩と突いたのは、三筋へ金を繰り出す準備である。そこで下手六二玉と圍つたのだが、これをする前に四二角と引きたいやうだけれども、なるたけならば五一角と引いた方が手廣く使へるから、先に六二玉と上る方が急戦の場合に有利である。上手三六金は豫定手段である。かうして上手が三六金と上つて早仕掛に出た時は四二角と引く方が先手に活用する順があつて、五一角と引くよりも勝つてゐる。上手四五歩と突いて急戦策を採つたのは、四筋で一歩を得て

他の筋に用ふる色々の含みを藏した手である。第二圖面より第三圖面に至る迄の指手

- ▲三三桂 〇四六金 〇四五歩 〇四七金
- ▲二二飛 〇三六歩 〇七二玉 〇三七金上
- ▲六二銀 〇二六金 〇五二銀 〇二七桂
- ▲四四銀 〇六八銀上

(面局の迄上銀八六は圖三第)

下士持駒 〇

九	皇			王		將	皇
八		飛		將			
七			將	〇	〇	〇	〇
六	〇	〇	〇				
五			步		步		
四	步		步	銀	銀	步	步
三			桂		角	步	步
二		飛		金	玉		
一	香			金	桂	香	

シナ 駒持手下

【講義】 敵が四筋から急戦して来たから強く進撃する意

- ▲五五歩 〇同歩 〇同銀 〇五六歩
- ▲四四銀 〇六九玉 〇二四歩 〇同歩
- ▲二五歩 〇同桂 〇六四角

(面局の迄角四六は圖四第)

下士持駒 〇

九	皇			王		將	皇
八		飛		將			
七			〇	〇	〇	〇	〇
六	〇	〇	〇				
五			步		角	步	步
四	步		步	銀	銀	步	步
三			桂		金		
二		飛		金	玉		
一	香			金	桂	香	

シナ 駒持手下

味で下手三三桂と跳ねる手はよい手である。上手四六金と引く處で四四歩と打ちたいが、敵に強く四五桂と取られ、四三歩と成つても五七桂と成られると甚だ危険に陥るから、防ぐ一手しかない。若し其の時向も五二と金を取つて行つても、敵に同金と取られて、敵の成桂が残る順となるから、穩かに四六金と引くのが至當である。下手四五歩と打つて位を取るのは三六金の逆襲法として肝要である。下手二二飛と廻るのは敵の飛車先を受けながら、機を見て逆襲する含みである。上手三七金スグは三筋へ繰り出して攻勢を採る含みである。茲で三七桂を早く跳ねて争ふ手もあるから(變化A)として後で詳しく説くことにしよう。下手目下の局面では急戦模様となつてゐる關係上、普通の美濃圍に組む暇がない。そこで六二銀と出て銀を進出させる準備をするのが肝腎の手である。下手四四銀右と敵に對抗する順となつては充分の棋勢である。上手六八銀上るは豫定の順である。

【講義】 下手五五歩と突いて歩を持つ含みは意味深長である。上手同歩は已むを得ぬ。下手同銀は豫定の順。上手五六歩は當然である。下手四四銀は一步を手に持ちてよい味である。上手六九玉よりは居玉では危険だからである。

下手二四歩は、手にせる一步を利用して攻勢に出たのである。上手同歩は已むを得ぬ。下手二五歩は二歩の連続である。上手此時二七金と引いては、下手に二四飛と指されて上手面白くない。本文に戻つて上手同桂と取るのは強く二筋で争ふ意味である。下手六四角と上つて軽く敵の飛車を威嚇するのは手筋である。

(面局の迄銀四四は圖五第)

寸法寸法 寸法寸法

九	星	と			王	將	将	星	
八					將	將	将	将	
七				将	將	将	将	将	
六	将	将	将	将					
五				歩					
四				歩	銀	角			
三				歩	銀	歩	歩		
二						金	玉		
一	香					金	桂	香	
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

桂飛 駒持手下

第四圖面より第五圖面に至る迄の指手

上手六七玉の構へに 對する下手の攻撃法

- ④四八銀 ④三四歩 ④五六歩 ④五四歩
- ④二六歩 ④三二銀 ④四六歩 ④四四歩
- ④二八金 ④四三銀 ④二五歩 ④三三銀
- ④一六歩 ④一四歩 ④六八銀 ④三二飛

【講義】 上手四八銀は模様を見て銀を手廣く用ひんとする意味。下手三四歩は角の活路を開いたもの。上手五六歩は中央に位を張り、銀の捌きを作らんとする含み。下手五四歩は位負をせぬ爲。上手二六歩は飛車の活路を討る手。下手三二銀は二三兩筋を防ぎ、駒組を全うせんとする手。上手四六歩は位取り。下手四四歩は四三銀と上る準備。上手三八金は下手の模様を窺ひ、金を廣く運用せんとする手。下手四三銀は陣容を整へ、飛車を廣く用ふる手。上手二五歩は飛車先の位を張り敵角に壓迫を加へんとする含み。下手三三銀は二四歩の交換を防いだ手。上手一六歩は敵の一五角の出

角落本組定跡 (石井秀吉)

- ④一九飛 ④二四飛 ④三三桂 ④一八歩
- ④二五歩 ④二九歩 ④二四歩 ④三三銀
- ④三三歩 ④四四銀 にて下手優勢である。

【講義】 上手一九飛は至當の避け場所である。故で二九飛と逃げず、三三桂成と攻めても、二八角成と飛車を持たれては問題にならない。下手二四飛は一步を得ると同時に、次に二八歩と打つて、駒徳を計りつゝ壓倒する意味で至當の順序である。上手三三桂成は、前述の手順を以て壓倒されては萬事休して了ふから、是又止むを得ない指手である。下手二八歩は豫定の行動で、飛車の交換を作つて寄せる含みである。上手二五歩は、此の局面で飛車を替へるのは甚だ面白くないが、飛車を何れに逃げて、二六飛と金を取られて活躍されるから、二五歩は絶対の手である。下手二九歩成及び上手二四歩は至當である。下手三三銀、上手二三歩成、下手四四銀迄は双方熱的指手である。是にて下手大いに優勢である。

(面局の迄飛二三は圖一第)

寸法寸法 寸法寸法

九	星	將			王	將	將	星	
八		將	將		將	將	將	將	
七		將	將		將	將	將	將	
六	將			將	將				
五				歩					
四				歩	銀	歩	歩		
三				歩	角	飛			
二				歩	飛				
一	香	桂		金	玉	金	銀	桂	
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

シナ 駒持手下

ない。上手六八銀は右翼に主力を集中して、極力防戦せんとする意味。下手三二飛は豫定の策戦であつて、自玉を右翼に移し、攻勢を採る本定跡の戦法である。第一圖面三二飛以下の指手。

- ▲三六歩 ▲六一玉 ▲五七銀 ▲七二玉
- ▲六八金 ▲五一金 ▲六六歩 ▲六四歩
- ▲五八玉 ▲八二玉 ▲七六歩 ▲七四歩

(面局の迄歩四七は圖二第)

手番 駒持 子色

九	皇	飛						飛	皇
八		銀							
七			飛	飛	王	飛		飛	飛
六	飛		飛	飛	飛	飛			
五		飛							
四	歩		歩	歩	歩	歩		歩	歩
三		歩						歩	玉
二			飛			金		桂	香
一	香	桂				金	銀		

シナ 駒持手下

【講義】 上手三六歩は桂の捌きをつけた含みと、三二に飛車を廻つた下手の策戦を見て、右翼に勢力を張らんとする意味である。下手六二玉は徐々に玉を圍ふ意味。上手五七銀は六八銀の懸鐘。下手七二玉は豫定の圍ひ。上手

(面局の迄桂七三は圖三第)

手番 駒持 子色

九	皇							飛	皇
八		銀							
七			飛	飛	王	飛		飛	飛
六	飛		飛	飛	飛	飛			
五		飛							
四	歩		歩	歩	歩	歩		歩	歩
三		歩						歩	銀
二			飛			金		桂	香
一	香	桂				金	角		

シナ 駒持手下

手八六歩は對抗の意味。下手八三銀は玉頭を堅め機を待つ手。上手三七桂は防戦の準備(此處で桂を上らず、三八飛と廻る戦法もあるが、それは別に第一變化三八飛廻りとして、後で講述することにしよう)

六八金は徐ろに活用を計り、左翼に變化せんとする含み。下手五二金は本組の準備。上手六六歩は位取り。下手六四歩は上手に六五歩と突かれては面倒になるので、その防ぎ。上手五八玉は居玉は危険であるから、中段に上つて模様を見る手。下手八二玉は豫定の行動。上手七六歩は金桂の運用を計りて、位を張る意味。下手七四歩は位負けをせぬ爲。

第二圖面七四歩以下の指手。

- ▲三七金 ▲七二銀 ▲二六金 ▲五一角
- ▲四七銀 ▲六三金 ▲六七玉 ▲九四歩
- ▲九六歩 ▲八四歩 ▲八六歩 ▲八三銀
- ▲三七桂 (第一變化)

【講義】 上手三七金は順次戦線に繰出す準備。下手七二銀は玉の圍を空うして攻撃に轉ずる準備。上手二六金は飛車と協力して敵の三二飛に對抗する意味。下手五一角は玉頭を守り、飛角の活動を自由にする手。上手四七銀は二枚銀の連絡を取つて、敵の仕掛けを待つ手。下手六三金

第三圖面三七桂以下の指手。

- ▲七二金 ▲二九飛 ▲七三桂 ▲七七桂
- ▲九二香 ▲八九飛 (第二變化) ▲六二角
- ▲八五歩 ▲同桂 ▲同桂 ▲同歩
- ▲同飛 ▲四五歩 ▲二七金

【講義】 下手七二金は玉の圍を安全にした豫定の順であるが(こゝで上手が三七桂と捌く手で、若し七七桂と飛べば、下手は七二飛と廻つて七五歩と交換し、以下七四金と繰り出して桂頭を攻める手が生じるのである。故に上手も下手が七二金と締めぬ内は、七七桂と飛ぶ手がないのである) 上手二九飛は左翼に活用せんとする豫定の順序。下手七三桂、上手七七桂は、豫定の手順で、双方玉の完全なる圍ひとなる。下手九二香は如何にも無意味の様であるが、三二に居る飛車が三二に引いてある時とか、又は二二に引いた場合には、九一飛と廻つて九筋から敵陣に攻撃する事も出来る。上手八九飛は八筋に於て桂を交換し、七八兩筋より攻撃せんとする意味。この八九飛の手で、上手が五

歩と二筋に於て角道を止めて指す手もあるが、それは第三變化として後で講述する。下手六二角は次に二二飛と廻り飛角協力して二筋より攻撃せんとする意味。上手八五歩、下手同桂、上手同桂の時、下手が敵の八五歩を同歩と取ら

(面局の迄金七二は圖四第)



ずと同桂で取るのが本筋である。何時でも必要に應じて取る事が出来るからである。上手が八五歩と突く手で九八香と自重して居たら、下手は二二飛と廻つて二四歩と突く意

廣いから、本文通り二二飛と指す方が好い。上手四五歩は銀を四筋へ繰り出して、三筋に於て、角道を止めんとする意味。下手二四歩、上手同歩は當然。下手二六歩は金を壓迫

(面局の迄飛九八は圖五第)



して二筋より強く攻めんとする意味。上手二八金は止むを得ない手。下手二四飛は二六歩の繼續。上手二五歩、下手二二飛は當然。上手四六銀左、下手三三桂は豫定。上手三五歩は四六銀の繼續であつて、敵の角道を止めて混戦に陥

味に指すのが好い。若し下手が四五歩と突き、金取りに當ると、上手二九飛、下手四六歩、上手同銀の順になつて上手の駒を捌かせるから面白くない。下手八五歩は當然、上手同飛もまゝ當然の手。下手四五歩は二六金に當つて角の力を發揮した攻撃手筋である。この時敵同飛と指せば五桂と打ち、同歩、四四歩にて飛車を捕獲する事が出来る。若し三五歩と指せば、同歩と取つて下手有利である。依つて本文の二七金は止むを得ない手である。

第四圖面二七金以下の指手。

- 二二飛 四四五歩 二四歩 同歩
- 二六歩 二八金 二四飛 二五歩
- 二二飛 四六銀 二三桂 二五歩
- 八四歩 八九飛

【講義】 下手二二飛は角の見通しを利用して攻勢を取らんとする手段。この二二飛と廻る手で、四六歩と取込み、上手同銀左の時四五歩と打ち、上手五七銀なら四四銀と位を張つて指す手もあるが、二二飛の方が實戦の場合應用が

れんとする手。下手八四歩は玉頭を安全にする手。上手八九飛は止むを得ない。第五圖面八九飛以下の指手。

- 二五歩 四四桂 二五桂 同桂
- 同飛 三七桂 二一飛 二五歩
- 二六桂 三八金 二七歩 同金
- 四八桂

【講義】 下手三五歩は當然である。この手で二五桂と取きたいのであるが、上手同桂、下手同飛の時、上手に三六銀と進まれる順があるから、本文の方が確かである。上手四四桂と打つたのは、敵の角道が通つて居ては防戦に困難であるから、止むを得ない手。下手二五桂、上手同桂、下手同飛は豫定の順序。上手三七桂、下手二一飛、上手二五歩は當然。下手三六桂は攻撃の急所である。上手三八金は四八桂ナリを防いだ手。下手二七歩ナリは手筋である。上手同金は止むを得ない。下手四八桂ナルは二七歩ナリの繼續である。

(面局の迄成桂八四は圖六第)



第六圖面四八桂ナリ以下の指手。

- ▲五七玉 ▲四七桂 ▲同玉 ▲二四桂
- ▲三五銀 ▲四六歩 ▲同銀 ▲同桂
- ▲同玉 ▲四四銀 ▲同歩 ▲同角

【講義】 上手五七玉は止むを得ない手である。この處五七金と上つたのでは、四七成桂、同金、三八銀と打たれて悪

角落本定跡(第三號の續き)

變化三八飛廻り

(面局の迄金三六は圖一第)



- ▲三八飛 ▲六一角 ▲二五歩 ▲四五歩
- ▲同歩 ▲三五歩 ▲三六歩 ▲三四銀
- ▲三五歩 ▲同銀 ▲同金 ▲同飛
- ▲同飛 (變化) ▲同角

角落本定跡 (石井秀吉)

圖面迄の指手及び講義は第三號参照。

い故、此處ではどうしても本文の通り五七玉と寄る一手である。下手四七成桂、上手同玉は當然の手。下手三四桂はきびしい攻めである。上手三五銀は下手を指し切りにさせんとする含み。下手四六歩は手順である。上手同銀は指し切らせる意味。この時五七玉と逃げれば、三八銀と打ち、三六金と逃げれば、四七歩ナリの手順があつて面白くない。又三八玉と逃げれば四七銀と打たれ、二八玉の時三六歩と打ち、又二六歩と打たれる順があつて苦戦になるから、本文の通り指すのがよい。下手同桂、上手同玉は當然。下手四四銀は敵の桂を切つて強い手である。上手同歩、下手同角は當然である。此の形勢を見るに、上手の玉は孤立の形。下手の玉は高美濃の堅壁に圍つてあるから、此の後違算なく進めば下手必勝である。

【講義】

上手三八飛は、前には此處で三七桂と跳ねて持久戦策に出た結果、下手の應酬宜しきを得て上手全滅に陥つたので、今回は下手の陣容備はざる隙を狙つて混戦に陥れんとする策戦を選んだのである。下手六二角は敵の二六金に當る意味で上手の三八飛廻りに對しては缺くべからざる應酬である。若し此の處で平凡に七二金と堅めては敵に三五歩と突かれ、角の活用が無いから悪くなる。上手三五歩は豫定の行動で、左翼へ配置する目的である。下手四五歩は、六二角と上つた時からの豫定の應手で、角を充分に活躍させる含みであつて、若し此の場合三五歩を同歩と取つては、二六金を左翼へ有効に活動させる結果となるから甚だ面白くない。上手同歩、下手三五歩は、双方當然の手。上手三六歩は、飽まで二六の金を動かせる意味で至當の指手である。下手三四銀の所で同歩と取つては、同金、三五歩、四六金と指され敵の術中に陥る事になるから、幾分陣形は亂れるが強く決戦に出たのである。上手三五歩の所で四六銀左と上つて極力防戦しても三六歩と取込まれ同金、

二五銀で悪いから、強く應戦したのである。下手同銀、上手同金は、共に手順。下手同飛は、同角と取つては四六銀ナくと指され非常に悪くなる。上手同飛と交換せしは以下指手の如く三一飛車打を狙つた意味である。此の處同飛と交換をせず堅く三六銀と打つて徐々に對抗する手段もあるが、それは變化として別に述べる。下手同角は手順。

(面局の迄角同五三は圖二第)

Diagram 2: Go board position showing pieces like King, Silver, Gold, Knight, and Pawn on various intersections.

歩歩金飛 駒持手下

第二圖面以下の指手。

【講義】 上手三一飛は、前に三五同飛と交換した時からの豫定行動。下手五七角成と、銀角交換したのは止むを得ない指手。上手同玉の所で、同金と取つては六九飛と打たれて悪いから、譜の如く同玉と指して模様によつては、入玉の含みを狙つたのである。下手七二金の所で、七二銀と引いて後に敵が入玉模様を企てた場合五二金と上つてそれを防止する意味もあるが、七二銀の時敵が他の手を指さず直ちに八五歩と上下より連絡を採つて攻撃されて非常に六ヶ敷くなるから、下手としては不利である。上手三九飛成は、差當り敵を攻める事が不可能であるから、自陣に飛車打を防ぎつゝ入玉を計る含み。下手三八歩は、敵龍が好位に居て攻勢が採れないから、譜の如く打つて敵龍の働きを幾分牽制する意味で軽い好手である。上手同銀は姿が悪くなり、且つ手順に遊桂を活躍されて好ましくない手である。

るが、同龍と取つては五九飛と打たれて三九龍と引いた手が無意味になるし、又他へ逃げては三九飛と打たれ矢張り面白くないから、同銀と取る手が當然である。下手三三桂は遊び駒利用の意味で好い。上手四六銀は四五桂跳ねを防いだ手で、若し此所で四六銀と打たず強く四七銀と上つて飛筋を通し一氣に入玉を計れば、其の時二六飛と打たれる好手があつて、三六歩又は三六銀打と凌いでも四五桂、四六

(面局の迄銀六三は圖三第)

Diagram 3: Go board position showing pieces like King, Silver, Gold, Knight, and Pawn on various intersections.

歩歩金飛 駒持手下

【講義】 上手三四角は、四五桂跳を防ぎつゝ成角を作つて障害物を除く含みである。下手八七飛は、左翼より直接攻撃しては指切る恐れがあるから、左右より挟撃するのが此の場合唯一の好手段である。上手七七桂は至當。下手八八飛成は豫定。上手二三角は豫定の運び(此の所二三角と成らず三七歩と打てば、四七金、同金、同銀成、同玉、六八龍の順となつて飛車先が重くなるのと、未だ角が成つていないから玉の進出は絶対不可能である)。下手三二歩と一且桂を守つて敵の應手を窺つたのである。(此の所三二歩と打たず強く五五歩と攻めれば、同銀、四五桂、四六玉、六八

龍、三六玉で入玉の形となる。又五五歩と突かず七五歩と攻めても三三馬、七六歩、七八歩、七七歩成、同歩、七六歩同歩、七七歩、三七歩、七八歩成、三六歩、六八と、三七銀引の結果で矢張り完全に入玉の順となるから、本譜の如く三二歩と隠かに指したのは好手である。上手三七歩は、後に龍の進入が消へて面白くないが、四四歩と突いても五三金と寄られて危険になるから、三七歩と打つて三六の銀を

(面局の迄歩二二は圖四第)



除く方法を講ずるより致し方ない。下手四五桂は三二歩の繼續で豫定の指手。上手同銀は至當。下手二二歩は角筋を反らす意味と、敵の入玉模様を未然に防ぐ含みである。此の處一見三三金と打ちたい處であるが、其時同馬、四五銀二四馬、五五歩の時、七八金と先手に凌がれて切れ將棋になる。

(圖終最)



三四馬 四七金 同銀 同銀
同玉 六八龍 にて下手優勢。

【講義】 上手三四馬は、四五銀の連絡上當然である。下手四七金は、芳しい筋ではないが、此の場合他に適當な方

(面局の迄飛五三は圖五第)



法はない。此處で若し三三歩と進めれば、三五馬、四五銀同馬、七八銀の時、六七金、或は五八金と寄られて、七九の銀が遊びとなる爲め切れ模様になる。上手同銀は當然。

下手同銀成は豫定。上手同玉、下手同龍にて優勢である。一見しては下手駒損となつて居り、且つ上手に金銀桂の手駒ある故甚だ疑問のやうに思はれる點もあるが、此末下手は駒徳の含みを以て、二、三兩筋の置歩を頼りとなし、上下より徐々に攻撃を探れば、味方は堅固であるから、自然に好局となること疑ひないと思ふ。
變化三五飛の處三六銀打以下の指手。
第五圖面以下の指手。

- 三四銀打 三三飛 三五歩 七二金
- 四六銀 八五歩 七七金 八六歩
- 二八飛 二二飛 八六金 六五歩
- 同歩 五二角

【講義】 上手三六銀打は、前局では同飛と交換して三二飛打を狙つて決戦に出たが結果敗局に終つたので、今度は譜の如く打つて持久戦の方針を採つて見る。下手三二飛、上手三五歩は、双方豫定手順。下手七二金は玉側の堅め。上手四六銀左の處で、二八飛と攻勢に出れば、歩切れの爲

め三五角と指され苦戦に陥る。尙玉頭に危険が伴ふから形としては四六銀直ぐと指したいが、その時飛車を牽制の意味に二六金と打たれてゐると以下の指手に窮する。下手八

(面局の迄角三五は圖六第)



歩歩金 駒持手下

五歩は、敵は右翼に全力を注いで居る局面故其の筋より挑戦を企つれば勢ひ損を招くから、最も薄い桂頭を狙ふ意味に突出したのは最善の指手である。上手七七金は、同歩と取つては八八歩の手があるから、當然の防ぎである。下手

れ玉頭が非常に危険になる。(此の所八八歩と指さず、四四歩、三四歩の二手段があつて何れも本譜の八八歩打よりも劣つてゐるが、参考迄に手順を示す。)

第一、三六銀を中央へ活躍する意味に四四歩なら同角、

(面局の迄歩五七は圖七第)



歩歩金 駒持手下

四五銀右、七七角成、同玉、六五桂、六七玉、六六歩、同玉三三桂、四四銀、四五歩、三七銀、五七金。

第二、桂徳を計る意味に三四歩と突出せば三五歩同銀ス

角落本組定跡 (石井秀吉)

八六歩は至當。上手二八飛は豫定手段。下手二二飛、上手八六金は手順。下手六五歩は、玉頭の手薄に乗じて以下指手の如く角の活用を計つた好手である。上手同歩は當然。下手五三角は豫定の行動。

第六圖面以下の指手。

- 八七金 ○八六歩 ○七七金 ○七三桂
- 八八歩 ○七五歩

【講義】上手八七金は、菱縮の形となつて弱い様であるが、八八飛と廻れば一旦八四歩と防がれ次に二四歩と突出され、同歩と取れば二八歩打の手があつて面白くない。又七五歩と留めれば同歩と取られて次に七四金の順に壓迫される。下手八六歩は豫定。上手七七金は當然。下手七三桂は、敵金を攻めてと金を作り、而して八六角出を狙ふ含みである。上手八八歩は、捨て、置けば六五桂と跳ねられ、六六金なれば八七歩と成られて、六五金と桂徳しても八六角と進出されて悪い。又六五桂の場合六六金と指さず七八金と引けば、一旦六六歩と打捨られ次に六四金と上ら

グ、六五桂、七八金、三五角、同銀、五七金にて何れも必勝である。

下手七五歩は、敵に八八歩と受けられて見れば、六五桂と飛んでも六六金と上られ八七歩成の手がないから、譜の通り指し角の運用を計りつゝ七四銀と上つて、六二飛廻りを含んだ好手筋である。

第七圖面以下の指手。

- 七五歩 ○同角 ○六六金 ○八四角
- 七五歩 ○七四歩 ○三四歩 ○七五歩
- 三三歩 ○同桂 ○三四歩 ○七四金
- 三三歩 ○六二飛

【講義】上手七五歩、下手同角、上手六六金までは、双方當然の指手。下手八四角は七五歩と突いた時よりの讀筋で、玉頭を威嚇する意味である。上手七五歩は、直ちに七四金と指されては次に六二飛廻りが厳しいので問題にならないから當然の受けである。下手七四歩は、餉まで六三の金を七四へ捌き六二飛廻りを含み飛角金協力して一舉に

勝を収めんとする深算である。(此處で七四歩と指さす六四歩打の方が直接金に當るだけ早い様であるが七七桂と對抗されて幾分混戦になる) 上手三四歩は、最早右翼の防戦が

(面局の迄飛二六は圖八第)

下手持駒 将

九	皇	桂					桂	皇	
八		飛					歩		
七				將	王				
六	歩		將	將	歩	歩	歩	歩	
五		歩		歩	歩	金	角	歩	
四	歩					桂	銀		
三		歩				金	玉		
二					飛				
一	香							香	
		一	二	三	四	五	六	七	八

歩歩歩金 駒持手下

困難であるから、三三歩と成つて桂徳を計る意味で當然の順である。此處で若し三四歩と突かず七八飛と廻れば、六四歩と打たれ七四歩、同金、七五歩、六五歩の時七四歩と金を取つても六六歩で、何れへ逃げてても王手飛で問題でな

い。下手七五歩、上手三三歩成、下手同桂、上手三四歩、下手七四金、上手三三歩成までは双方當然の指手。下手六二飛にて大いに優勢である。

×	×	×	×
×	×	×	×
×	×	×	×
×	×	×	×

角落戦の研究

昭和十年七月二十五日印刷
昭和十年八月一日發行

定價 五十錢

編輯者 福岡益雄
東京市神田區神保町三ノ二一

印刷者 土屋弘
東京市小石川區戸崎町九四

印刷所 中央印刷株式會社
東京市小石川區戸崎町九四

東京市神田區神保町三ノ二一

發行所 金星堂

電話 九段四〇六八番
銀座東京三三二八番

10.7.27

302
129

302
129

終